福岡大学研究部論集B 社会科学編 Vol.14, 1-54p（2023.12）

教職履修者のリフレクションを促す「教職実践演習」の取り組み

―養成段階における教員の資質・能力向上を意識して―

○伊藤亜希子※、芦谷　将徳※※※※、満身　史織※※※、坂本　憲治※※
入江　誠剛※、土本　　功※、和田美千代※、植上　一希※
勝山　吉章※、髙妻紳二郎※、小柳　康子※※※※※、佐藤　　仁※
添田　祥史※、田村　隆一※、徳永　　豊※、長江　信和※※
藤田由美子※、松永　邦裕※、本山　智敬※、山岸賢一郎※※
吉岡久美子※

１．本稿の目的と背景

2010年度入学生より必修科目となった「教職実践演習」は、４年間の教職課程における学びの集大成として位置づけられ、10年以上が経過している。導入が決定した当初、教員として求められる以下の４つの事項を本科目に含めることが適切とされた。第一に「使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項」、第二に「社会性や対人関係能力に関する事項」、第三に「幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」、第四に「教科・保育内容等の指導力に関する事項」である。これらは、教員の資質・能力に関わるものである。教員の資質・能力に関わっては、2012年の中央教育審議会答申（「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」）で明確に示され、「学び続ける教員像」を確立する必要性が指摘されている。

この10年後となる2022年には、「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）」（以下、2022年答申）が発表され、「令和の日本型学校教育」を担う教師及び教職員集団の姿、求められる資質能力が示されている。そこでは、「『令和の日本型学校教育』を担う教師の姿は、①環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続けている、②子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている、③子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている」（中央教育審議会 2022、５頁）と示されている。このような教師の姿を現実のものとするためには、教師自身が学び続けることが不可欠である。本答申では、「新たな教師の学びの姿」として、「変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという『主体的な姿勢』」、「求められる知識技能が変わっていくことを意識した『継続的な学び』」、「新たな領域の専門性を身につけるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した『個別最適な学び』」、「他者との対話や振り返りの機会を確保した『協働的な学び』」を挙げている（同上、22頁）。また、養成段階を含め教職生活を通じた学びにおける「理論と実践の往還」の実現も掲げており、「学部段階での養成も含め、理論と実践を往還させた省察力による学びを実現する必要がある」（同上、23頁）と述べている。その際、理論の実践化と実践の理論化の双方向性や自らの実践について理論に基づいた省察が必要になることが挙げられている。

このような「新たな教師の学びの姿」や省察は、養成段階の集大成である「教職実践演習」でも意識されなくてはならないだろう。そこで本稿では、福岡大学における教職実践演習の事例を分析し、「令和の日本型学校教育」を担う教員養成に向けて、「新たな教師の学びの姿」の実現や省察を意識し、福岡大学における教職実践演習及び教職課程の在り方を検討する。

それぞれの事例に入る前に、福岡大学の教職課程につ

※ 人文学部教育・臨床心理学科　教授
※※ 人文学部教育・臨床心理学科　准教授
※※※ 人文学部教育・臨床心理学科　講師
※※※※ 人文学部教育・臨床心理学科　助手
※※※※※ 医学部看護学科　教授
（○執筆者代表）

いて概要を述べておきたい。福岡大学は、9学部31学科、大学院10研究科34専攻を擁する私立総合大学である。学生数は大学院生を含め2万人を越える。教育学部はなく、課程認定を受け教職課程を設置している。教職課程を履修する入学生はだいたい700名程度であり、実際に免許取得に至るのは、毎年300～350名程度である。過去5年間の教職実践演習の履修者数及び開講クラス数は、次の表の通りである。

表1　教職実践演習（中・高）の履修者数及び開講クラス数

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
履修者数	306	299	299	306	322
開講クラス数	22	23	22	22	22

教職実践演習は300名程度の履修者に対し、19名の担当者で22～23クラス開講している。クラス規模は20名以下の少人数クラスとして上限を設定しており、各クラス平均すると13～15名ほどの規模となっている。これに加え、養護教諭免許を取得予定の学生を対象にした「教職実践演習（養護教諭）」を1名が担当し、1クラス開講している。

「教職実践演習（中・高）」のシラバスは共通シラバスであり、履修カルテの活用や学びの省察、学校現場の具体的課題に取り組むという点は周知しているが、19名の教員がそれぞれの専門を活かしながら、各クラスの内容を構成し、教職実践演習を担当している。「教職実践演習（養護教諭）」のシラバスは共通でないものの、履修カルテの活用や養護実習から感じた具体的課題に取り組むなど、教職実践演習全体で重視するポイントは共通している。

福岡大学における教職実践演習の取り組みについては、教職実践演習が開始して3年目に高妻ら（2016）によって整理がなされている。その際に、「多様な学生が存在し、多様な教員による多様な教職実践演習が行われていることが、福岡大学の教職実践演習の特色である」（33頁）とその特色が示された。そして課題として、実践的学びの機会の設定と教職課程全体における位置づけ、教職に就かない学生も履修するなかでの学生指導についての共通理解、以上2点が挙げられている。2016年段階に示されたこれらの特色と課題も意識し、これらが時代に応じて変容しているのか否かも念頭に置きつつ、教職実践演習の取り組みを概観していく。

以下、各教員が担当した教職実践演習の取り組みについて、特色ある取り組み、学びの振り返りの促進や教職への意識付けの向上など特に良かったと感じられたもの、教職実践演習の課題についてまとめていく。各事例はそれぞれ担当教員が執筆している。最後に20の事例を踏まえた上で、「令和の日本型学校教育」を担う教員養成に向けた今後の福岡大学の教職実践演習や教職課程の改善について論点を提示する。なお、本稿の主題にある「リフレクション」に関わり、リフレクション、振り返り、省察といった用語が出てくるが、これらについては統一を図ることなく、用語の選定は執筆者に任せている。

2．教職実践演習の具体的取り組み

以下、事例Aから事例Tの20事例を記す。

〇事例A

（1）授業の構成（15回分）

本演習は、教職課程の総まとめの科目として、4年間の教職課程で学んだ知識と教育実習での経験をもとに、現在の学校教育が直面する課題に対して、教師としてどのような実践が求められているのかを、討議やロールプレイを通して検討を行った。

前半は、教育実習での経験やVTR視聴をもとに生徒指導の課題や教師に求められる資質などについての討議を中心に、後半は、不登校・いじめ・特別支援教育・学力問題などのテーマで受講者の発表をもとに、討議を行った。2022年度の実際の15回の授業の流れは、以下の通りである。

＃1：イントロダクション（スタートアップ授業）
＃2：発表テーマのオリエンテーションと日程決め
＃3：教職課程の学習の振り返り（履修カルテをもとにした討議）
＃4：学校の実践的課題（教育実習等の体験をふまえての討論）
＃5：教師に求められる資質（VTR視聴をもとにしたディスカッション）
＃6：生徒指導についての課題（VTR視聴をもとにしたディスカッション）
（＃7～14　課題テーマごとの発表及びディスカッション）
＃7：教師と児童生徒のコミュニケーション　－学級崩壊について考える－
＃8：保護者対応について
＃9：キャリア発達を促す効果的な取り組みについて
＃10：これからの部活動のあり方について　－教師の責任はどこまで？－
＃11：子どもたちの学ぶ力を伸ばすために
＃12：いじめ防止のための心の在り方をはぐくむ
＃13：不登校児童生徒への対応　－教員として力になるために何ができるのか－
＃14：インクルーシブ教育のために必要な教育体制・環境　－発達障害を中心に－
＃15：まとめ

（2）発表テーマの事例紹介

＃11：子どもたちの学ぶ力を伸ばすために

学力を学ぶ力（知識や技能に加えて、学ぶ意欲や自身

で課題を見つけ主体的に判断、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力までを含む）という視点から定義し、学力向上のための取り組みの現状について、発表者がプレゼンテーションを行った。また、教育実習校での中学２年生を対象とした「学ぶきっかけについてのアンケート」結果をもとに、生徒の主体性な学びに関する現状を整理し、子どもたちの発問の仕方や生徒自身が教える側になるなどの主体的な活動をどのように授業に取り入れるかなど具体的な方法について、受講者全体で討議し検討を行った（図 A-１）。

図A-1　全体討議の様子

（3）本授業の振り返り（受講者の感想から一部抜粋）

・学力＝「学ぶ力」ととらえて、そのきっかけを作るという内容の発表でしたが、確かにその通りだなあと思いました。主体的に学ぶということは、「なぜ」と考えること、その「なぜ」を解決していこうとすることを実践しなければならないという考え方は、とても納得できるものでした。しかし、実際に、小学校・中学校・高校の時代に、自ら「なぜ」と考えるきっかけを得ることはとても難しいことだと思います。教員の働きかけでそのきっかけを与えられるとよいですが、それを具体的にどのように実行していくかは、とても難しいことだと感じました。

・教育実習では、授業の導入場面で生徒に「なぜ」と考えさせることに苦労した。私が、中学校や高校で、実際に「なぜ」と考えさせられる授業に出会ったことがないなあと思った。今日の発表とディスカッションを通して、その当時と今では、授業の展開の仕方も違うのだということが明確になった。

・生徒の学ぶ力を伸ばすためには、教師の発問などのきっかけづくりが大事だという話を聞いて、私の教育実習の授業では、「なぜ」と生徒に考えさせる時間をとっていなかったので、一方的な授業になっていたのだと思いました。生徒の主体的な学びを促すために自由に考えられる時間の必要性を考えさせられました。

（4）まとめ

本演習では、４年間の教職課程の総まとめとして、学校教育の課題についての少人数での発表とそれをもとにした討議を行った。受講者の学生の感想からは、それまでの教職課程科目受講時と異なり、受講者同士で討議を行う中で、学校教育におけるさまざまな課題を、教師として、どうとらえ・どうするのかという実践的な検討を試みる機会になったと考える。

後半の授業は、不登校・いじめ・特別支援教育・学力問題などのテーマで受講者の発表をもとに、受講者全員で討議を行った。発表にあたっては、受講者は、それまでの教職課程科目で習得した知識を整理し、教育実習等の体験と関連づけながら、学校現場の実際問題として、課題や問題点を明らかにし、教師としてどのように対応しなければならないのかについて学びを深める機会となったのではないだろうか。

○事例 B：査定授業を教職実践演習で再査定する

2022年度の教職実践演習では、母校実習の査定授業を再度行い、学生相互が批判しあうことで、より深まった再査定を目指した。

当該演習には12名の履修者がおり、12名の査定授業の再査定授業を行ったが、本稿では紙幅の関係から１人の再査定授業を取り上げる。ちなみに、12名の内訳は、経済学部１名、スポーツ科学部５名、人文学部（歴史）３名、人文学部（日文）１名、理学部（数）２名である。

（1）教職実践演習への期待ー教職カルテを振り返ってー

まず、教職課程で何を学び、教師としてのあり方、生き方をどう形成してきたのかを教職カルテで振り返らせた。そして、教職実践演習への期待を語ってもらった。以下に紹介する。

> この授業で学べることができると思うことは、教育実習での学びを通して、教員としての資質能力や、教科指導力、生徒指導力、学級経営力を見につけることが出来るのではないかと考えている。また演習形式なので、他人の意見を丁寧に聞く態度を身につけることや、自分の意見をきちんと述べることができるようなコミュニケーション能力を身につけることが出来るのではないかと考えている。これまで理論的な授業が多かったので、理論的な学習を踏まえた上での実践的なノウハウを身につけることが出来たら良いと思う。

これは本稿で紹介する再査定授業を行った学生のコメントである。非常に真摯に教職実践演習の授業に取り組んだことがうかがえる。授業担当者としても、できるかぎり学生の期待に応えることを目指した。

（2）査定授業を再査定する

1）高等学校地理歴史科（日本史 A）再査定授業

以下に紹介する履修生（人文学部歴史学科）は、日本史 A において「地租改正」について査定授業を行った。本人の学習指導案を掲載する。

ⅰ：単元名　地租改正

ⅱ：単元設定の理由

①単元観

明治新政府は、天皇を中心とする国づくりを目指し、富国強兵というスローガンのもとで、版籍奉還から廃藩置県・秩禄処分・徴兵令に至る一連の改革を行い、中央集権体制を確立した。政治の中央集権化とともに、財政・経済の近代化も新政府の重要な課題であった。明治新政府は、地租改正により土地制度を改革して財政収入を確立させ、殖産興業による産業の発展を目指した。また、新しい国づくりが始まると、西洋文化や生活様式が盛んに取り入れられ文明開化と呼ばれた。

②生徒観

本クラスの生徒は、男女とも非常に仲が良く、互いに教え合うことができる関係性を有している。また、社会科や歴史分野に関心を持ち、積極的に授業に参加する生徒の多いなか、歴史に対する苦手意識を持っている生徒も多い。それは、おそらくこれまでの授業のなかで基礎的事項が定着していないからだと思われる。そこで、授業の際には、ポイントを絞った指導を心掛け、なおかつ丁寧に確認しながら進めていきたい。

③指導観

アメリカのペリー来航と日米和親条約の締結によって開国、ついで日米修好通商条約の締結によって貿易が始まるなど、日本がこれまでの国是を改め、資本主義世界市場に組み込まれたことを理解させる。また、開国後のあるべき姿を巡って、尊王攘夷派と公武合体派に分かれ国内が混乱したことを理解させる。最後に、明治政府の富国強兵というスローガンのもと、欧米の強国に対抗できる国をつくるため、経済を発展させ、強い軍隊を持つための改革を行ったことを理解させる。

ⅲ：単元の目標

①ペリー来航と日米和親条約の締結によって開国、日米修好通商条約の締結によって世界貿易市場に組み込まれたことを理解させる。

②開国後の国内において、尊王攘夷派と公武合体派に国内は二分され国内が混乱したこと、結果として倒幕運動へと傾き江戸幕府が滅亡したことを理解させる。

③明治政府が、富国強兵というスローガンのもと、版籍奉還から廃藩置県・秩禄処分・徴兵令に至る一連の改革を行い、政治の中央集権化を進めたことを理解させる。

④明治政府が、政治の中央集権化とともに、財政・経済の近代化も進め、地租改正や殖産興業が行ったことを理解させる。

⑤明治新政府が、西洋の国々に追いつくため、西洋文化や生活様式を盛んに取り入れ、文明開化と呼ばれたことを理解させる。

ⅳ：指導計画（全12時間）

①アジアの激動と日本の開国…2時間

②江戸幕府の滅亡…2時間

③明治維新…2時間

④富国強兵…2時間

⑤明治初期の外交…1時間

⑥殖産興業と文明開化…3時間（本時2時間目）

ⅴ：本時の主題　「地租改正」（高村直助ほか『日本史A 改訂版』（山川出版社 pp.47-48））

ⅵ：本時の目標

①地租改正の実施によって、全国同一の基準で、一律に現金で徴収し、安定した政府の収入の確保が可能になったことを理解できる。【知識及び技能】【思考力、判断力、表現力等】

②農民が従来の年貢と変わらない税負担や急速な改正事業などに不満を持ったことが、地租改正反対一揆に繋がったことを理解できる。【知識及び技能】【思考力、判断力、表現力等】

ⅶ：指導上の留意点

①地租改正の実施は、旧来は物納であるため、手数がかかるうえ、地域によって税率が不統一で、政府の収入の確立を図る必要があったことに注意を向けさせる。

②明治政府が従来の年貢による収入額を減らさない方針で実施したため、農民が税負担の軽減を求めて一揆を起こしたという因果関係に注目させる。

viii：本時の指導過程

過程	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価の観点	形態	配時
導入	○明治政府の国づくりの基本方針を復習する。 ・富国強兵	・明治政府が、欧米の強国に対抗できる国をつくるため、経済を発展させ、強力な軍隊を持つための改革を急いだことを理解させる。 発問：明治政府の国づくりの基本方針は？	明治政府の国づくりの方針が理解できているか。【知識及び技能】	一斉	5分
展開	目標：地租改正とは何か理解しよう。 １．地租改正の前準備 ⑴教科書を読む ⑵教師の説明を聞き板書を写す。 《キーワード》 ・田畑勝手作の許可 ・田畑永代売買の解禁 ・地券の発行 ２．地租改正 ⑴教科書を読む。 ⑵教師の説明を聞き、板書を写す。 《キーワード》 ・地価　・３％・金納 ・地券所有者 ・地租改正反対一揆 ・2.5%	・教科書を音読させる（１段落まで） ・なぜ地租改正を実施する必要があったのかその背景をきちんと理解させる。 ・地租改正を実施する前準備として、封建的諸制度が撤廃されたことに注意を向けさせる。 ・地券の発行の目的について説明する。 ・教科書を音読させる。（２段落まで） ・江戸時代とどう変わったのか、比較しながら説明する。 ・教科書を音読させる。（３段落まで） ・政府が従来の年貢による収入額を減らさない方針で実施したため、農民が税負担の軽減を求めて一揆を起こしたという因果関係に注目させる。	地租改正を実施する前準備として、江戸時代に定められた制約が撤廃されたことを理解できたか。【知識及び技能】 地租改正の変更点を江戸時代と比較して理解できたか。【知識及び技能】 政府が従来の年貢による収入額を減らさない方針で実施したため、不満を持った農民が、税負担の軽減を求めて一揆を起こしたことを理解できたか。	一斉	20分
展開	発問：地租改正によって政府の財政はどう変わったか？ ⑴個人で考える ⑵周囲の人と話し合う	・地租改正をなぜ実施する必要があったのかその背景に注意を向けさせる。 ・机間指導を行い、活発な議論になるよう促す。	地租改正の実施によって、政府が安定した収入を確保することを理解できたか。【知識及び技能】【思考力、判断力、表現力等】	個人→班	15分
まとめ	本時のまとめ ○板書を見ながら、本時の振り返りをする。 ○教師の説話を聞く。	・板書を使いながら、地租改正の実施によって政府が安定した収入を確保することができたことを強調する。	地租改正の実施によって、政府が安定した収入の確保が可能になったことを理解できたか。知識及び技能】	一斉	10分

（3）履修学生相互の批評から

査定授業の再査定を終えて学生による相互の批評を行い、以下のような感想を得た。

・授業担当者の反省

私が行った授業は、知識をしっかり教えようと思って、少し一方的な授業になってしまった。もっと生徒が活動する時間をとる必要があった。もっと、資料集で写真などを使いながら分かり易い授業を進めるべきだった。

・履修学生の感想（学生の感想に重複が多いので、簡略化した）

①歴史の授業は知識が必要なので、その知識をもう少し分かり易くかみ砕いた内容で説明してあげると良かったと思う。読みづらい漢字も、最初に説明があれば良かった。

②もう少し、画像を使って質問を増やせばよかった。言葉のキャッチボールが必要。

③話題を身近なものに近づけるともっと、興味を引き立てられると思った。

④板書をしている時間、間が空くので教科書を読ませるなどして時間を有効利用してはどうか。

学生たちの批評は、簡略化すると以上のようなことを述べていたが、再査定をした学生たちには好評だった。

（4）おわりに

中教審での議論でも見られるように、母校実習については、その「評価の甘さ」が指摘されてきた。しかしながら、教育実践演習を指導してきた経験から言うなら、その指摘の根拠は希薄である。母校故に甘やかされる実習生もいれば､母校故に厳しく教育される実習生もいる。むしろ何の関係もない学校に行った実習生は、実習校に慣れるだけで実習を終える場合もある。したがって、本稿でも述べるように、教職実践演習で実習校での査定授業をさらに再査定することは重要である。本稿では触れなかったが、実習校の査定授業がうまくいかず自信をなくす学生も多い。そのような学生に対して、学生同士で査定授業の内容を批評しあうことで自信を取り戻す学生もいる。教職実践演習における再査定は有効である。

〇事例 C

本演習では教育実習での体験を土台とし、グループワークを積極的に取り入れた内容が多く展開された。テーマは、教育実習での現場の実際を主題としたもの、現場での課題をめぐるものなど多岐にわたった。ここでは（1）取り組み事例、（2）学びの検証として各回授業の感想と FURIKA の結果を紹介し、（3）良かった点と課題をまとめ、考察とする。

（1）取り組み事例

授業の全体像について紹介する。登録者は 4 学部12名であった。オリエンテーションでは、シラバスを確認した上で、教育実習を振り返り、教職履修カルテで自身の到達点と課題を整理の上、構想発表へと進めた。15回の演習を効果的に進めるため、moodle を積極的に活用し発表者は資料の事前配布を行い、全員が事前にプレゼン資料を確認した上で、授業に参加することを予習として確認した。復習は、自身の発表について参加者からのフィードバックを踏まえあらためて課題を整理し今後に活かすことを確認した。

プレゼンテーションでは、①双方向の授業を主体とすること、②出来る限り授業のどこかで ICT の要素を取り入れるよう指示した。演習で扱われたテーマは表 C-1 のとおりである。

（2）学びの検証

ここでは、1）授業後の「感想」（moodle の活用）、2）FURIKA の回答から検証した。なお 1）については、双方向の授業展開に焦点をあて、グループワークと ICT の活用に関する感想を抽出した。感想は個人情報に関する記載以外は原文ママとした。

1）各回授業後の「感想」（moodle の活用）

①発表者として

・これまでの模擬授業や教育実習において、グループワークやグループディスカッションなどの活動を上手く展開できるかだろうかという不安や恐怖心から、勝手に苦手意識を持っていたが、今回の発表を通じて、私自身の持ち味を生かしたやり方があるのだと実感できた気がする。課題についてはもちろんのこと、受講生の発表や先生のお話を参考にしながら、より良い展開や工夫、自身のスタイルについても考えていきたいと思う。

・教育現場の問題として、何度も取り上げられてきた問題について､今回の授業で考えることができて良かった。ジェンダーなどの問題が、生徒の学校生活に影響して充実した生活を送れないということはとても問題だと思っていたので、この場で話し合い理解した上で、少しでも

表C-1　演習で扱われたテーマ

第 1 回目：オリエンテーション
第 2 回目：構想発表、発表準備
第 3 回目～14回：各回プレゼンテーションとフィードバック（以下はテーマ）
・どのような制服あるいは服装の規定がよいか
・適切な距離感、関わり方とは
・いじめについて
・外国籍の児童・生徒への理解
・学校現場におけるグローバル化
・不登校について
・学力低下の原因、改善策について
・体力低下、将来への影響と対策
・部活の地域移行について
・スマホをめぐる問題とそれへの対応
・キャリア教育と進路指導
・LGBTQ について考える
第15回目：これから求められる授業について、まとめ

問題について考えることのできる時間を作ることが出来て、自分のためになったと思う。また、教師との関係性の築き方も生徒にとってはとても重要なものであり、良い関係性を目指して、努力していくことが大切なのだと思った。

・今回グループワークやグループディスカッションを行ったが、まだまだ力不足を感じた。教育実習ぶりのみんなの前に立っての授業だったので、緊張して声を張ることがあまりできなかったのでもう少し声を張りたい。資料に関しては、データや表などをいれたらもっといいと指摘してもらえたので今後に活かしていきたい。

・今回、グループディスカッションを計画してみて、導入の部分や、板書の部分などは良かったと感じるが、皆さんから改善点を聞いて、苦手な生徒に対しての深掘りや、興味が持てるフィードバックなどができていたらより良かったと思う。また、フロアから出てきた意見に対して、例えばどのようなことが挙げられるかなどを聞くと、より深掘りした授業になったと思う。フロアから頂いた意見を今後に活かして、生徒が楽しいと思える授業作りができたら良いなと感じる。

・LGBT に対して自分自身も考えるきっかけというのはなかったので、この授業を作ってとてもいい経験になった。発問の仕方も個人を特定してしまう内容になると当事者の人が気分を害してしまうこともあると思ったので、発問とか話の仕方とか配慮や工夫を沢山できるといいなと思った。映像資料や写真資料などをたくさん提示して生徒たちにもっと動きのある授業を展開させることが出来ればより良かったかなと思った。

②生徒役として

・グループワークやグループディスカッションでそれぞれの意見を出し合いいい話し合いだったと思う。発表者は意見を自分の言葉に置き換えて発信してたので良かった。

・教育現場でのグローバル化という視点は考えたことがなかったので、実りのある発問だったと思った。テーマがとてもよかったので、それが活かされるように板書を活用したりまとめを口頭以外でも行ったりするといいのかなと思った。スマホを使って実際に取り組みを調べてみるのはすごくいいと思ったので、ICT の活用も視野に自分も考えていきたい。

・データや新聞記事などが示されていることで、問題提起がしっかりとなされていたように思う。そのため、何について考えるのかが明確であり、付箋を活用する工夫も相まって、とてもグループディスカッションに取り組みやすいと感じた。これまでの模擬授業では、今回のようなスタイルはあまりないものだったため、なるほどそういうやり方があるのかと新鮮に感じたし、大変勉強になった。

・私は普段、LGBTQ についてあまり考えたことはなかった。しかし、男女の制服や服装を考えていく際に、LGBTQ の児童生徒を配慮した、制服や服装の規定を定めることが大切であると思った。次に生徒との関わり方について教師と生徒の適切な距離感について考える際に、「適切な距離感」と言葉で言うことは簡単だが、具体的にどんな距離感なのかを言語化していくことの難しさを実感した。生徒一人ひとり、適切な距離感は異なっていると考えられるため、今後私が教員の立場となり生徒と関わっていく際には、生徒を観察したりコミュニケーションをとる中で適切な距離感を見つけることが必要であると感じた。

・キャリア教育についてグループワークやグループディスカッションを行った。教員の立場として、キャリア教育や進路指導について考えるとても良い機会になった。教員は生徒の人生設計に携わる重要な役割でもあると感じており、それぞれに応じたアドバイスや指導をすることができるようになりたいと思った。具体的な進路指導の内容や方法などを調べて、より幅広い知識を身につけていきたい。近年の雇用情勢や社会環境の変化に伴って働き方や生き方が多様化しているとあった。先生もおっしゃっていたように必ずしも一つの会社で働き続けるわけではないので、経験を積める環境が大切だと感じた。

・発表者は、適宜、具体的な例やデータあるいは自身の教育実習での体験などの話を挟みながら、問題提起や出た意見に応じていた点が､非常に良かった｡いずれのテーマ、問題においても、生徒も自分ごととして主体的に考えていくことが必要だと思うし、その上では、教師もそうした環境、機会作りに努めることが大事だと感じる。様々な意見が聞けて、グループディスカッションの良さを改めて実感した。

・今日は私たちも大学の授業で経験した授業形態について考える時間だった。生徒の立場からするとオンライン授業は何度も見直すことができ、対面と比較して時間に制約がないオンライン授業の方が利点があるように感じる。しかし教員の立場で考えるとオンライン授業の場合目の届かない生徒もいるだろうし、対面授業よりも準備が大変なので、全体的に教室を見渡すことができる対面授業の方が良いのではないかとも考えた。今後も対面とオンラインを交互にやっていくこともあると思うが、それぞれの良いところを取り入れた授業を行うことができるといいなと思った。

・私が高校の時と大きく変化したところは ICT を活用した授業が増えたことである。これはコロナ禍によって大きく変化していったと思う。私は慣れない中、ICT を活用して授業を展開していったが良い点もありつつ悪い点も見えた。まず、良い点は授業をスムーズに進めることができ、グループ活動や発表の時間などの生徒が活動する時間が増えた。黒板に板書する時間がなくなったことで生徒の活動に還元できるようになったと思う。ま

た、動画を流す時間も充分に確保できより充実した授業が展開できた。逆に悪い点は分かった気になって実際に知識が身につかないのではないかと思う。私が受けていた授業は板書や教科書を読むなどの古典的なもので文字ばかりの授業だった。そのため自分自身で想像を膨らませて答えを導き出すイメージする力、問題を自力で打開する力があったと思う。現在は検索すればすぐに画像が出たりと視覚的に認知することができるので答えがひとつであるという考えになっているのではないかと思う。私はどちらの授業のやり方を知っている身であるので先生となり授業をする際は、ICT を活用しつつ生徒ファーストで成長できるような授業をしていきたい。

2）FURIKA からの検証

学習時間については、平均2.4時間以上であり、授業で求める予習・復習時間をほぼクリアしていた。到達目標については、積極性平均4.5、理解度平均4.8であり、高い水準であった。自由記述については、次の通りである。「授業の進め方や発問の内容などより具体的に学ぶことができた」、「授業を行う上で大切なことや、意識するべきところを身につけることができた。自分自身や他の人の良かったところや改善点などを今後に活かしていきたい。」「教員になる上で必要な知識や、実践的な考え方を学ぶ事ができました。学校現場は今様々な変化をしていて、常に教員側も試行錯誤を繰り返しながらより良い環境づくりをしていかなければならないと考える事ができました。」「教員の在り方や話し合いの進め方が分かった。」「教職実践演習の授業では、主にグループディスカッションを中心に行い、様々なテーマについて考え意見交換することができた。今まであまり考えることのできていなかった内容について考える良い機会になり、学んだことは今後の活動に活かしていきたいと思う。」

（3）まとめと今後に向けて

本演習では、グループワークを積極的に取り入れ、学びの検証として各回授業の感想と FURIKA を活用した。結果からは当初の授業は概ね達成できたと考える。

グループワークの積極的活用は受講生にとって、プレゼンテーションの構想、テーマに関する自身の知識の再確認や最新情報の整理、そしてグループワークを実際に行いながら、いかに受講生の主体性を引き出すことができるのかといった創意工夫を、各々が授業実践を通して直に身に着けることができる有用な方法の一つであることをあらためて実感した。

その過程で学びの検証で触れられている学校現場での ICT の活用についても、大いに考える機会となっていた。受講生は自身が大学での４年間、オンラインと対面の双方を経験したことから、グループワーク構想を練る際にも、調べ学習やバーコードの活用など、まずは今ある環境の中で、それを取り入れる工夫の余地はないかそれぞれが検討していた。こうした工夫の余地を考え抜く力も、本演習で受講生が培った力ではないかと考える。

今後に向けては、グループワークや ICT に特化したことではないが、学校現場をめぐる様々な変化や改革のスピードは意識しつつ、そうした変化や改革の中でも主体的に動き、考え、工夫し、そして学び続ける姿勢を本演習の中で磨いていってほしい。

○事例 D：理想の教師になるための「マンダラチャート」（目標達成シート）の作成

（1）マンダラチャートと導入背景

マンダラチャートは、仏教の曼荼羅のような目標達成シートのことをいう。経営コンサルタントの松村寧雄によって開発された思考整理方法であるとされ、３×３のマトリックスの中心部に達成したい目標を記し、周辺部の８つのマスにそれを達成するための方法を書くように設計されている。

一見すると複雑だが、作成方法は手順を踏めば難しくない。中央の目標を記すマスのことを「幹」とよび、「幹」を囲む８つのマスを「枝」とよぶ。そして、「枝」の周りの８マスを「葉」とよび、それぞれの「枝」に記入した目標を達成するための要素をさらに具体化したものを記入していく（図 D-１）。大学の部活動（浦佑・高井・平山・髙橋、2020）やゼミ（野間川・中山・山崎、2022）での導入例も報告されている。

筆者は、教職課程の総仕上げに相当する教職実践演習においては、理想の教師像を設定し、それを実現するために能力や資質を明確化し、日常的に意識づけする必要があると考える。そこで、前年度までは、「理想の教師像」を一言で記し、イラストを描かせたマインドマップを作成していた。しかし、イラストに苦手意識をもつ学生がいたり、発想をうまく広げることができない学生がいたりした。どんな学生でも、理想とする教師像のために努力や意識すべき要素を可視化し、使いやすいツールを探

葉Ⅰ①	葉Ⅰ②	葉Ⅰ③	葉Ⅱ①	葉Ⅱ②	葉Ⅱ③	葉Ⅲ①	葉Ⅲ②	葉Ⅲ③
葉Ⅰ⑧	枝Ⅰ	葉Ⅰ④	葉Ⅱ⑧	枝Ⅱ	葉Ⅱ④	葉Ⅲ⑧	枝Ⅲ	葉Ⅲ④
葉Ⅰ⑦	葉Ⅰ⑥	葉Ⅰ⑤	葉Ⅱ⑦	葉Ⅱ⑥	葉Ⅱ⑤	葉Ⅲ⑦	葉Ⅲ⑥	葉Ⅲ⑤
葉Ⅶ①	葉Ⅶ②	葉Ⅶ③	枝Ⅰ	枝Ⅱ	枝Ⅲ	葉Ⅳ①	葉Ⅳ②	葉Ⅳ③
葉Ⅶ⑧	枝Ⅶ	葉Ⅶ④	枝Ⅷ	幹	枝Ⅳ	葉Ⅳ⑧	枝Ⅳ	葉Ⅳ④
葉Ⅶ⑦	葉Ⅶ⑥	葉Ⅶ⑤	枝Ⅶ	枝Ⅵ	枝Ⅴ	葉Ⅳ⑦	葉Ⅳ⑥	葉Ⅳ⑤
葉Ⅶ①	葉Ⅶ②	葉Ⅶ③	葉Ⅵ①	葉Ⅵ②	葉Ⅵ③	葉Ⅴ①	葉Ⅴ②	葉Ⅴ③
葉Ⅶ⑧	枝Ⅶ	葉Ⅶ④	葉Ⅵ⑧	枝Ⅵ	葉Ⅵ④	葉Ⅴ⑧	枝Ⅴ	葉Ⅴ④
葉Ⅶ⑦	葉Ⅶ⑥	葉Ⅶ⑤	葉Ⅵ⑦	葉Ⅵ⑥	葉Ⅵ⑤	葉Ⅴ⑦	葉Ⅴ⑥	葉Ⅴ⑤

図D-1　マンダラチャート
出典：浦佑・高井・平山・髙橋（2020）より転載

していたところ、メジャーリーグで活躍する大谷翔平選手が、高校時代にマンダラチャートを作成していたことを知った。受講生にスポーツ科学部の学生が多いこともあり、また、マンダラチャートの作成方法が定型化しているので、導入してみることにした。

（2）本授業におけるマンダラチャートの活用方法

「理想の教師像」を「幹」としたマンダラチャートを作成した。時数は、最終盤に作成に１コマ分、発表会に１コマ分をとった。授業全体の構成は、以下の通りである。

前半では、夜間中学のドキュメンタリー映画「こんばんは」（森康行監督、2003年、92分）を４回に分けて視聴し、議論した。この作品は、夜間中学生や教師のインタビューや授業が収録されている。不登校経験の場面緘黙症の青年が、言葉を話すまでの変化の様子も丁寧に描かれており、教職課程の学生にはぜひ観てもらいたい作品である。学生の理解が深まるように、教育機会確保法をはじめとする近年の夜間中学政策の動向や、2020年度国勢調査にみる義務教育未修了者数の解説を筆者が行った。

後半は、模擬授業である。受講生15名を５チームに分け、授業者（TT 含む）、指導案、授業スライド、ワークシートを負担が偏らないように役割分担しながら行うよう指導した。模擬授業は、受講生の取得予定の教員免許状にあわせて、高校保健体育、中学保健体育、中学理科、中学社会、中学数学とした。劇作家の井上やすしの「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに、そしてゆかいなことはあくまでゆかいに」という言葉を紹介し、そうした授業をめざしてほしいと指導した。毎回、模擬授業後に「よかった点」と「もう少しがんばれた点」を授業者も含めて全員で付箋紙に書き出し、模造紙上に KJ 法で整理した。

以上をふまえて、受講生一人一人に、マンダラチャートで「理想の教師像」を言語化し、決意表明させた。作成時間は、授業中に60分を確保したが、終わらない場合は宿題とした。発表会は､口頭発表で１人５分ずつとし、本人が３分で作成したマンダラチャートを紹介し、受講生が輪番で感想を述べ、最後に筆者がコメントした。なお、４年次後期に設定している本科目にあっては、民間企業や公務員の内定を得ている受講生が少なからずいる。そうした受講生に対しては、いつか再び教職をめざすことになった場合を想定して「理想の教師像」を作成させた。

図 D-２は、スポーツ科学部の女子学生が作成したマンダラチャートである（本人の了解済）。「信頼される教師」を幹に据え､それを実現するために必要な８つの「枝」

素直さ	謙虚さ	感謝の心	早寝 早起き	朝食	運動	効率的	計画的	報告
礼儀	人間性	思いやり	バランスの 良い食事	体調管理	1日7時間 睡眠	先読み	仕事が できる	連絡
潔さ	責任感	目配り 気配り	体重･筋 力維持	自炊を 増やす		几帳面	研究心	相談
家族と 仲良く	お金の 管理	ありがとうを 忘れない	人間性	体調管理	仕事が できる	堂々と している	元気が ある	知識が 豊富
趣味を 継続する	私生活	整理整頓	私生活	信頼され る教師	存在感	姿勢が 良い	存在感	自信が ある
家事を疎 かにしな い	オンとオフ の切り替 え	縁を大事 にする	メンタル	授業力	コミュニケ ーション力	身だし なみ	声が 大きい	特技が ある
周りに流さ れない	前進	不動心	説明がわ かりやす い	字が きれい	表情	積極的	明るさ	人に関心 をもつ
挑戦	メンタル	人を頼る	学ぶ姿勢	授業力	臨機応変	親身	コミュニケ ーション力	客観性
目標･目 的をもつ	冷静さ	失敗を 切り捨て	自己分析	生徒目線	準備力	食事に 行く	聞く力	話す力

図D-２　受講生が作成したマンダラチャートの例

出典：受講生作成のマンダラチャートをもとに筆者作成

は、「人間性」、「体調管理」、「仕事ができる」、「存在感」、「コミュニケーション力」、「授業力」、「メンタル」、「私生活」を設定している。信頼されるためには、精神衛生を含む健康管理をしっかりして、日常生活から意識する必要性があるという考えている。また、授業だけでなく、校内業務についても丁寧かつ確実に遂行できることが、信頼を得る条件と捉えている。「葉」に挙げられた項目も、きちんと考えられている。

他の受講生が「幹」に記した「理想の教師像」は、「生徒の記憶に残る教師」、「児童と一緒に成長できる教師」、「生徒のやる気をひきだす教師」、「教育現場と部活動を両立できる教師」、「生徒に信頼される教師」、「やるべきことはやるけど人間味のある教師」、「生徒に頼られる唯一無二の教師」、「生徒想いの教師」、「授業がわかりやすい教師」、「尊敬される教師」であった（重複するものは省略）。

（3）成果と改善点

以上の試みは、筆者としては手応えを感じるものであった。授業の最終回に発表会を設定したので、マンダラチャートを作成した感想を聞くことはできなかったが、どの学生も81マスを埋めるために考え、言葉を絞り出していた。受講生が違うので、一概には言えないが、筆者の印象としては、マンダラチャートの方がマインドマップよりも、求められる作業の内容と手順が明確なので、作成しやすそうであった。

ただし、学生によっては、「枝」や「葉」の一部が重複していたり、具体性に欠ける項目もみられたりした。次年度以降は、発表会前に個別に指導する時間をもちたいと思う。また、今回は、マンダラチャートの発表会を最終回に設定したが、ふりかえりの回を１コマ確保するようにしたい。マンダラチャートを作成した感想や、作成過程での気づき、他の受講生の発表を聴いての学びなどを振り返り、言語化する時間を確保した方が教育効果は高まるだろう。

○事例Ｅ：私たちの中にある偏見・差別を考える模擬授業

生徒自身が自らの思考を展開し、新たな気づきが生まれることを目指して、教師が適切に問題設定をして授業を展開する。教職実践演習の授業は、この「教師の指導力」を高めることを目的とした。そのため、特別活動や道徳の模擬授業を実施し、生徒の役割である受講者自身が生徒指導等に関する課題を考える演習とした。

授業構成は、①オリエンテーション及び自己紹介、②模擬授業のテーマについての協議、③履修カルテを踏まえての協議、④～⑦模擬「導入授業」、⑧教育実習を振り返っての協議、⑨～⑭模擬「本番授業」と協議、⑮全体の振り返りであった。

（1）模擬授業のテーマと目標

この演習の受講者は14名で、人文学部日本語日本文学科１名、英語学科１名、法学部法律学科１名、スポーツ科学部スポーツ科学科９名、健康運動科学科２名であった。関心のあるテーマに基づき３名程度でのグループを構成し、グループで協議し、表１に示すような模擬授業のテーマと概要をまとめた。

受講者が生徒役となり10分の導入授業を実施し、受講者がコメント・カードを各自で記入し、それを手がかりにグループ協議、全体協議を実施した。それらの意見を手がかりに、導入授業を見直し、本番模擬授業の授業案を作成した。本番授業の後に、コメント・カードを各自で記入し、それを手がかりにグループ協議、全体協議を実施した。

表Ｅ-１　模擬授業のテーマと概要

１.「いじめと人とのつながり」：いじめ場面を通して気持ちを考える、心のいじめと体のいじめ、出来事を話そう
２.「SNS との上手な付き合い方」：情報モラルを考える、個人情報の取り扱い、ネット上でのトラブルを理解する
３.「私たちの中にある偏見・差別」：偏見から生じる差別、根拠のない思い込み、人権侵害
４.「夢の実現のためには」：夢や目標を自分で決めて位置づけて、達成のための計画を考える
５.「命の大切さ」：命の尊さ、つながりの中での命、親や家族への感謝

（2）「私たちの中にある偏見・差別」の模擬授業

「私たちの中にある偏見・差別」の授業は、⑮全体の振り返り（受講者の投票）で、話題になった授業である。

担当者１が授業の概略を説明し、発問しながら授業を展開した。目標としては、①資料を読んで、「黙れ、中国人」という言葉と、「福島産だよ」という言葉の共通する響きに気付く、②それらの響きの背後にある認知の偏りや偏見に気付き、考える、③そのような偏りや偏見を少なくするためにできることを考える、であった。主題観、生徒観、指導観を紹介し、ワークシートを活用することを伝えた。

担当者２が表Ｅ-２に示すように導入、展開、まとめの授業を展開した。その際にワークシートを活用して、発問についての考えを記入し、グループで協議しながら展開した。

模擬授業後は、担当者１が協議を進めた。「根拠のない思い込みやうわさで行動することがあるので、情報を確認することが大切である」「ネットやマスコミの情報にも偏りがあるので注意が必要である」「関連する当事者の思いや気持ちを推測することが重要である」等の意

表E-2　授業案　それでも僕は桃を買う（簡略版）

過程	学習内容	学習活動	指導上の留意点	配当時間
導入	○挨拶 ○発問・発表 ワークシートと資料の配布（自分の考えや行動を振り返ろう）	発問：東日本大震災では、どんな被害があったでしょうか。 ・考えたことを発表する。 ・本時のめあてをワークシートに書く。	・大震災について話し、発問を考えさせる。 ・風評被害について説明する。	５分
展開	○資料「それでも僕は桃を買う」を音読する。 ○発問・発表	発問：サービスエリアでの親子の会話を聞いて、僕はどんな気持ちだったのだろうか。 ・考えたことをワークシートに書く。 ・記入したことを発表する。 発問：「黙れ中国人！」という言葉と、「だって福島産だよ」という言葉に共通するものは何だろうか。 ・考えたことをワークシートに書く。 ・記入したことを発表する。	・発問について考えたことをワークシートに書かせる。 ・２、３人のグループで、記入したことを共有する。 ・偏見に惑わされない主人公の強さについて感想を考えさせる。	３０分
まとめ	○まとめ ○挨拶	・本時の感想をワークシートに書く。 ・元気に挨拶する。	・授業の感想をワークシートに記入させる。 ・３名の生徒に発表させる。	１０分

見が出た。

（３）教職実践演習への意見

教職実践演習の授業について、受講者の感想には次のようなものがあった。

○自分の専門教科の授業を実施することは多かったが、道徳や特別活動の授業を他学部他学科の学生が実施していて、新たな発見や指導法など多くの刺激があった。

○中学校２年生の生徒でという設定だったが、大学生の視点になってしまい、そこが難しかった。グループの仲間と意見を出し合いながら、楽しく授業に参加できた。

○道徳の授業で、どうすれば生徒に伝わりやすいか、言葉づかいは大丈夫か、たくさん悩んだ模擬授業だった。他学部の学生と、一つの教室で、こんなに深く授業を受けることはなかったので、考えつかないアイデアが面白かった。

○教員を目指している学生同士、多くのテーマで一緒に考えることが新鮮だった。他学部の学生の授業や意見から新たな気づきが生まれ、考えさせられることが多かった。

○道徳の授業の難しさを知った。自分の考えを押し付けるのではなく、多様な視点を想定しながら授業づくりをしなければならないところが大変だった。

○いろいろな授業に参加し、その授業を知って、自分に足りないこと、まだ工夫できることに気づけた。

これらの感想からは、模擬授業、学生同士の意見交換で、自らの視点を広げる機会、教員として同僚と協力していく力につながる体験となったと考えられる。

○事例Ｆ

（１）2022年度の全15回の授業構成

このクラスは中学校教員採用決定者２名、私立高校採用決定者２名、大学院進学予定者３名を含んだ合計15名の演習であった。全受講生が教育実習を経験していたことから、第１回はホームルームにおける自己紹介を再演させるとともに、教職課程で学んだ内容についての振り返りを口頭で行った。第２回と第３回は「教職履修カルテ」を全員が印刷して持参し、ためになった講義と改善

が望まれる講義（形態や内容も踏み込んでのリフレクション）について意見を出し合った。学生はそれぞれの授業、教員の授業スタイルや内容をこちらが想像している以上に観察していることがよく理解できた。

第４回からは「学校が直面する実践的・臨床的課題」と「日常的に発生する学級内の問題」、「学校外の地域や国際社会に関する問題や課題」にはいったいどのようなテーマが考えられるのかを出し合い、それらの課題をいくつかのまとまりに整理しグループを編成し、そのグループで改めて検討するテーマを確定した。2022年度にこちらからの問いに受講生が答えて挙げたテーマは次のようなものであった。

□今日の学校や教師が直面している実践的・臨床的課題（予防を含む）には何がある？

教員の多忙化、生徒指導業務の多さ、モンスターペアレント対応、不登校生徒への授業形態（配慮）、多発する教員の不祥事、部活動の持ち方（教員の働き方改革）、教員数（教科ごとの専任教員）の不足と偏り、生徒の変化に応じた教育指導の困難さ、ハラスメントへの過剰な配慮、ICT の活用（授業方法の急な変化）、新しい学習指導要領（総合系）の手探りの状況、等

□日常的に発生する学級内の問題には何がある？

頻発する小さな問題の積み重なり（生徒間のトラブル処理）、一律の課題要求の難しさ、不登校生徒への指導（放置）、ICT の活用（クラス運営面含む）、特に高校：生徒の進路に応じたクラス運営の困難さ、進路指導の実態（進学指導と就職指導の両立の困難さ）、クラスの和がなかなか成立しないこと、クラス内のコミュニケーション（生徒間の人間関係、担任－生徒間の人間関係）、担任への不満、コロナ禍対応、暴れる生徒対応、等

□日本全体に関わる課題には何がある？

円安、デジタルデバイド、雇用形態、効率と公正（公平）の両立、機会の平等か結果の平等か、理科離れ、社会変化への対応（消費者へのサービス）、エネルギー不足、アフターコロナの新しい生活、人口減少、学力低下、チーム学校の在り方、等

□世界にかかわる課題には何がある？

途上国、教育格差、多様性と寛容性、情報リテラシー（格差）、識字率、環境・気候変動、国際紛争（戦争）、外交、食料不足、教育の普及実現（SDG ｓ）、宗教問題（宗派対立、ＬＧＢＴＱ含む）、外国にルーツをもつ子供たちへの教育、等

そこで、本演習ではこれら多岐にわたった課題を８つのテーマに整理し、その中から特に興味があるものを２つ選択して、２～３名のグループを構成した。その後グループで話し合い、選択したテーマから授業の主題を決めさせ、情報の整理と解釈を文献及びインターネットによって入手した資料をもとに行った。それを踏まえ、50分間の学習指導案を作成するとともにパワポ資料、配付資料を作成することを課した。そしてグループでのプレゼンテーションとして、学習プリントや各種資料を配付して、授業形式での発表・話し合いを行うこと、その際、教育実習で担当したクラスの生徒たちの前で行うことを想像しながら進めることをルールとした。このように、本演習では日本の抱える特有の課題、世界共通の課題の２領域で合計２回の模擬授業を担当させた。

模擬授業に先立って受講生に周知したのは以下の内容である。

表Ｆ-１　１回目に配付した資料（抜粋）

出し合ったテーマの中から２つを選び、２～３人のチームを作ります。具体的な授業として学活（ＬＨＲ）や総合的な学習の時間を想定します。

①　主題設定の理由と意義
②　50分間の授業計画
③　そのテーマの考察から得られた今後に生かせること

以上をＡ４判で１枚の授業計画を作成し、前日までにこの演習のＦＵボックス内で招待された共有フォルダ（日付とタイトルをファイル名にする）に入れておく。

授業で配付する資料や書き込み用プリント（学習プリント）も分担して作成し、同じフォルダにアップロードします。

使用するパワーポイント資料も同様にアップロードしておいてください。

授業の後、そのテーマについて質疑応答を主として話し合います。答えきれない質問については翌週冒頭に回答するという運びで進めます。

（２）年間を振り返ったなかでの特色

以上のようなテーマに基づき、受講生はさまざまに工夫を凝らした授業を展開してくれた。学習指導案（略案）を作成し、本時のめあてとまとめが時間内になされるよ

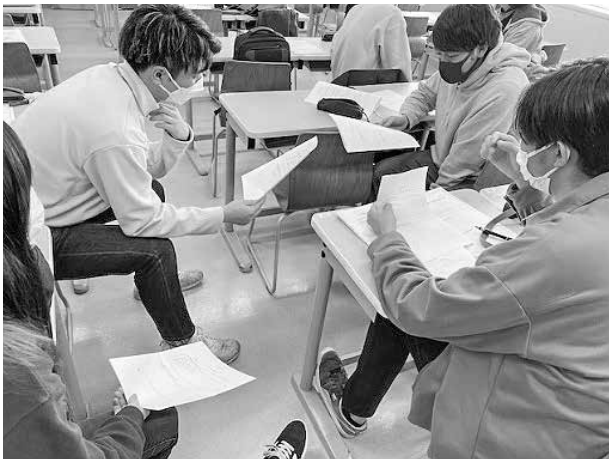
図Ｆ-１　授業風景①

うに時間の管理も十分になされていて、教育実習の成果が随所にうかがえる模擬授業を展開してくれた。ICT機器の利用を促したため、BYODに先んじて、多くの学生が自分のタブレットやPCを持参して取り組む姿もみられたが、未熟さが垣間見えたり、スマートフォン使用に回帰したりするなど、今後の情報機器の操作に慣れる必要を感じた。この点についてはこれまでの教育方法に関する授業が今後実践的になり、学生の情報機器の活用能力と経験値が高まることが期待される。

（3）教職実践演習の課題

本演習における模擬授業は毎年のように毎回盛り上がり、回を重ねるごとに受講生自身も工夫を重ねる姿勢が看取されたのは素晴らしい成果と評価できる。特にコロナ禍での授業を経験しているため、学生は映像資料を見せたり、ほかの学生のインタビュー動画を作成したりする等、教育実習校で指導された工夫、Tipsを十分に身に着けていることが理解された。上記の内容とも重複するが、いわゆるICT機器活用のスキルを一定程度獲得することが見込まれるので、コロナ禍を高校の授業で経験した学生や新しい学習指導要領で学んでいる高校生を新入生に迎え、そして彼らが教育実習に臨む今後の数年間にわたり、私たちが手掛ける大学における教職課程授業と教職実践演習の内容のアップデートが求められていると言えよう。

上記左写真（図F-3）にみられるように、通常の教室では前方スクリーン投影となるが、右写真（図F-4）はホワイトボードや独立型投影機器が備えられているので、より実践的な演習を展開することができた。本演習が配当される教室にも授業スタイルによってそぐわない場合があることが懸念される。ただし、学校現場の実際をみればGoogle ClassroomやMicrosoft Teams、ロイロノートなどのツールやコンテンツが各校、自治体によって多様に使用されているため、教育実習後の学生の経験も様々であった。これらの経験交流も意義があり、



図F-2　授業風景②

図F-3　通常教室授業風景

図F-4　ミーティング教室授業風景

春から現場に立つ学生にとっては有意義な時間になるのではないかと思われる。

教員採用選考試験の前倒しにより進路確定が早まることが期待されるが、教職実践演習が開講される4年後期という時期は卒業に向けた論文や研究の追い込みの時期に当たっているほか、理系の大学院生等は研究実験中に授業に参加するなど時間的な余裕がないように見受けられた。そのあたりを引き続いて授業担当者が適切に判断する必要がある。

○事例G

（1）授業の流れとテーマ

今回の教職実践演習では以下のような流れで演習を進めた。

1．「自分の目指す教師像」についてのミニレポート作成と発表

2．教職履修カルテと教育実習についての振り返りと自分自身の課題の整理

3．教員が示したテーマから一つを選択させ、4名程度のグループを構成

4．各テーマをまとめた資料を作成し、発表

5．教育現場で各テーマをどのように扱うかを検討
6．簡易指導案の作成
7．模擬授業と振り返り

取り扱うテーマは、自殺、ハラスメント、特別支援教育、いじめとなった。

このうち、ハラスメントをテーマとして扱ったグループは、まず何をしたいかを明確にする作業に時間を要した。ハラスメントをテーマとして選んだ学生の中には、アルバイトや教育実習中にハラスメントにつながりかねない言動を見聞きし、その対応に困惑した者がいたようである。ハラスメントを取り上げることは、教師の側からすれば生徒に対して加害者になりうるため、自分自身がハラスメントを行わないために必要なのはもちろんであるが、生徒から教師へのハラスメント被害への対応方法を知りたいこと、さらに生徒が社会に出たときにハラスメントの被害から生徒を守りたいということも目的として認識されていた。

模擬授業に向けて、簡易指導案を作成する際には、生徒観と指導目標の設定に時間を要した。教育実習では、指導案の作成はどちらかといえば授業内容に重点が置かれるため、結果として生徒観などはそれほど検討せずに書いていた学生が多く、このようなテーマを扱う場合には生徒がどのような状況に置かれているかが決定的な問題になりうることを改めて認識したようである。

（2）学生の作成した簡易指導案の一部

学習指導案

学 校 名　○○高等学校
指 導 者
実施日時　令和○年○月○日○時限
実施学級　第３学年○組○○名

1　単元名
ハラスメント問題の理解と初期の対応方法

2　単元設定の理由
現代社会において、「ハラスメント」は社会問題であり、あらゆる場面でハラスメントの問題が発生している。その中で、教育現場においてもスクールハラスメントと言われるように、あらゆるハラスメントが問題になっている。そのような現状を踏まえ、学校教育において生徒たちにハラスメントの問題について触れさせ、身近な問題として理解させる必要がある。

○　生徒観
本学級、３年○組は２年の時からクラス替えはなく、２年目の学級であるがゆえに、クラスの友人関係は良好であり、授業にもしっかりと集中できている学級である。また、学校行事や受験に対する思いも同じ方向を向いており、クラスが一丸となって取り組んでいるように思う。だが、人間関係が良好である一方で、ハラスメントのような問題に対して馴染みがなく、身近に発生する可能性が低い現状がある。

○　指導観
生徒に一方的にハラスメントについて説明するだけでなく、生徒自身にハラスメントについて考えさせ、社会に出た際に必要となる見分け方や対処法を身に付けさせたい。

3　単元の目標

①ハラスメントの問題性について理解できる。

②この単元を通じてハラスメントを受けた時・見た時の対処を円滑にできる。

4　本時

（1）本時の指導目標

・ハラスメントの種類や社会支援を理解できるようになる。　【知識・理解】

・身近に起きやすいハラスメントについて考えさせ､自らその対処法を考えることができる。【思考・判断・表現】

（2）教材

・授業プリント

（3）学習の展開

	○学習内容・学習活動	時間配当	学習形態	指導上の留意点	評価規準（評価方法）
導入	○社会でハラスメントが問題視されていることを紹介する。 ○学習目標の確認 「ハラスメントを受けた時・見た時の対応や対策ができるようになる。」	5分	一斉	・ワークシートに目標を記入させる。	・指示に対して正確に行動しているか。
展開	○ハラスメントについて ・ハラスメントとは ・ハラスメントの種類	5分	個人	・生徒各自が知っているハラスメントについて考えさせる。	・社会問題になっているハラスメントに関して、興味、関心をもっているか。　【知識・理解】
	○パワハラ、セクハラについて	5分	グループ	・何がパワハラに当たり、何がセクハラに当たるかを認識させる。	・自分が正しいと思っていても、相手にとっては嫌なことかもしれないと考えさせる。 【思考・判断・表現】
	○パワハラ・セクハラとは	15分	個人	・パワハラ、セクハラについてさらに詳しく理解させ、どういった事例が含まれるかを確認する。	・これらのハラスメントについて実はもっと身近にあること、自分と相手の受け取り方が変わるということを理解できるようになる。【知識・理解】

まとめ	○自分自身で行える対策について	5分	個人	・セクハラやパワハラを他人事として捉えるのではなく、自分自身で取り組める対策があることを理解させる。	・パワハラやセクハラに対して、自分自身で取り組める対策を考えることができたか。 【思考・判断・表現】
	○社会的支援について	5分	個人	・社会的支援にはどのような支援があるのかを理解させる。	・社会的支援について理解し、それらを説明することができたか。 【思考・判断・表現】
	○まとめ ・授業の振り返り ・今後どのように生活していくか。	5分	個人	・社会に出る心構えを持たせるとともに、ハラスメントの問題性について常に意識するように促す。	・ハラスメントの問題性を理解し、支援や対策について理解することができたか。 【知識・理解】

（3）学生のまとめレポートにおける感想

授業の最後にまとめレポートを作成させた。以下はその一部である。ハラスメント以外のテーマを選んだ学生の感想も含めてある。

「この教職実践演習はテーマごとに各班に分かれ模擬授業を行うという内容であり、私はハラスメントについて調べ模擬授業を行った。これまでハラスメントの定義やイメージは曖昧であったが、些細なことでハラスメントに該当することや、自分が加害者にも被害者にもなり得ることがあるということが分かった。これから社会に出る身としては、このタイミングでハラスメントについて学べてよかったし、これからの人生で生かせるものが多く見つかるいい機会となった。」

「教職実践演習を通して、教師に必要な知識やスキルを学ぶ事が出来ました。特に学んだのが授業をつくる難しさ、生徒に伝える難しさを学びました。生徒に何を伝えたいのか、何を感じてほしいのか、学んでほしいのかを考えながら授業を行う難しさも感じました。自分は実際に『自殺』についての授業を行い、自殺という誰しもが一度は考えたことがあるような内容をどのように伝えるのか、怖さや恐怖心がある内容を自分は少しでも無くすために、ポジティブな動画などを使って授業を行いました。この授業の中で先生が授業を行うまでに資料を集め、何を伝えたいのかをまとめ、パワーポイントや指導案をつくり、役割分担などをして授業を行うことが大切であるということがとてもよく分かりました。」

「自分達は自殺についての授業を作りましたが、生徒にもし自殺を身近に経験した人がいるとした時の授業作りや対応の仕方、傷つけないようにするためにはどうするべきなのかなどはとても難しいところでした。そういったところも考えて教師は行動しなければならないことも教師の仕事の内ですし、気をつけなければならないポイントだと改めて感じることができました。」

「私はいじめについての模擬授業を行いましたが、授業内における適切な言動や生徒の様子を見ることの大切さ、時には生徒の言動から授業内容の変更や授業の中断、そして授業内容によっては、各生徒に刺激が強い場合は保健室と連携することなど、より現場に近い内容を学ぶことができました。」

「この授業で扱った問題は、必ずどの学校でも起こりうる問題だから、自分が教員になった場合はどう対処するかを考えながら授業に取り組むことができました。この授業で一番に学んだことは、こういう授業を行う際、生徒をよく観察することが大切だということが分かりました。また、簡単に取り扱うことができない授業内容だからこそしっかり準備して

慎重に授業を進めていく必要があるなと思いました。自分が教員になった場合はこの授業で学んだことを活かして、生徒のためになる授業を作っていきたいと思います。」

（4）まとめ

当初は、学生の取り扱いたい内容が、ハラスメントの種類、被害者にならないこと、加害者にならないこと、ハラスメントの予防､ハラスメントを受けたときの対応、いじめとの関連、教師からのハラスメントなど多岐にわたった。そのため、内容を整理し目標を絞り込むのに時間を要した。また、生徒の中に被害を受けた者がいるかもしれないこと、扱い方によっては二次被害や心理的負担につながる可能性があることなどを考慮しながら、教材や指導案の修正を行った。これらは、他のテーマを選んだグループにも関連することでもあったため、すべてのグループが他のグループの作業を参考にしながら演習を進めることができた。

○事例Ｈ

（1）過去３年間を振り返った中での特色ある取り組み

本授業では､まず､履修カルテから４年間を振り返り、自らの課題を選定することを授業開始迄の課題としている（スタートアップ授業）。学生の類似する課題別にグループを編成して、個別学習、グループ学習、全体学習を組み合わせた授業形態をとっている。

授業の構成は、文部科学省が示す教員として求められる示す４つの事項を参考にした。表Ｈ-１のように、４つの事項について、養護教諭の視点から実践１～実践３で主に構成している。以下に、過去３年間の「教職実践演習（養護教諭）」の授業を振り返り、その特色ある取組について、実践１の「養護教諭としての児童生徒対応の学び」を中心に紹介する。

「実践１. 養護教諭としての児童生徒対応」のロールプレイのテーマと特徴

表Ｈ-２は、「養護教諭としての児童生徒対応」に取り組んだ､過去３年間のロールプレイのテーマ一覧である。テーマは、学生の実習先に基づくことから学校種別になっている｡ロールプレイは学校種別に特徴があり､各々の発達段階や生活背景に応じて児童生徒の対応に苦慮した内容が示されていた。一般的に、保健室の児童生徒の対応に困難があれば、多くの学生は指導者に尋ねて解決したり、自分で調べたりする。しかし、中には、疑問を抱えたまま実習を終えたり、自分では分かったつもりでいても、新たな疑問を持つ学生もいた。よって、設定されたテーマは、これまでの学びのなかで課題として残されたままのものといえる。そこで、学生の課題解決の一助としてロールプレイの手法を活用している。

学生のロールプレイのテーマ選定の方法は、まず、各個人が養護実習における保健室での児童生徒の対応を振り返り､ジレンマ体験（困難に感じたこと）を課題レポートに記述する。そして、課題レポートを基に、グループメンバーで意見交換する。それを踏まえて、グループの中で最も印象に残った事例、または解決が難しかった事例をメンバー間で選び、それをロールプレイのテーマとして選定している。なお、ロールプレイは、撮影して、さらに全体で視聴して共有するという形態をとっている。

本取組の特徴は、Gibbs のリフレクティブサイクル理論に基づいて作成した「振り返りシート」をガイドラインにして、レポート記述・グループの意見交換・全体ディスカッションをすることである。Gibbs のリフレクティブサイクル理論とは､何が起こったか(経験の事実)、何を感じたか(感情)､何が良くて何が悪かったか(評価)、なぜそれは起こったか(分析)､他に方法はなかったか(結論)、もし同じようなことが起こったらどうするか（アクションプラン）に沿って実習経験を振り返っていくものである（バーンズ・バルマン編，2005)。

具体的に学生がどのように困難な体験(ジレンマ体験)を経験し、どのように振り返っていったのか。教職への意識づけが高められたと思われた表Ｈ-２（★）の事例を紹介する。

（2）教職への意識づけを高められたと思われるロールプレイによる振り返りの紹介

紹介するロールプレイのテーマは、「授業中に教室を

表Ｈ-１　「教職実践演習（養護教諭)」事例Ｆの授業の構成

教員として求められる事項	教職実践演習（養護教諭）の授業内容
使命感や責任感、教育的愛情	実践１．養護教諭としての児童生徒対応の学び
社会性や対人関係能力	１）保健室対応のジレンマ体験（ロールプレイ）
児童生徒理解や学級経営等	実践２．保健室経営力の学びの集大成 １）実習校の保健室経営計画の作成 ２）保健室の設計と機能に関する研究（グループ課題）
指導力に関する事項	実践３．養護実践力の学びの集大成 １）ICT を活用した保健教材作成（グループ課題） ２）テーマ別の課題解決学習の発表（グループ課題）

表H-2　校種別の養護実習におけるジレンマ体験の主なロールプレイテーマ（過去３年）

学校種	保健室対応のジレンマ体験／主なロールプレイテーマ	「ねらい」
小学校	・教室に戻りたくない児童の対応 ・毎日異なる症状を訴えて来室する児童の対応 ・腹痛を訴えて頻回来室した児童 ・授業中に頻繁に抜け出して保健室に来る児童の対応（★） ・お母さんと離れたくない児童 ・保健室登校をしている児童への関わり方 ・家庭内で問題のある児童に対する保健室と教室の対応の差 ・担任の先生と児童との間で感じたジレンマ体験 ・歯科検診中に体調が悪いとの訴えが同時に来た時の判断	・教員の使命感・責任感・教育的愛情 ・社会性や対人関係能力の育成 ・児童生徒理解
中学校	・クラスメイトが嫌いだから授業をうけたくないＡさんへの対応 ・不登校生徒への対応 ・保健室で泣くばかりの生徒への対応がわからなかった事例 ・ASD のパニック状態にある生徒への対応 ・食欲不振、自傷がある中１女子への対応	
高校	・実習生が不登校生徒に感情移入しすぎてしまった例	

図H-1　実践１の授業風景

図H-2　学生が作成した動画

抜け出して頻繁に来室する児童への対応」である（表H-２★小学校）。表H-３は、学生による本事例の「振り返りシート」の記述を辿り、ロールプレイを通した学生が経験をどのようにして学びに転換していったのかについて検討する。

表H-３に示すように、学生は、まず養護実習でのジレンマ（困難）体験について、次のように描写した。「授業中に教室を抜け出して頻繁に来室する児童への対応に悩んだ。対応が難しい場合は、養護の先生が体調不良でないことを確認して、担任や教頭、校長先生等に電話されて、迎えに来てもらってありました。でも、誰が来ても急に『気持ち悪い』『お腹が痛い』と訴える児童がいて私はどう対応してよいかわからなかった（以下略）」。初めての実習で、保健室の対応に戸惑った学生の姿が伺えた。そして困難な体験に遭遇した時に感じた気持ちを大切にして、その時何を考え、何を感じたのかについて、レポートに記載してもらった。「担任の先生が保健室に来て、『またか』といって、保健室で遊ぶその児童を引きずってでも教室に連れて行こうとされた。でも、私は、本当にこれでいいのか、心の中で悩んだ。担任の先生の気持ちも良くわかる。が、児童はどうだろう。無理に連れて行かれて、より教室が嫌いになってしまったりしないか不安を感じた」と述べていた。このようなジレンマ体験をグループで発表し意見交換した。メンバーの様々な意見を踏まえて学生は、次のように葛藤しながらも分析し、その対応の仕方について再構築を試みた。

事例の対応の「何が良くて、何が悪かったのか」について学生は、「養護の先生が体調不良でないことを確認し、担任や管理職と連携されていたところが良い点ではないかと思った。児童の振る舞いは、保健室ではとても静止できる状態ではなく、（養護教諭が先生方に）助けを求めることは大切と思ったから。でも私自身は、どうしてよいかわからず、言葉をかけられなかった点が（自らの）課題。児童の体調不良は、本当かどうかはわからず、（私は）何が良くて何が悪いかわからない。」（（　）は筆者が加筆）。

さらに、「それはなぜ起こったのか」グループ内で検討した結果から、客観的に次のように分析していた。「児

表H-３「授業中に教室を抜け出して頻繁に来室する児童への対応」（振り返りシートより）

	振り返りの視点	学生の記録より抜粋（一部省略）
レポート課題（個人）	何が起こったか ↓	授業中に教室を抜け出して頻繁に来室する児童への対応に悩んだ。対応が難しい場合は、養護の先生が体調不良でないことを確認して、担任や教頭、校長先生等に電話されて、迎えに来てもらってありました。でも、誰が来ても急に「気持ち悪い」「お腹が痛い」と訴える児童がいて私はどう対応してよいかわからなかった（略）
	何を感じたか ↓	担任の先生が保健室に来て、「またか」といって、保健室で遊ぶその児童を引きずってでも教室に連れて行こうとされた。でも私は、本当にこれでいいのか心の中で悩んだ。担任の先生の気持ちも良くわかるが、児童はどうだろう。無理に連れて行かれて、より教室が嫌いになってしまったりしないか不安を感じた。
意見交換・ディスカッション	何が良くて何が悪かったか ↓	養護の先生が体調不良でないことを確認し、担任や管理職と連携されていたところが良い点ではないかと思った。生徒の振る舞いは、保健室ではとても静止できる状態ではなく、助けを求めることは大切と思ったから。でも私自身は、どうしてよいかわからず、言葉をかけられなかった点が課題。児童の体調不良は本当かどうかはわからず、何が良くて何が悪いかわからない。
	なぜそれは起こったか ↓	児童が授業を抜け出して保健室で遊んでいることVs学習権の保障（教室に戻って授業を受けること）。ジレンマの元はここかな。担任の先生や同じ学級の児童とのけんかなどが原因で来ることがあり、思いを言葉にすることが苦手な児童だったため、きちんと話し合いができず、居心地が悪くなり来室してきたのかもしれない。今考えるとそう思った。
	他に方法はなかったか ↓	児童が自分の思いを言葉にする練習をするような関わりを私がすること。担任の先生と児童が話し合える機会を作る。 養護教諭の先生に自分の気持ちを出して相談してみる。
	もし、また同じようなことが起きたらどうするか	何度も来室しても「またか」と思わずに、毎回根気強く「何か嫌なことがあったのかな」などときちんと向き合っていく。対応の不明な点は、指導の養護教諭の先生に積極的に相談する。

童が授業を抜け出して保健室で遊んでいることＶｓ学習権の保障（教室に戻って授業を受けること）。ジレンマの元はここかな。担任の先生や同じ学級の児童とのけんかなどが原因で（保健室に）来ることがあり、思いを言葉にすることが苦手な児童だったため、きちんと話し合いができず、（教室で）居心地が悪くなり来室してきたのかもしれない。今考えるとそう思った」。つまり、養護教諭として大切なことは、保健室における対応の良し悪しだけではなく、なぜそういう対応が必要だったのかについて担任を理解するとともに､児童の立場にたって、児童の気持ちを考えようと努めることではないかと気づいたことである。また､「他に方法がなかったか」考え、「児童が自分の思いを言葉にする練習をするような関わりを私がすること。」「担任の先生と児童が話し合える機会を作る。」「養護教諭の先生に自分の気持ちを出して相談してみる。」などと対応の幅を広げていた。保健室の対応について、自分の体験を伝えて整理し、ロールプレイとメンバーとの意見交換を通して、より妥当な保健室での対応の方法を模索する姿が伺えた。

最後に、今後「また同じようなことが起きたらどうするか」について、学生は「（児童が）何度も（保健室に）来室しても『またか』と思わずに、毎回根気強く『何か嫌なことがあったのかな』などときちんと（児童と）向き合っていく。対応の不明な点は、指導の養護教諭の先生に積極的に相談する」と述べていた。将来教員として、一人ひとりの児童生徒の心身両面、生活面等の状況に合わせて、丁寧に関わっていこうとする姿勢が伺えた。つまり､保健室対応における困難な経験のロールプレイは、学生に振り返りを促し、将来教員として必要とされる対応力の涵養に結びつく可能性があることが示唆された。

（３）教職実践演習の課題

「教職実践演習」では、養護教諭として求められる事項を「教員として求められる４項目」と対応させて授業を構成した（表H-１）。「教職実践演習（養護教諭）」の授業は、より積極的、主体的に授業参加ができている印象がある。それは例えば、養護概説等の学びを統合して実習校の保健室経営計画を作成し、それと対応した保健

図H-３　実践２の保健室経営研究の風景

図H-4　実践３のICT教材作成の風景

室モデルを設計したり、ICTの得意な学生が知識を駆使して動画や保健教材を作成したり、などと一方的な教員の講義形式の授業ではなく、学生が能動的に課題を見出し、課題解決のためのアプローチを主体的に考えていたからである（図H-３, H-４）。しかし、指導者側には授業形態において大きな課題があった。課題は２つある。

第一は、「教職実践演習」は、全学年を通した「学びの軌跡の集大成」とされているが、養護教諭に必要とされる知識や技術の確認をどう評価するかが課題である。履修カルテやアンケート調査によって学生の学びの確認はするものの、どうしても担当者の養護に関する科目だけになってしまう。「教育の基礎的理解に関する科目等」や「大学が独自に設定する科目」についての教育的視点も加味した総合的な評価の方法を選定することが難しい。様々な学びを蓄積して集積した内容を適切に評価する方法について検討することを課題としたい。

第二の課題は、第一とも関連するが、組織的な連携ができていないことである。この科目は、連携が必要だが、まず学科内の連携ができておらず、担当者一人での実施となっている。学科内において、全員が教職課程の教育に関わっているという認識を共有できるよう、担当者が働きかける必要がある。さらに、この科目は、学校現場や教育委員会との連携を考えるよう示されているが、それもできていない。いずれにしても学生は意欲的に授業参加ができているにもかかわらず、その指導体制が十分ではない。残された課題は大きいが、今後は、組織的な指導体制をどう構築するかについても検討していきたい。

○事例Ⅰ

担当教員の専門は、カウンセリングおよび臨床心理学である。「教職実践演習」の授業運営にあたり留意していること、教職履修者のリフレクションに寄与すると考えられる点を中心に報告する。

（１）「教職に関する科目」との接続性をもたせること

担当教員は、教職課程における３年次開講科目「教育相談」を担当しており、最終授業では「教職実践演習」を次のように紹介している。

「教職課程では、来年度「教職実践演習」という演習科目が開講されます。必修で、複数クラスが開講されます。私のクラスでは、模擬授業に加えて、生徒指導や教育相談の演習を行います。「教育相談」において学んだ、児童・生徒への個別理解やクラスマネジメント、カウンセリングの基礎についての知識をもとに、ロールプレイを行いながら体験的な学びを深めます。カウンセリングの理解を深めたい学生は奮って履修してください」。

こうした事前アナウンスの効果もあってか、受講生は担当教員の「教育相談」を履修した学生が一定数いる。児童・生徒への接し方やアセスメントの仕方を学びたいというニーズをもって受講する学生が増える点で、学習のモチベーション向上につながっているようである。

（２）教科の多様性を生かすこと

本演習のクラスサイズは13～15名程度である。校種・取得希望免許は、以下のとおりバラエティに富んでいる。

中学校教諭：社会、国語、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語、数学、理科、保健体育、養護教諭。

高等学校教諭：地理歴史、公民、国語、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語、情報、商業、数学、理科、工業、看護、保健体育、養護教諭。

教科・校種は年度により異なるが、本学の教職実践演習はこれらの免許が複数入り混じる。表Ⅰ-１には、ある年度の授業計画を示した。バラエティに富んだ模擬授業が展開されていることが読み取れるだろう。履修者は、各教科の有する哲学とでもいうべき価値観に触れながら、自身の教科理解と他教科理解を深めていく。これは総合大学における教職課程の強みである。

（３）「教員の資質」を具体的に振り返ること（第１回・第15回）

授業計画のうち、第１回は動画配信によるスタートアップ授業として、自身の「教員の資質」を振り返る時間を設けている。第１回の講義動画では、共通シラバスの３つの到達目標、すなわち、①教員として必要な使命感や責任感、教育的愛情等を自己認識し、教員に必須である諸規程等も理解している（知識・理解）、②教科指導、生徒指導、学級経営を著しい支障がなく展開することができる準備を整えている（技能）、③自己にとって教員として何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能を身につけようとしている（態度・志向性）について詳しく説明する。その際は「教員の資質」をより具体的に振り返ることができるよう、行動レベルの記述に整理し（図Ⅰ-１）、これらの観点について、３年半にわたる教職課程の学びを振り返るレポートを課している。振り返りの視点としては、教職カルテにおける教職に関する科目、教科に関する科目、その他必要な

表Ⅰ-1　ある年度の授業計画

回	テーマ		
1	「教員の資質」の振り返り		
2	「クラス開き」と自己紹介		
3	参加型授業計画の構築		
4	模擬授業１	高校保健	中学保健
5	模擬授業２	中学社会	高校公民
6	模擬授業３	中学国語	道徳
7	模擬授業４	高校保健	高校保健
8	模擬授業５	中学英語	中学理科
9	模擬授業６	高校商業	中学数学
10	模擬授業７	高校工業	道徳
11	教育相談１	積極的傾聴（初級）	
12	教育相談２	積極的傾聴（中級）	
13	教育相談３	児童・生徒のケース	
14	教育相談４	保護者のケース	
15	まとめ		

科目のそれぞれについて、得意科目・苦手科目、取り組み状況などをふまえるように指示している。また、４年生前期に教育実習を終えた学生は全体の評価と査定授業の指摘、今後の課題についてレポートに含める。

最終授業（第15回）には、第１回における「教員の資質」として示した３枚のスライドを再掲し、「この15回の授業の中で、実際にどのくらいそれが体現できたか」を問い、さらなる振り返りの機会を提供している。例えば、「教職実践演習」における取り組み状況として、遅刻や欠席、授業態度、模擬授業への姿勢などの側面から、自身の行動を根拠として言語化を促している。

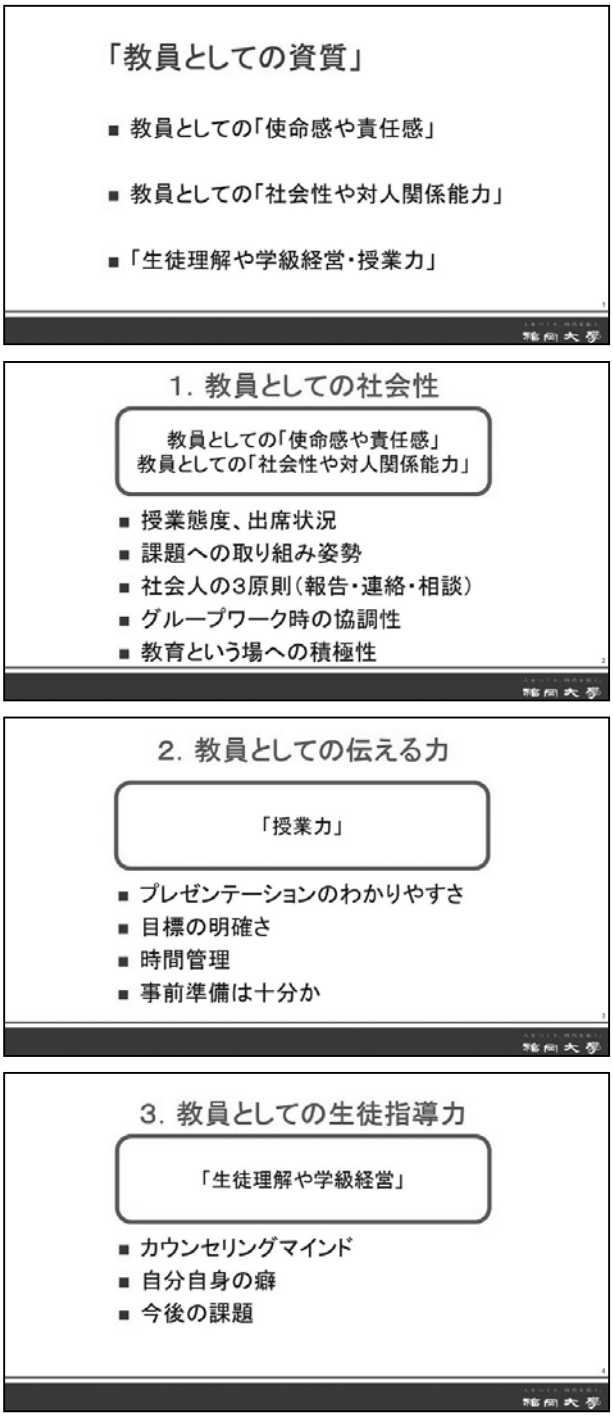
以上、第１回と第15回授業の振り返り作業は、担当教員のクラスにおけるリフレクションを促す仕組みの背骨をなしている。

（４）教師としての自己イメージを喚起させること（第２回、第３回、第15回）

教師としての自己イメージを持たせることはこの授業全体を通して意識しているが、これに関する特色ある取り組みを３点紹介する。

１）「クラス開き」としての自己紹介（第２回）

履修者が初めて対面する第２回授業においては、例年「クラス開き」を行っている。＜自身が担任教師になったとき、児童・生徒との初顔合わせで、どのような自己紹介をするか＞を念頭に置きながらスピーチを行う。氏名、学部・学科、取得予定の免許だけでなく、教職を目指した経緯や「自分らしさ」を示すエピソード、印象深い体験などを含めた自己紹介は多種多様なものとなる。教員を志すに至ったエピソードをあらためて言葉にすることは、「教師」としてナラティブを形成することになる。



図Ⅰ-1　「教師としての資質」の振り返り項目

また、これから半期間、学びを共にするメンバー全員に表明することは動機づけの向上にもつながる。

２）参加型授業計画の策定（第３回）

第３回では、今年度の教職実践演習の授業計画を全員参加型で構築する。冒頭に触れたように、全体の流れは決まっているのであるが、「その枠組みの中で何をするか」という点は受講生の希望を最大限に取り入れるようにしている。

その話し合いの風土づくりの前段として、授業前半はペアワークを行っている。第１回に振り返った「教員の資質」の振り返りをお互いに話し合い、その後、グループワークでそれをふまえた他己紹介を行う。これは、相手の話を傾聴するというカウンセリング演習の導入の意味もある。のちに相手のことを紹介しなければならない立場に置かれた受講生は、丁寧に聴く態度をおのずから見つけるようになる。また、この場は、履修メンバーのカウンセリングに対する感受性や傾聴力をアセスメントする機会にもなる。

これらのワークのあと、同じペアで「この演習を通して学びたいこと」を列挙してもらう。その案出は、前半のワークで共有した「教員としての資質」の振り返りに基づく作業となる。その後、４人グループになり発表してもらう。最後には全体でシェアリングを行い、クラスメンバーによる板書も併用しながら、全員で授業計画を策定していく。

３）「別れの花束」（第15回）

最終授業（第15回）には、卒業にまつわるワークを行っている。ここでは、「別れの花束」というワークを紹介する。

「別れの花束」とは、心理学（構成的エンカウンターグループ等）において用いられるワークである。受講者には、人数分の用紙が配られる。その用紙は、「～～さん、私はあなたが好きです。なぜなら～～～だからです」という文章完成法の記述が印字されている。例えば、受講生が13名であれば、自分以外の12名について、この用紙を記入することになる。一人一人に個別のメッセージを送る、というワークである。

用紙に記入してもらうことは、可能な限り「教職実践演習での言動」にしてもらうようお願いしている。そうすることで、授業での立ち居振る舞いが他者にどう映っていたのかに焦点づけることができる。

個人で用紙に記入する時間をとったあとは、全体でまとめて封入し、ひとつの「別れの花束」となる。その封筒はそのまま本人に手渡される。その後、「別れの花束」を一人で読み、味わう時間をとる。十分に体験を味わい、また教職実践演習での経験を振り返ることができた時点で、全体グループに戻り、感想をシェアリングする。

以上がワークの概要である。基本的にポジティブなことしか書かない点で、教育現場には適した方法であると考えているが、グループとして成熟しない場合（仲間意識が深まらなかった、あるいは集団凝集性が低いなどの場合）には、こうした作業は取り入れない。いずれにしても、最終回には「卒業」という別れのイニシエーションを、教師という立場でどのように感じ、考えていくかを体感してもらうことを狙ったシェアリングワークを行っている。

４）査定授業への再チャレンジを試みること：目標設定と評価（第４回～第10回）

第１回～第３回までの間に、受講生は自身の教師としての資質を振り返り、言葉にして相手に伝え、フィードバックする／される体験を通して、あらためて教員になるとはどういうことかについての理解を深める。それとともに、１つの作業を行うグループとしての安心感や凝集性を高めていく。これらの活動を踏まえて、模擬講義となる。

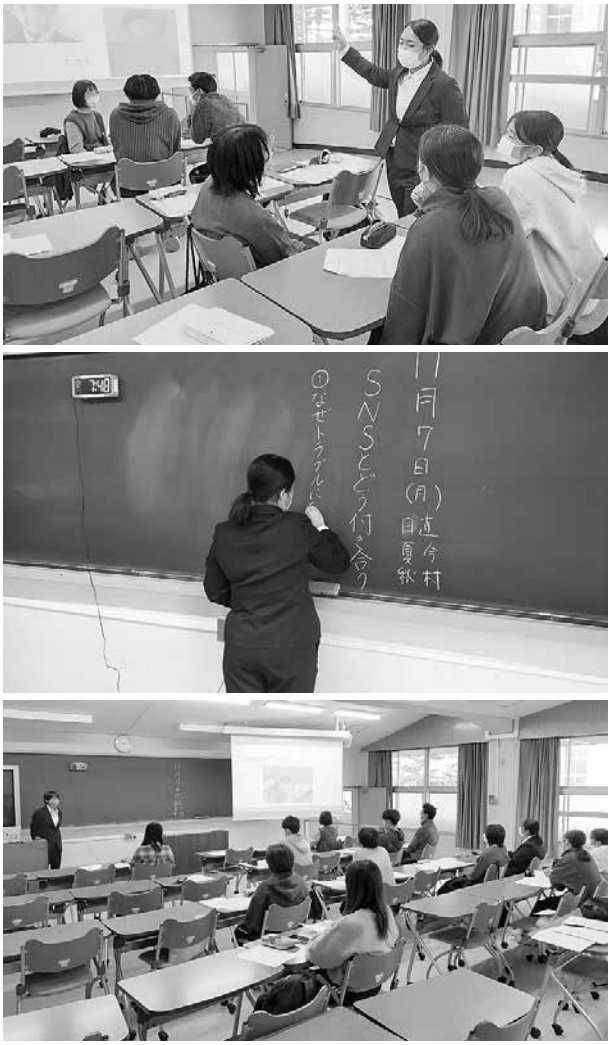
模擬講義は１回につき２名、１人あたり20～30分の持ち時間のなかで、基本的には査定授業の箇所を授業する。教師役はスーツ着用である。ロールプレイを始める前に、査定授業での指摘と今回の授業の目標について３点、明言してもらうことにしている。その到達目標は、受講生により１～５段階のリッカートスケールで評定され、匿名で本人に返却される（表Ⅰ-２）。生徒役には、当日の学習指導案と教科書の該当部分のほかに、授業資料が配布される。

模擬授業の指導法は、以下の点に留意している。まず、指摘事項は一般的なプレゼンテーションとしてどうか、という点を主眼に置く。学習指導案の書き方の細かい部分や具体的な教授法は各教科の指導法により異なる部分が大きいため、教職実践演習ではあまり扱わない。むしろ、教科による価値観の違いを共有するにとどめ、その教科における適切性については、教科教育法の指示に従うように伝えている。

一般的なプレゼンテーションとは、声の大きさ、話すスピード、ジェスチャー、指示の適切さなどの基本的事項である。加えて、その単元における論点をどれだけわかりやすく提示できたか、１つの授業としてまとまっていたか、提示刺激は多すぎなかったか、という点を検討する。

ICT 教育が始まって以降、板書とスライド、あるいは動画を併用した授業法を採る学生が増えてきた。近年の模擬授業をみても、板書だけの授業は極めてまれである。板書＋スライド＋配布資料など複数のツールを組み合わせ、さらに、映像や実演の活用がみられる。しかしながら、ひとつの授業としては、生徒にとっては刺激が多すぎる傾向にあるようである。

例えば、提示刺激が多すぎることで、児童・生徒役の学生からは「どこを見てよいのかわからない」というフィードバックがなされることがある。提示刺激の割に明確な指示（「顔を上げてください」「スライドの下の部分です」「配布資料の右側上に書きましょう」など）がなかったり、授業進度が早すぎることが多い。これは、複数教科にわたりみられる特徴である。近年の教育法では、刺激提示に関してはミックスメソッドが主流である。逆説的ではあるが、＜板書のみ＞というきわめてベーシックな授業を経験しておくことが有用かもしれない。



図Ⅰ-2　模擬授業の様子

表Ⅰ-2　ある学生の模擬授業の目標設定３点とフィードバックシート

1．生徒の反応をよく観察する 1・・・2・・・3・・・4・・・5 **2．机間指導中、話し合いが盛り上がるような声かけをする** 1・・・2・・・3・・・4・・・5 **3．時間配分に気をつける** 1・・・2・・・3・・・4・・・5
気づいたこと、感想、コメント等

注）受講生は査定授業での指摘をふまえて、３点の再チャレンジポイント（目標）を自ら設定する

教職実践演習の場で、こうしたベーシックな体験をしておくことがむしろ必要ではないかと考えている。

５）少人数による傾聴演習と教育相談のロールプレイ（第11回～第14回）

カウンセリング演習は毎年後半授業に位置づけている。この段階になると、履修者はお互いの人となりがわかり、良好な関係がある程度できていることが多い。カウンセリング演習にともなう緊張感や不安全感は通常授業よりもはるかに低減している。

演習内容としては、前半に「援助」というものの見方や考え方を図３に示すような形で説明する。その後、傾聴の基礎技術として、閉じられた質問、開かれた質問、言い換え、感情の反映、非言語的メッセージなどについて説明し、演習を行う。

次に、「援助面談の設定」として、物理的な座席配置を４種類（対面、90度、斜め、並列）それぞれにセッションをするなかで体験してもらい、相談内容や児童・生徒との関係性により意図的に選択することを学習する。また、心理的な設定として、「開始時間と終わりの時間」を明確に伝えることや、「アドバイス、助言・指導は○分後」と決めることなど、児童・生徒の安全感を高める具体的な工夫を紹介し、それらをふまえてさらにロールプレイを行う。さらに、「呼び出し面談」と「自発来談」における話の聴き方の違いも説明する。

カウンセリング演習の後半は、実際的な生徒指導、教育相談場面を設定し、それについて全員でロールプレイを行う。このときのテーマは教育実習先における出来事の他に、塾講師アルバイトや子どもボランティア活動の出来事が持ち込まれる場合もある。

カウンセリング演習は、こうした体験を通して、次の点を伝えて締めくくっている。すなわち、①積極的傾聴は特殊な話の聴き方である。日常会話や職業役割から離れて「スイッチする意識」を明確に持ち、意図的に行うことを大切にしよう、②積極的傾聴をする際は、自ら制限時間を定め、その時間だけはしっかりと傾聴できるようにしよう（自身を戒める）、③教師として行う「指示的関与」（指導）と「非指示的関与」（傾聴）を循環させる意識を持つようにしよう。④教師がプロカウンセラーである必要はない。また、逆にそうであってはいけない。

指導と傾聴という、一見相反する行為をいかに共存させるか、そのバランス感覚こそが「教師」という職業人には重要である。⑤児童・生徒へのカウンセリング的な関与は「なんとなく」ではなく「意図的に」行うようにしよう。

以上５点をまとめとして挙げたが、これらは、講義形式の授業だけでは決して伝わらないことである。受講生が実際にやってみて、困り、試行錯誤するという体験を通して初めて得られる学びである。

（４）おわりに

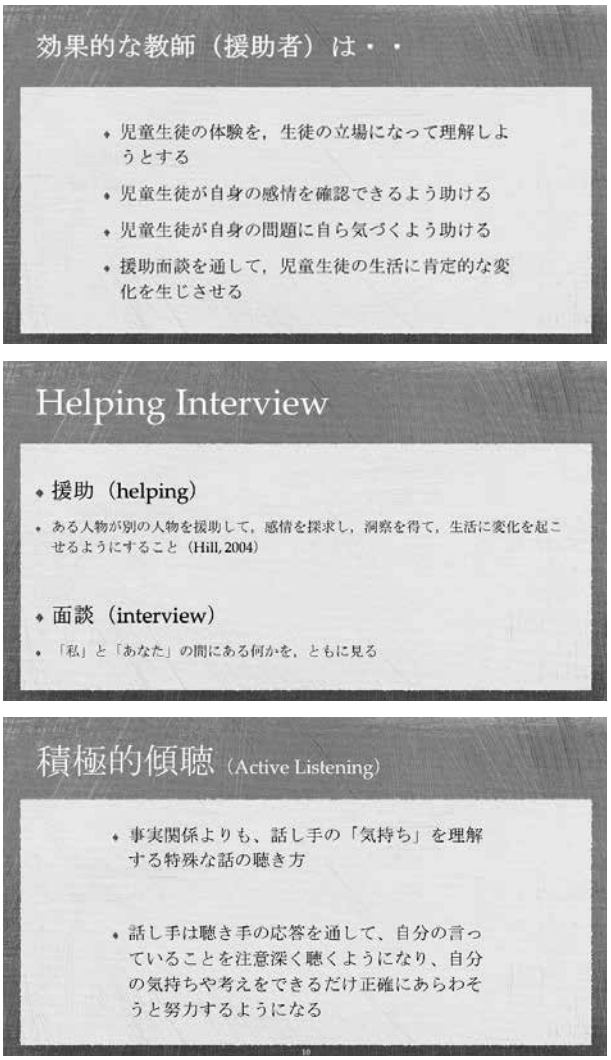
カウンセリング、臨床心理学を専門とする担当教員の授業実践を報告した。その内容は、次の３点にまとめられる。

①共通シラバスに掲げた到達目標を「教員の資質」として３点に整理し、可能な限り行動レベルで振り返りができるように留意した。

②学校現場における自身の教師としての姿をイメージできるよう、「クラス開き」や模擬授業、生徒指導や教育相談の場面、卒業セレモニーなどの活動を取り入れた。

③担当教員自身の専門性を生かし、小グループ（小集団）のダイナミックスを見立て、それに応じたアクティビティを選択した。

特に３点目について、専門的には、＜教師としての資質の涵養という共通の目標に向かう15セッションのグループワーク＞という側面が強かったように思う。成績評価が伴う点で純粋なグループワークとは異なるものの、臨床心理学的な視点は十分に応用可能であり、教職履修者のリフレクションを促すことに寄与したと考えている。



図Ⅰ-３　傾聴演習に用いたスライドの一部

○事例Ｊ：教職課程におけるこれまでの学びを深める教職実践演習

（１）授業の構成

2022年度の教職実践演習は、受講生の各自が、教職課程におけるこれまでの学びをさらに深めることをとくに意識して授業を行った。すなわち、受講生の各自が、教職履修カルテも用いて教職課程の学びを振り返った上で、とりわけ学級経営、生徒指導、授業についてさらに学びを深め、それらの学びを踏まえて模擬授業を行う、もしくは教壇に立つ前に教職課程履修者が今後さらに学びを深めるべきテーマについて授業形式で発表する、といった流れで授業を構成した。あわせて、学級経営や生徒指導や授業についてさらに学びを深めていくための言わば準備運動として、教育実習についての振り返りも行った。なお、教育実習の振り返りについては、受講生のうちにこれから教育実習を迎える学生も含まれていたため、教育実習を経験済みの学生が、教育実習で得た学びや教育実習の留意点を、これから教育実習を迎える学生に伝える場としても活用した。授業の構成ないし流れは以下のとおりである。

１回　スタートアップ授業（これまでの学びの振り返り１）
２回　自己紹介＆今後の計画、これまでの学びの振り返り２
３回　教育実習について教え合い学び合おう
４回　学級経営、生徒指導、授業について、これまでの学びをさらに振り返ろう
５回　学級経営についてさらに学びを深めよう
６回　生徒指導についてさらに学びを深めよう
７回　授業についてさらに学びを深めよう
８～14回　模擬授業もしくはテーマ発表
15回　ふり返り、まとめ

以下では、第４回から第７回にかけて行った、学級経営、生徒指導、授業についてさらに学びを深めるための授業について、その内容の一部を紹介したい。

（2）学級経営と生徒指導についてさらに学びを深めるために

第５回と第６回の授業では、それぞれ、学級経営と生徒指導について受講生がさらに学びを深めるために、グループワークと発表の形式で、学級経営と生徒指導に関わる事例研究を行った。事例研究に用いた事例はすべて架空のものであり、栃木県総合教育センターが発行する『若手教員のための学級経営のイ・ロ・ハ』（2015年）から引いたものである。この資料から事例を引いた理由は、第一に、この資料がWEB上で一般公開されていることから、授業後に受講者が各自で学級経営や生徒指導に関する学習を深めていく上で便利であると考えたからである。第二に、この資料は地方自治体の教育センターが若手教員の研修目的で編んだ資料の中でもとりわけ論述が丁寧であり、それゆえ受講生にとって有益な助言が多く含まれているからである。第三に、この資料を授業中に紹介することで、教職に就く受講生に対して、自らが教職に就く自治体が発行しているこうした資料を事前に読み、考えることで、その自治体において教壇に立つ準備をしておく必要がある、といった教示を行いやすくなると考えたからである。

第５回の授業で取り上げた学級経営に関わる事例は、たとえば以下である。

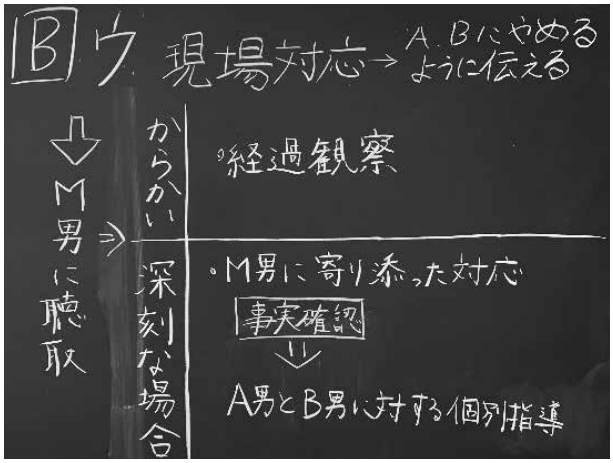
【事例ウ】中学校１年生の担任です。昼休みに、A男とB男がM男のことをこづいたり、M男の持ち物を見てからかっていたりしている様子を目撃しました。A男とB男は「ふざけて遊んでいるだけだ」と言っています。

また、第６回の授業で取り上げた生徒指導に関わる事例は、たとえば以下である。

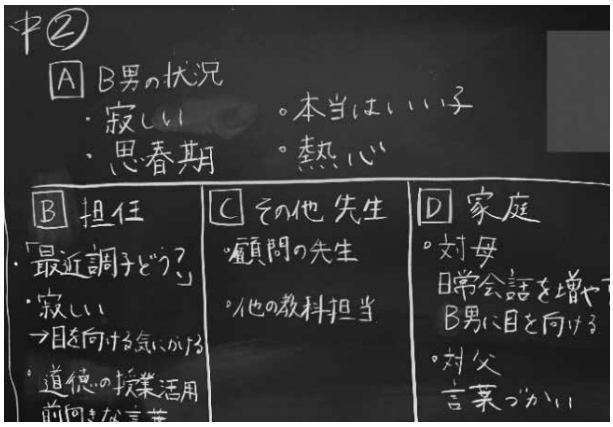
【事例 中②】友人に威圧的な態度をとり、暴言を吐くB男

・中２男子。部活動の練習の際、仲間のミスに舌打ちをして不快な表情を見せたり、大声で怒鳴ったりするなど、威圧的な態度をとることがあった。
・部活動終了後、話しかけようと名前を呼んだが返事をしなかった友人にカッとなり、大声で「キモッ、死ね」等の暴言を吐いた。
・行事への取組は熱心で、合唱コンクールでは学級の指揮者として活躍していた。
・家族は父、母、小５の弟がいる。父親は学童野球のコーチをしている。B男に対して、小学校の時は、特に厳しく叱っていた。母親は小学生の弟に目が向きがちである。

第５回の授業では、受講生はグループごとに、学級経営に関わる上のような事例について教師としてどう対応するべきかを議論し、発表した。第６回の授業では、受講生はグループごとに、A（生徒の状況をどう見たらよいか）、B（学級担任として何をするか）、C（他の先生方との連携）、D（保護者との連携）という視点から、生徒指導に関わる上のような事例について教師としてどう対応するべきかを議論し、発表した。第５回の授業においても第６回の授業においても、発表の際には、要点のみを端的に板書するよう指示した。第５回および第６回の授業における実際の板書の様子は、上に掲げる図J-１（写真１）、図J-２（写真２）のとおりである。



図J－１　写真１（第５回：学級経営）



図J－２　写真２（第６回：生徒指導）

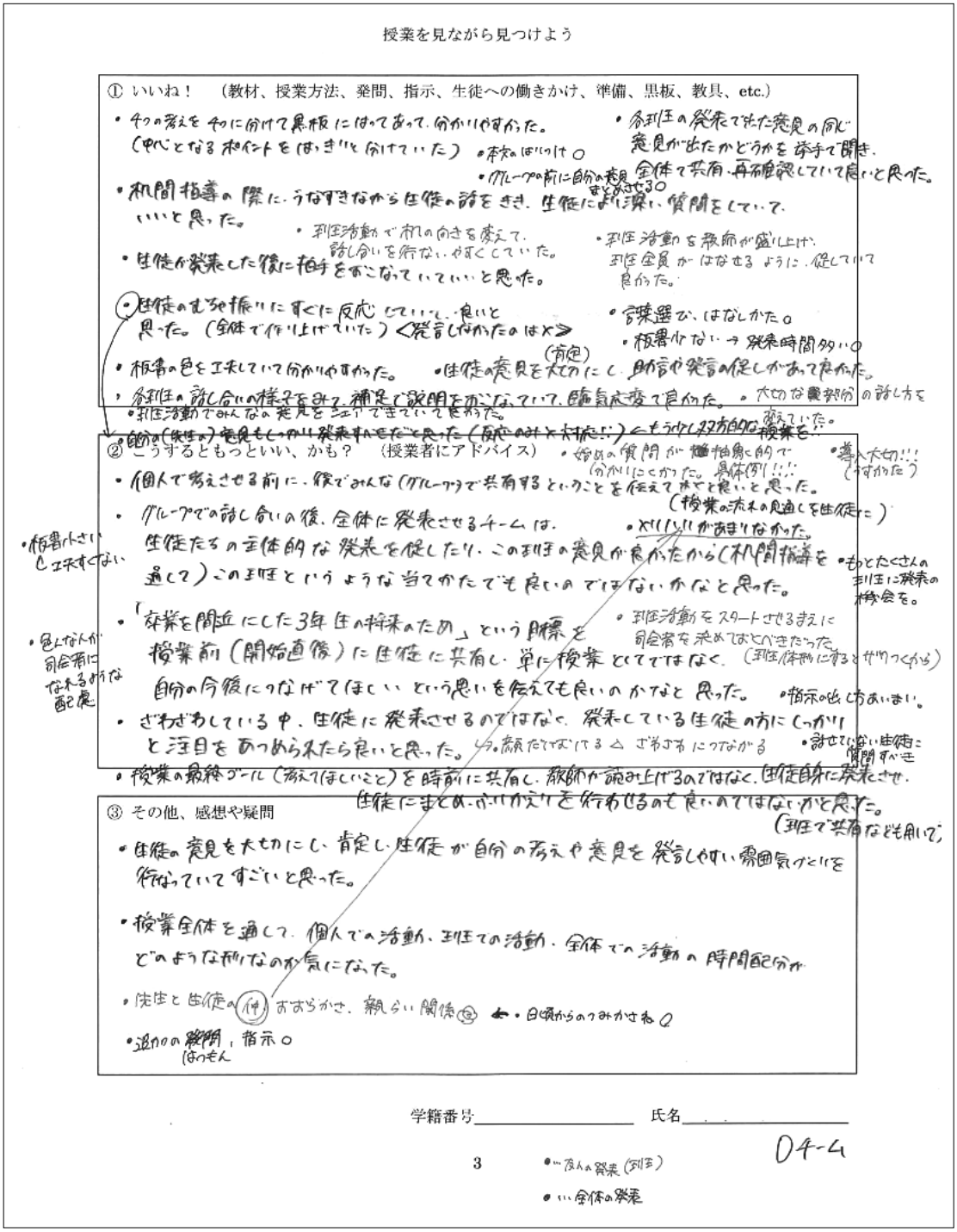
さらに、第５回および第６回の授業においては、以上に加えて、受講生全員で各グループの発表内容を協議した。協議内容は、第５回（学級経営）の場合はたとえば、「『からかい』に対する教師の毅然とした対応はどのようなものであるべきか」、「この事例における教師の対応の仕方が学級経営においてどのような意味をもつか」等である。第６回（生徒指導）の場合はたとえば、「この事例における状況理解として他にどんな可能性が考えられるか」、「この事例において顧問の先生や他の教科担当の先生以外にどのような連携が可能か」等である。

上の図J-１・図J-２も示唆するように、受講生は、これまでの教職課程の学びを踏まえ、事例について活発かつ具体的に議論することができたし、発表のための板書も発表自体も簡潔かつ的確に行うことができた。さらに、発表後の協議も活発かつ具体的に行うことができた。

（3）授業についてさらに学びを深めるために

第７回の授業では、授業の仕方や授業に関わる留意点などについてさらに学びを深めるために、中学校の第三学年における道徳科の授業を動画で視聴した上で、各自でワークシートを作成し、そのワークシートを基にグループで議論を行い、気づきを発表し合う、といった活動を行った。その際に用いた授業動画は、文部科学省のWEB サイト「道徳授業アーカイブ」における「実践事例について」（https://doutoku.mext.go.jp/html/about.html）に掲げられたものであり、「幸せって何だろう？」（『私たちの道徳』所収）という教材を用いた、道徳科の内容項目 A「向上心、個性の伸長」に対応する授業の動画である。

この動画を取り上げた理由は、第一に、道徳科の授業は比較的自由度が高いがゆえに、授業者の授業に対する取り組み方やスキルなどが授業の成否に如実に影響すると考えたからである。第二に、中学校の第三学年の授業から受講生が学びうる知見は、中学校の教師となる受講


授業を見ながら見つけよう

① いいね！　（教材、授業方法、発問、指示、生徒への働きかけ、準備、黒板、教具、etc.）

• 4つの考えを4つに分けて黒板にはってあって、分かりやすかった。（中心となるポイントをはっきりと分けていた）
• 本文のはりつけ○
• グループの前に自分の意見をまとめさせる○
• 机間指導の際に、うなずきながら生徒の話をきき、生徒によい深い質問をしていて、いいと思った。
• 班活動で机の向きを変えて、話し合いを行ないやすくしていた。
• 生徒が発表した後に拍手をすぐなっていていいと思った。
• 生徒のむちゃ振りにすぐに反応していて、良いと思った。（全体で作り上げていた）<発言しなかったのはX>
• 板書の色を工夫していて分かりやすかった。
• 生徒の意見を大切にし（肯定）、助言や発言の促しがあって良かった。
• 各班の話し合いの様子をみて、補足で説明をおこなっていて、臨気応変で良かった。
• 大切な箇所の話し方を変えていた。
• 班活動でみんなの意見を聞いてきていて良かった。
• 自分の（先生の）意見もしっかり発表されたと思った（肯定のみ×対比!!）<もうひとつ多方的な授業を!!
• 各班の発表してた意見の同じ意見が出たかどうかを挙手で聞き、全体で共有・再確認していて良いと思った。
• 班活動を教師が盛り上げ、班全員がはなせるように、促していて良かった。
• 言葉選び、はなしかた。
• 板書小ない → 発表時間多い○

② こうするともっといい、かも？　（授業者にアドバイス）

• 個人で考えさせる前に、後でみんな（グループ）で共有するということを伝えてあげると良いと思った。（授業の流れの見通しを生徒に）
• グループでの話し合いの後、全体に発表させるチームは、生徒たちの主体的な発表を促したり、この班の意見が良かったから（机間指導を通して）この班というような当てかたでも良いのではないかなと思った。
• 「卒業を間近にした3年生の将来のため」という目標を授業前（開始直後）に生徒に共有し、単に授業としてではなく、自分の今後につなげてほしいという思いを伝えても良いのかなと思った。
• ざわざわしている中、生徒に発表させるのではなく、発表している生徒の方にしっかりと注目をあつめられたら良いと思った。
• 授業の最終ゴール（考えてほしいこと）を時前に共有し、教師が読み上げるのではなく、生徒自身に発表させ、生徒にまとめ・ふりかえりを行わせるのも良いのではないかと思った。（班で共有なども用いて）
• 始めの質問が抽象的で（分かりにくかった。具体例!!!）
• 導入大切!!!（すばらしかった）
• メリハリがあまりなかった。
• 板書小さい（工夫すべき）
• もっとたくさんの班に発表の機会を。
• 班活動をスタートさせるまえに司会者を決めておくべきだった。（班活動にすぐつくから）
• 色々な人が司会者になれるような配慮
• 指示の出し方あいまい。
• 話せていない生徒に質問すべき
• 共有・確認たくさんする △ ざわざわにつながる

③ その他、感想や疑問

• 生徒の意見を大切にし、肯定し、生徒が自分の考えや意見を発言しやすい雰囲気づくりを行なっていてすごいと思った。
• 授業全体を通して、個人での活動、班での活動、全体での活動の時間配分がどのような形なのか気になった。
• 先生と生徒の（信）おすおらかさ、親しい関係 ← • 日頃からのつみかさね○
• 最初の発問（はつもん）、指示○

学籍番号＿＿＿＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿

04-4

3

• … 個人の発表（班）
• い 全体の発表

図Ｊ－３　受講生が書き込みをしたワークシートの一例

生にとっても高校の教師となる受講生にとっても有益であると考えたからである。第三に、この動画においては、授業の様子の要点のみが動画化されており、短時間での視聴が可能であることから、教職実践演習において活用がしやすかったからである。第四に、この動画には、道徳科の授業の様子のみならず、授業者に授業のねらいや授業の振り返りをインタビューした様子が含まれており、そうしたインタビューの様子もまた、受講者が授業についてさらに学びを深める上で有益であると考えたからである。

図J-３は、受講生が書き込みをしたワークシートの一例である。この例も示唆するように、受講生は、教職課程におけるこれまでの学びや、教育実習における学びを十分に活かして、授業について熱心に、かつ深く検討することができた。

（４）反省点ないし今後の課題

受講生は、第５回から第８回の授業において、学級経営や生徒指導や授業についてさらに学びを深めた上で、第９回以降に模擬授業を行った。あるいは、教壇に立つ前に教職課程履修者がさらに学びを深めるべきテーマについて、授業形式の発表を行った。なお、模擬授業と授業形式の発表は受講生に自由に選択させたが、半数以上の受講生は各教科ないし道徳科の模擬授業を行い、他の受講生は「生徒の叱り方」「いじめへの対応」「子どもの貧困への対応」「多様な生徒への対応」「生徒の自立に向けた指導」等をテーマとして授業形式の発表を行った。それらの模擬授業ないし発表は、上に紹介してきたような授業を経たことで、より深い学びを含むものになったように思う。その意味でも、第５回から第８回の授業は大いに手ごたえを感じるものとなった。

ただし、第５回から第８回の授業については、反省点ないし今後の課題も幾つかある。反省点の最たるものは、第５回から第８回の授業において受講生が思考し議論した内容と、教職課程における各授業から受講生が学びえた理論的な知見とのつながりを、受講生にもっと強く意識させるべきであった、という点である。第５回から第８回の授業は、現場志向の実践的な思考や議論を受講生に促すものではあった。とはいえ、そうした実践的な思考や議論を、教職課程における各授業で学んできた理論的な知見――たとえば、「教育の原理・課程論」や「教育心理学」や「教育方法論」や「生徒指導論（進路指導を含む。）」や「道徳教育論」等において学びうる理論的な知見――とより密接につなげることができていれば、受講生の学びはさらに深いものになったであろう。この点は、とりわけ福岡大学のような大規模大学にあっては同一名称の授業が複数開講されているため、言い換えれば学びの履歴が多様であるため容易ではないだろうが、教職実践演習の担当者が活動や発問や指示の仕方を工夫することによって乗り越えられなくもないだろう。今後の課題としたい。

○事例Ｋ

教職実践演習の受講学生を中学校・高等学校の学級・ホームルームの生徒集団に見立て、教師役を交代で務めながら、実際の授業及び学級・ホームルーム経営を想定した演習を行うことで、教員としての資質・能力の向上を図る。

あわせて、教職課程における学びの集大成と位置づけられる教職実践演習の学びを、教職はもとより広く社会で活用できることを目指す。

（１）特色ある取り組み

１）学生アンケート実施

本授業期間中の教育実習参加者は受講学生30名中５名であった。その５名の教育実習が終了した11月に学生アンケートを実施した。回答数は27名であった。

質問項目は、卒業後の進路、教育実習、教職課程、教員採用試験に関すること等である。アンケート結果を後半の本授業のみならず、教職課程の充実のために活かすことを目指した。アンケート結果の概要は以下のとおりである。

卒業後の進路は、14名が教職志望、13名が教職以外の就職・進学等であった。

教育実習中、実際に１人で授業を実施した時間数を尋ねた。２～３時間１名、４～５時間５名、６～10時間７名、11～15時間５名、16時間以上９名であった。実習校によって大きく差があるが、かなりの授業時間を教育実習生の授業に割いていただいている実習校もある。

教育実習において担当する教科の学習指導において最も苦労したことを選択肢から１つ選ぶ問では、回答が多かった順に、授業計画（ICT の活用計画を含む）８名、発問・板書計画７名、学習指導案作成６名、教材選定・作成及び言葉遣い・態度３名という結果であった。

さらに、教育実習に参加して最も不足していると感じた資質・能力について記述式で回答を求めた問では、大別して、授業実施に必要な資質・能力、ICT の活用能力に関する資質・能力に加え、生徒理解及び生徒指導に関する回答が多くみられた。

上記で答えた不足していると感じた資質・能力の育成のために、大学教職課程科目でどのような工夫が考えられたかという問に対しては、12名が他学部等との合同を含む模擬授業の更なる実施と回答している。

２）学級・ホームルーム経営を想定した演習の実施

第１回スタートアップ授業（オンデマンド型）を除く14回の授業で実際に行った演習を紹介する。

紹介している演習等は、教職志望者にとって、実際に

学級活動及びホームルーム活動、学習指導、生徒指導などで活用できることを想定している。さらに、上記アンケート結果も参考にして、①他学部生の合同授業の特徴を生かし、様々な教科・領域等の模擬授業に触れる機会となるようにすること　②教職課程で学びつつ大学卒業後、直ちに教職に就かない学生にとっても、社会生活において活用できる実践的な演習を実施することで、教職課程の学びを学校を含めた社会全体で活かせるよう努めた。

〈取り入れた演習〉

第２回　アイスブレイクの手法（バースディチェーン・他己紹介・リフレーミング）

第３回　様々な意見発表の形式（フォーラム・シンポジウム・パネルディスカッション）をジグソー法で学ぶ

ウェビングマップ（思考ツール）を用いて、学級開きや新入社員研修の際に行われる大縄跳びの意義について考える

学級活動議題「学級旗を作ろう」（合意形成についてのロールプレイング）

リーダーシップ・フォロワーシップについて

第４回　生徒指導提要（改訂前）に示された「教育相談で用いるカウンセリング技法」をもとに「ジョハリの窓」にある４つの窓を意識してカウンセリング場面のロールプレイング

「非認知スキル」の向上につながる可能性のある家庭での様々な働きかけについて

第５回　重大事故の予防のためのヒヤリハット事例の活用について

男女共同参画社会の実現のためのポジティブ・アクションについて

第６回　「人権教育」の推進（高等学校卒業者の就職問題に関する申し合わせ、人権デュー・ディリジェンス、セキュリティクリアランス）

第７回　ユニバーサルデザインの視点で授業づくりをしよう

第８回　「温かい言葉がけ」を身に付けよう

「魅力ある学級・ホームルーム経営」について

第９回　ディベート「修学旅行は班別の自由行動にすべきである」（中学２年生想定）

第10～14回　プレゼンテーション「キャリア教育について」（教職志望者は教科以外で模擬授業を実践。教職志望でない学生は中学生・高校生対象にしたキャリア教育に関する講演講師役（自身が就職する職業等についてのプレゼンテーション）

第15回　エゴグラムで自己分析

討論テーマ「大学卒業後の日本社会の姿を描く」

（２）特によかったと感じられるもの

各回の授業終了時、「学びの履歴」に振り返りを記載させている。

図Ｋ－１「学びの履歴」記入例

「学びの履歴」に記載された教職への意識づけを高められたと思われる演習等への記述を抜粋して紹介する（記述の趣旨を変えずに表現を一部修正しているものも含む）。

第２回

・アイスブレイクは教師になって最初に使えるのでとても参考になった

・他己紹介は自分では気付かないことを引き出していうことができる

・リフレーミングは、マイナスをプラスに変えられるので学校ですぐに使える

第３回

・フォーラム・シンポジウム・パネルディスカッションの違いを意識すると意見が言いやすいことを学んだ

・ジグソー法やウェビングマップを実際に行い、主体的・対話的で深い学びの効果を体感できた

・学級活動における合意形成は、多数決になりがちであるため、少数意見が排除されないような議論ができるようにしたい

・生徒たちが大人になって社会で生きていく中でフォロワーシップが重要になると思った

・高校の部活動の部長を務めていたので、フォロワーシップがあるからこそ全員で頑張れたと改めて感じた

・誰しも役割があると生徒に投げかけることで、自己存在感につながると思った

第４回

・普段のなにげない会話の中にも、カウンセリング技法の「傾聴」「受容」が使われていることを実感して知ることができた

・生徒の思っていることを「言語化」できるよう努力していきたい

・聞く体力や捉える力が必要であることをこれまでの学校での部長経験などから実感した

・自身はジョハリの窓の「開放の窓」が大きいことを実感でき、他の人の窓を広げてあげたいと思う
・「非認知スキル」が「学力の向上」につながることを知った

第５回
・卒業後は社会人として、男女共同参画社会を担い、ポジティブ・アクションを活かしていきたい
・母親による虐待が多いというデータから学校において教師による体罰・セクハラが発生することに通じる気がする

第６回
・学校教育だけでなく、社会で実際に人権デュー・ディリジェンス、セキュリティクリアランスなどよく知らないことが必要である
・「宅地建物取引と人権」について学んだことは教職には就かないが不動産会社に就職するので生かせる

第７回
・ユニバーサルデザインの視点に立って授業を考えることで、児童生徒の多様性を意識した学校・学級づくりにつながる
・自分では意識していなかったがユニバーサルデザインの視点を踏まえて授業を実践していたことに気付いた

第８回
・ホームルーム経営について教職課程の授業ではこれまで具体的に考える場面がほとんどないため、今後に活かしていきたい
・学級経営では何より生徒との信頼関係や言葉がけが重要であると思う

第９回
・ディベートを初めて経験したが、コミュニケーション力を育成するだけでなく、主体性・協調性など様々な資質・能力の育成ができる
・中学校での経験では、実施後に人間関係に少し気を遣った記憶があるため、大学生のディベートが論理的な考え方で展開されることが楽しいディベートになると実感した

第10～14回（模擬授業の内容）
「感謝の大切さ」「学級開き」「人権教育」「道徳科」「総合的な学習の時間」「障害者教育」「コンセンサスゲーム」などの学校教育に関する内容に留まらず、卒業後の各自の進路をもとに「大学院について」「法科大学院について」「JICA について」「お金の話」「ライフプラン」「IT 企業とは」「不動産業について」など多岐にわたるキャリア教育の模擬授業を実施

（３）課題

教職課程の学びでは、理論と実践の往還を目指している。しかし現実には理論を中心に教職課程の学びが進む場合も多い。そのため、実践が不足しがちな点を考慮して本授業では実践を多く取り入れた。

第15回（最終回）で記述した全体の振り返りからは、ペアワークやグループワークなど協働的な学びを取り入れることで「主体的・対話的で深い学び」を実践した授業形式、その中で議論する機会を多く得られたことがとても有意義であったと記している。

さらに、教職課程だけでなく、社会で必要な知識等を学ぶ機会と捉えている。

教職課程の集大成に位置づけられる「教職実践演習」の履修時期は、卒業後、教職以外の進路が内定している学生もおり、それらの学生たちにとっても教職課程の学びが今後に役立つという実感のある授業を展開する必要がある。実際に、「一般企業就職内定ですが、役に立つと感じることができました」という感想も多くあった。また、「教員志望から一般企業志望に進路変更を在学途中でおこなったため、教職課程科目の授業を楽しく受けることができなくなっていたが、教職実践演習では教職だけでなく他の職業でも生かせる内容が多く、楽しく授業に参加できた」という感想も寄せられている。

このように、教職志望学生のみならず、すべての受講学生にとって、将来、活かせるように意識した授業を行うことは、教職課程志望の学生にとって「ユニバーサルデザインの視点に立った授業づくり」に通じるものである。「教職実践演習」が教職志望学生だけでなくすべての受講学生にとって、有意義で将来役立つものとなるようさらに創意工夫を行うことが、教員養成段階における教職課程科目の更なる充実に繋がる。

○事例Ｌ

（１）事例Ｌの特色

事例Ｌを担当する筆者は、共通シラバスのもと本実践演習で特化する点を以下の通り受講生に提示している。

① 教職課程での学びと教育実習の経験を関連づけ、振り返る。
　✓ 教職課程の学びで難しかったところ
　✓ 教育実習に行く前の不安、実習中に感じた難しさ、実習後の振り返り
　✓ 教職を目指す自分の「強み」と「弱み」
② 多様な背景を持つ子どもが自分の学級にいたら…教育的対応を考える。
　✓ セクシュアル・マイノリティの子ども、外国人児童生徒等を念頭に、どのような配慮や周囲の理解を促す教育が必要になるか考える。
③ 模擬授業の実施
　✓ ICT を活用してみる（パワーポイント、電子媒体資料など）
　✓ 他者の授業を見て、授業の流れの工夫、教

材の工夫、自分も取り入れてみたい点、改善点などを挙げ、議論する。

自身の学びや経験を意味づけ、振り返ること、多様な背景を持つ生徒に対する教育的対応について意識すること、授業を見る（分析する）力を身につけ、ICT の活用ができるようになることを、本実践演習の柱としている。一つ目については、グループワークを通して自分の学びや経験を言語化し、他の受講生と交流することで振り返りをより深めている。そして、そうした振り返りは、演習の15回分の一覧としてすべてを振り返ることのできるようポートフォリオにまとめていく。二つ目については、模擬授業の実施回数との兼ね合いにもよるが、動画視聴やケースに基づくディスカッションを行ったりしている。その際、有田他（2018）や渡辺（2019）等を参考にしている。三つ目については、とりわけ ICT の活用について、2020年に生じた新型コロナウイルス感染症拡大により加速度的に学校現場での活用が進められたため、それを意識して盛り込んでいる。新型コロナウイルス感染症の流行により、2020年度の教職実践演習はすべてを zoom で実施したが、2021年度は前半がオンライン、後半以降は対面、2022年度は対面での授業であった。2021年度、2022年度は Google Classroom を活用した。採用試験に合格した受講生の赴任地は福岡市・福岡県にとどまらないが、福岡市をはじめ Google for Education を導入している自治体は多いことから、Google Classroom や Jamboard を一度は触ってみることも重要と考え、本演習で用いた。

（2）学びの振り返りを促す手立て

1）模擬授業のコメントシート

模擬授業を行う際には、生徒の立場で授業を受ける受講生は必ずコメントシートを記入し、授業者へフィードバックするようにしている。履修者数により、90分の授業時間に２つ模擬授業を行うこともあり、その後の授業検討で全員がコメントをすることは難しい。そのため、発言できなかったとしてもコメントを授業者にフィードバックできるようコメントシートを取り入れている。コメントシートには、授業の流れの中での工夫、教材の工夫（ICT の工夫なども含む）、自分も取り入れてみようと思った工夫、分かりにくかった点・改善点、感想、以上５点を含んでいる。授業者の模擬授業に対し、積極的に良い点を見いだし、それを踏まえた上で改善点を提示し、建設的なコメントができるように工夫している。

2022年度の履修生は、中学校社会、高校公民、高校地歴、中学校理科、高校生物、高校化学、工業の免許取得予定の学生が受講していた。高校の免許のみを取得する学生の場合、教育実習は２週間であり、経験する授業回数も限られる。また、工業の免許は教育実習を経ずに取得できるため、教育実習のみならず模擬授業の経験も教科教育法の授業で経験しているか否か、という状況である。そのため、教科に関わらず多様な模擬授業を体験し、それにコメントするという作業は、教授技術を含め授業の工夫を知る機会であり、また、授業を見る目を鍛えていくことになる。

例として、中学校理科第１学年の単元「気体の発生と性質」で受講生が模擬授業をした際のコメントを紹介する。まず、簡単に授業の概要と工夫について述べておく。この理科の授業は実際には実験を要するものである。しかしながら、本実践演習を行っている教室には実験機器等は設置されていない。そのため、模擬授業を実施した受講生はあらかじめパワーポイントのスライドや実験動画を準備していた。この授業の導入では、気体を発生させる際に塩酸と石灰石というオーソドックスな組み合わせ以外に、水と入浴剤という生徒にとって身近な組み合わせも準備していた。そこから、気体を発生させることを見せ、授業への関心・意欲を高める工夫を行っていた。また、ここで発生した気体の性質を調べるために、本来の授業であれば実験を行うことになる。ここでの実験に関する指示や注意事項についても工夫がなされていた。模擬授業においても、受講生を班分けし、各班にラミネートした実験の際の注意事項を配っていき、実際に実験はできないものの、実験の手順を確認し、実験結果を予測し、レポートをまとめるという流れであった。各班で記入するときには机間指導なども行っていた。

この模擬授業に対し、コメントシートの項目ごとに以下のようなコメントが出された（以下、抜粋）。

〇授業の流れの中での工夫

・生徒たちが今までの学習内容で得た知識を使いながら、本時の実験結果を予想、考察させることで、学習内容の理解を促進したり、興味、関心を想起させたりすることができていた。
・実験に入る際の指示で、グループ活動をする際、「グループで役割分担をしながら、協力して行って下さい」という指示が、非常に良かった。（以上、中学校社会）
・教科書には書いていない実験を行っているところ
・自分で考える時間、グループワークの時間をはっきりとわけているところ。（以上、中学校理科）
・注意事項を丁寧に説明していたので、実験をする上では重要なので良いなと思った。
・身近なものを用いて説明していたので、理科をより身近に感じられやすいなと思った。
・予想、結果、考察の流れがスムーズだったので理解しやすかった。（以上、高校工業）

〇教材の工夫（ICT の工夫なども含む）

・復習の時にスライドで写真や図を見せ、生徒に学習内容を思い出させる工夫をしている。

・これから行う実験の動画をスライドでみせ、どのような実験を行うかを示している。（中学校社会）
・実験方法を教科書のイラストを使うのではなく､自分で作って一年生にでも分かるように工夫しているところ。
・ワークシートにおいて､今日の達成度を書く欄があり、生徒側にも教師側にとっても生徒が自分の理解度を見直すことのできる工夫であった。（以上、中学校理科）
・パワーポイントを用いており、スライドや図や動画を用いていたので分かり易かった。（高校工業）
○自分も取り入れてみようと思った工夫
・実験結果をまず生徒たち自身に予想・考察させ、実験で得た結果を生徒たちに理解させやすくしている。
・発問の際生徒が出した意見を用いながら学習内容を説明している。
・めあての達成度を生徒たちに書かせることでめあてからまとめの流れが分かりやすくなっていた。（以上、中学校社会）
・実験において、実験方法や気を付けるべきところを書いた紙を班ごとに用意しており、さらにラミネートまでして、実験中も汚れても大丈夫なようにつくられていたところ。（中学校理科）
・（自分は：筆者注）声も小さく早口になりがちなので、ハキハキとゆっくり聞き取りやすいようにしたいと思った。（高校工業）
○分かりにくかった点・改善点
・実験結果が両方ともに二酸化炭素だったため、同じ気体が発生した理由や、比較などがあればもっと生徒たちの興味関心が想起されたように思う。（中学校社会）
・まとめを板書したがワークシートにはなかったため、プリントに書いたほうがいいのかどうなのかが分からなかった。（中学校理科）
・濁ったという漢字が難しいのかなと思った。（高校工業）
○感想
・授業の流れがとてもスムーズで、生徒たちも実験に楽しく分かりやすく取り組めるとても良い授業だったと思う。特に指示がとても分かりやすく、生徒たちのグループ活動が、理科の実験だけではなく生徒の協力性を養うものだったので教科指導に留まらない教育効果があったように思う。（中学校社会）
・声がはきはきとしており聞きやすい授業であった。また頭を上げてくださいや教科書の何ページを見てくださいなど細かい指示もしっかりしており、一年生に対する授業としてとても適切な授業ができていた。（中学校理科）
・指示が明確で分かり易く、注意事項を丁寧に説明していたので、危険な薬品を扱う可能性がある実験をする上では重要なので良いなと思った。更に、身近なものを用いて説明していたので、理科をより身近に感じられやすいなと思った。声が通っていて分かりやすかった。予想、結果、考察の流れがスムーズだったので理解しやすかった。実習もしたことなく経験が浅いので参考にしたいと思った。（高校工業）

同じ教科の免許を取得予定の履修生の場合は、教科の論理を共有した上で模擬授業を観察しているが、教科内容の細かな点と言うよりも授業を進める上での気づきを得てフィードバックしている。また、専門を異にする中学校社会の免許取得予定の履修生は、実験活動が生徒の協同性を高めるものになり、そうした働きかけがなされている点を指摘している。工業の免許取得予定の履修生は、自身の授業経験のなさから気づきを率直にフィードバックしている。これは、ある教科にとっては当たり前の指示や説明が、他の教科の視点からするとそうではなく新たな発見になることに気づかされることにもなる。このように異なる専門を持つ履修者が集まるなかでの模擬授業とその後の授業検討、コメントシートは学びを振り返る良い契機となっていると言えるだろう。

2）教職実践演習振り返りシート（ポートフォリオ）

本実践演習では､「振り返りシート」としてポートフォリオを作成している。振り返りシートは、授業ごとに学んだことや考えたことを記述する各回の振り返りと15回の授業終了後の全体の振り返りの２本柱となっている。各回の振り返りは200字以上、最後の振り返りは400字以上としているが、特に上限は設けていない。そのため、コンパクトにまとめて記入する学生もいれば、毎回がミニレポートではないかと思われるほどの内容を記入する学生もいる。この振り返りシートから、振り返りの特徴的なものを挙げていきたい。

①グループディスカッションの振り返り

前半のグループディスカッションでは、履修カルテを元にこれまでの学習を振り返ること、自分の強みと弱みを分析することなどをグループで行っている。この授業回の振り返りとして注目しておきたいのは、他者と振り返りを共有することの意味である。

・これまで自分が一人で感じていただけの考えや課題を周囲に話すことで、見方考え方を捉え直すきっかけになりました。
・強みや弱みを教育実習の経験も踏まえて振り返り改めて認識できたことに加え、グループ内で共有することで、他の学生が強みだと感じているところが自分にも当てはまったり、弱みについても同様で、今後の学びの目標だてができました。
・専門科目の違いはあるものの教職課程を履修してきて感じた課題は、みんな似ていると感じました。
・自分の強み、弱みを洗い出して書き出すことで自分の

ことを再確認できました。他の学生の内容を聞くとみんな先生っぽい内容で少し焦りを感じました。教育実習前に自己分析ができたので事前準備に役立たせたいと思います。

ややもすると自分の抱える課題は自分だけのもののように感じてしまうが、共有してみるとその共通性に気づくことがある。そして、他者と意見交換することで自分自身の現在地を確認し、次に進む目標を立てることができていると言える。

② ICT の活用について

模擬授業に入る前の第 6 回授業では、筆者が Google Classroom と Jamboard の使い方を説明し、受講生に生徒の立場で活用するという体験をさせた。学校現場で ICT を活用するとなると、自分が生徒の立場で使ったことがあるという経験だけでなく、授業者として活用した経験も必要になる。そのため、Google Classroom には生徒として体験したあと、教師として登録し、教師権限で模擬授業の資料やアンケートなどを共有できるようにした。これ以外に、受講生各自が自分の教科で構わないので ICT 活用に資するコンテンツやアプリを調べ、全員で共有している。その回では、ICT の活用に関する振り返りが見られた。

・実際に Google Classroom や Jamboard を使ってみましたが、操作に関する点や、もし生徒に使ってもらうとしたら何を目的として使いどのように扱うのかをいかに指示するかなど、自ら使ってみることで考えることができました。ICT を活用するにあたって、ただ使うのではなく、目的を持って活用すること、また様々な教材がある中でそのときの学びに応じて取捨選択をする必要性を改めて学びました。
・（前略）これらのツールを授業中などでうまく取り入れることができれば、児童生徒の学習に対する障壁を少しは低くすることができるのではないかと期待する。と同時に、われわれ教員側はこれらを利用することの意味を明確にしておく必要があると考える。むやみやたらに授業で取り入れれば、良いという訳ではない。児童生徒の理解を助ける為の手段として上記に挙げたツール（Google Forms、NHK for School、Quizlet 等：筆者注）があるので、授業で利用・活用することが目的となってしまわないように気をつけたい。

こうした ICT 活用について第 6 回で踏まえ、第 7 回から模擬授業に入った。早速第 7 回で実際に中学校社会第 2 学年歴史的分野の模擬授業を行った受講生は、ICT 活用の難しさについて下記の通り述べている。

・教育実習を終えて久々に大学生を相手とした模擬授業だったが、やはり手応えや反応が生徒たちとは異なり独特の緊張感を感じた。その中でも、教科書と板書、スライドの 3 つを活用しながら授業を展開していく際の視線の誘導や指示の出し方に改めて難しさを感じて、トップバッターで授業をできたことを活かして、これからの模擬授業を行う方々から学べるようにしていきたい。

多くの受講生がパワーポイントを用いた模擬授業を行っていたが、実際に上記のような難しさが授業後の検討でも挙げられており、その後模擬授業を行う受講生が留意するポイントにもなっていた。

③授業全体の振り返りを通して

振り返りシートの最後に、「授業全体を通して学んだこと、気づいたことについての自己評価をまとめてください」とし、全体の振り返りを促している。実習を必要としない工業の免許を取得予定の学生は、実習を体験した受講生からのコメントが刺激になったと全体の振り返りに挙げていた。

・（前略）教育実習を行ってきた同級生に当たる教職履修生から、同じ目線で改善点などアドバイスをもらえたことで、自分の未熟さに気づいたり、教職履修生としての歴は変わらないのにここまでできるんだという気づきにもなったり、模擬授業をする側も受ける側でもすごく良い刺激になった。さらに、スライドや資料、授業内の工夫、生徒の発言の拾い方、言葉遣い、発言の活かし方、生徒のモチベーションを上げる工夫など、様々な要所要所にそれぞれの学生が持っている良さがあり、それを知ることができた。

他の受講生とのグループワーク、模擬授業でのコメント等から、教職課程の履修を土台に実習で培ってきた教授技術に気づき、それを積極的に自分で取り入れていこうという姿勢が見られる。

また、①グループディスカッションの振り返りでも挙げたが、授業全体を振り返っても、他者との共有に意義を見いだしている受講生は複数見られた。

・周りの人と考えを共有することの大切さです。これに関しては、特に前半の授業で自分の履修カルテの振り返りや ICT 教育について考えたときにそう感じました。履修カルテの振り返りから自分の課題に気づき、それを共有することで、他の人の課題を自分ではどうなのかと新しい視点で考えることができました。
・今までは様々な授業で何かを習得しなければならない機会のほうが多く、振り返る機会がほとんどなかった。しかし、教職実践演習を通じて振り返りを行い、自分自身を見つめ直してみて、苦手なままにしていること

や理解がおそろかになったまま放置していることがあったため、教師になろうと思ったときには改善すべきところを改善してから励んでいきたいと思った。

・教員としての必要な資質や能力と自分が獲得しているもののギャップを認識しておくことの重要性です。同じ授業を受講してきた学生と一緒にこれまでの学びを振り返って意見を共有した際には、自分が認識していない課題も多く出てきたことがとても意外でした。自分の課題がなんなのかをしっかり認識し、不足しているものについては充填しながら身につけることに繋げていきたいです。

・他者との交流やディスカッションを通して、自分自身の強みや弱みを知り、教育として何を軸としたいかを考える重要性です。他の受講生と話し、今までは自分だけで考えていたことについてコメントをもらうことで、自分の考えをより明確にし、今後教職に就く上で自分が何を大切にし、何を実現したいかを再度考えることができました。また、周囲の考えを聞くことで、今まで気づくことのなかった視点に気づき、そしてこれから気づいていく必要のあることについても考えることができました。

以上の振り返りからは、他者と学びを共有することの重要性をこの教職実践演習を通して実感している様子がうかがえる。二つ目の振り返りにあるように、習得とその実践が求められた中で、自分の学びをじっくりと他者と共に振り返る機会はそう多くはなかったであろう。他者と学びを共有することは、これらの振り返りにも表れている通り、自分にない視点に気づき、視野を広げることにもつながっている。そうした機会を持つことの重要性に気づいたことは、本実践演習の成果の一つと言えるだろう。

（3）本事例から考える教職実践演習の課題

本事例から、専門を異にする受講生が集まり、グループワークや模擬授業とその検討会を重ねることの意義を指摘できる。専門の異なる学生が受講するのは、「教育の基礎的理解に関する科目等」「大学が独自に設定する科目」となる。しかしながら、これらの科目は必修科目もあり、どうしても大人数の講義にならざるを得ず、受講生同士で議論する機会は限られてしまう。また授業内容の主眼が各科目で異なっており、振り返りを意識する機会はそう多くはないだろう。

異なる専門の学生が集まり、共に学びを振り返る有用性を感じられるような教職実践演習を運営するには、履修者数や専門のバランス、性格にも左右されることが大きい。毎年授業の初回にアイスブレーキングを行うものの、必ずしも履修者同士が打ち解けるとは限らない。その場合、チーム学校を意識し、協働性を意識させるようなワークを取り入れることも必要となるだろう。

2022年度受講生が挙げた振り返りの意味は、教職課程で学びを積み重ね、教育実習を経たからこそ、実感できるものかもしれない。それは、学んだ内容を言語化し、他者と共有することができるだけの内容を受講生が有しているからこそである。

学期ごとに作成する教職履修カルテも振り返りの機会の一つではある。ただし、2022年度受講生の振り返りを見ていると、履修カルテはある種義務的に入力するもので、それを自身の学びを振り返るツールとしては捉えられていないように思われる。おそらく、教職履修者からすれば時間をかけて入力するものの、それがいつどのように役立つかが分からないということが一つの要因として挙げられるだろう。４年次後期の教職実践演習でこの履修カルテを活用した振り返りが行われることで、履修カルテの意味をようやく理解することができるのかもしれない。教職実践演習で意味のある学びの共有のためにも、学びを言語化するという意識は、１年次から持たせておくことが必要である。

○事例Ｍ：集団指導についての学びをグループ体験を通して深める

この授業では、エンカウンター（構成的グループ・エンカウンター）を実施するための方法や視点を学ぶと同時に、エンカウンター体験が実際にどのようなものであるのか、体験を通して味わうことをねらいとしている。つまり、学校における集団指導についての学びを実際のグループ体験を通して深めていくという点に特色がある。

（1）全15回の授業構成

授業全体の構成は表の通りである。オリエンテーションの後は大きく４部構成となっている。具体的には第一部：グループ体験実習（第３回～第４回）、第二部：エ

表Ｍ-１　授業全体の構成

第１回	オリエンテーション１（スタートアップ授業）
第２回	オリエンテーション２（対面での説明）
第３回	グループ体験実習１（相互理解）
第４回	グループ体験実習２（自己理解・他者理解）
第５回	エンカウンターを用いたクラス運営の実際（DVDの視聴）
第６回	エンカウンターを計画する際のポイント
第７回	ファシリテーションの視点と工夫
第８回	模擬授業の計画１（アイデアの抽出）
第９回	模擬授業の計画２（アイデアの具体化・精緻化）
第10回	模擬授業の実施（第１グループ）および振り返り
第11回	模擬授業の実施（第２グループ）および振り返り
第12回	模擬授業の実施（第３グループ）および振り返り
第13回	模擬授業の実施（第４グループ）および振り返り
第14回	４年間の学びの振り返りと今後に向けて１
第15回	４年間の学びの振り返りと今後に向けて２

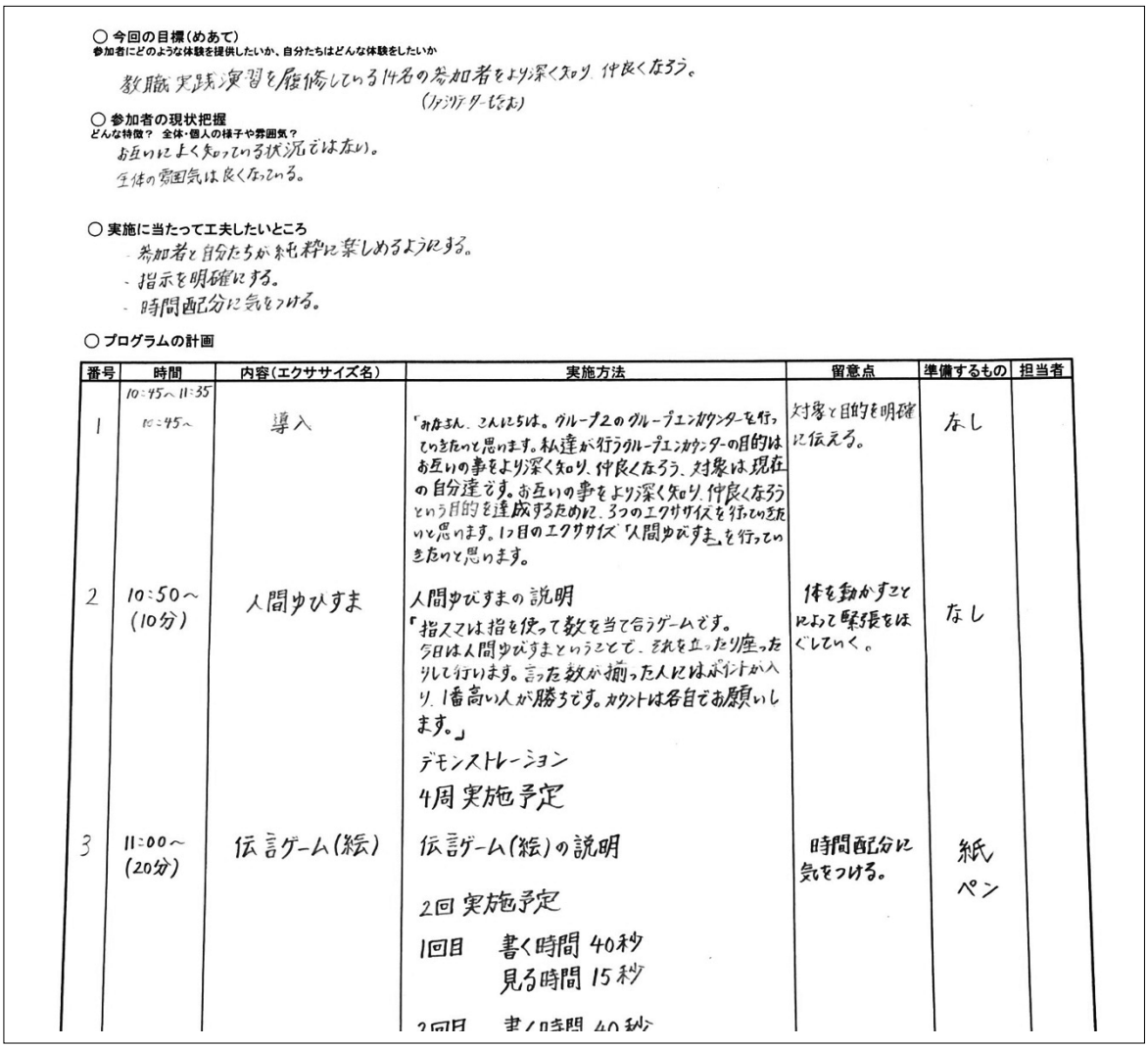
ンカウンターの理論学習（第５回～第７回）、第三部：エンカウンターを用いた模擬授業の計画と実施（第８回～第13回）、第四部：４年間の振り返りと今後に向けた話し合い（第14回、第15回）である。

（２）授業の概要

オリエンテーションを行なった次の週から（第３回、第４回）、さっそくグループ体験実習を行なった。エンカウンターについては、筆者の他の授業を受講した学生はすでに知っているが、初めて受講する学生を含め、エンカウンターではどのような体験がもたらされるのかをまずは感じてもらうことが目的である。それは、その後のエンカウンターの学びの導入としての位置づけにもなっている。また、受講生はお互いのことをまだよく知らず、緊張もしているため、エンカウンターを行うことで相互理解を深め、その後のグループワークがスムースに進むように、できるだけ安心して受講してもらうことが最初の段階では必要であり、エンカウンター体験はそこにも大きく貢献している。

エンカウンター体験を通してエンカウンターが持つ意義の理解や受講生同士の相互理解を深めた後、第５回からの３回の授業では理論学習を行なった。第５回ではエンカウンターをクラス運営に活かしている中学３年生の担任教師とその生徒の事例を動画で視聴し、教師の動きや生徒たちの変化を通してエンカウンターの実際について学んだ。続く第６回では、そもそもエンカウンターではなぜエクササイズ（ワーク）を用いるのかに注目し、その点を「コミュニケーション・デザイン」の観点から説明し（本山，2014）、身近な集団の中でコミュニケーション・デザインを用いた工夫ができないかを話し合ってもらった。第７回ではエンカウンターのファシリテーションを取り上げ、その視点や留意点について説明した。

第８回からはエンカウンターを用いた模擬授業の計画と実施である。１グループ３名～４名として４グループに分け、各グループの実施日を決め、その後はグループごとにエクササイズの選定から実施の仕方の詳細まで、エンカウンターの計画について綿密な話し合いの時間を作った。その際、「エンカウンター実施計画シート」を



○ 今回の目標（めあて）
参加者にどのような体験を提供したいか、自分たちはどんな体験をしたいか

教職実践演習を履修している14名の参加者をより深く知り、仲良くなろう。
（ファシリテーターなど）

○ 参加者の現状把握
どんな特徴？　全体・個人の様子や雰囲気？

お互いに よく知っている状況ではない。
生徒の雰囲気は良くなっている。

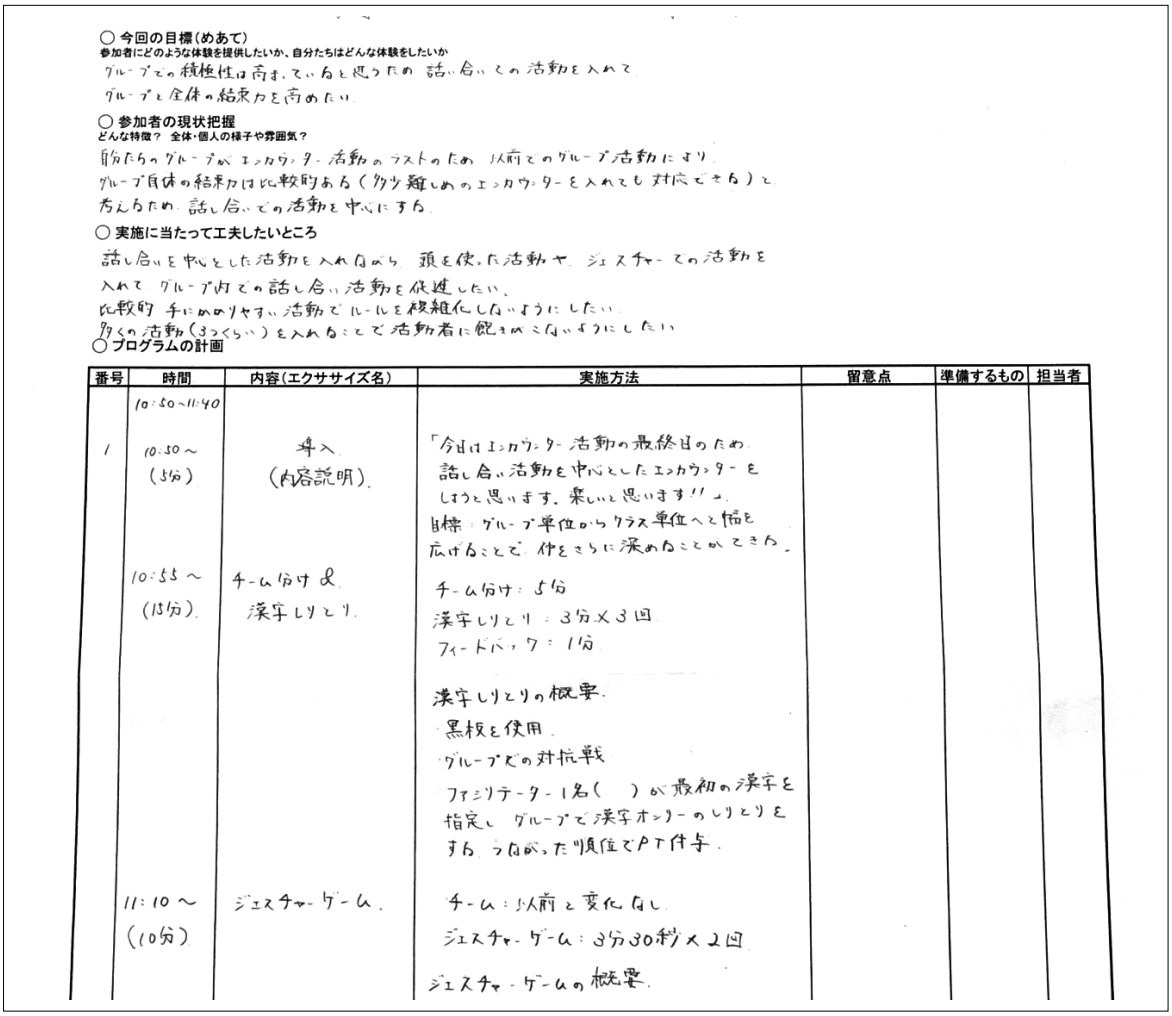
○ 実施に当たって工夫したいところ

- 参加者と自分たちが純粋に楽しめるようにする。
- 指示を明確にする。
- 時間配分に気をつける。

○ プログラムの計画

番号	時間	内容（エクササイズ名）	実施方法	留意点	準備するもの	担当者
1	10:45～11:35 10:45～	導入	「みなさん、こんにちは。グループ2のグループエンカウンターを行っていきたいと思います。私達が行うグループエンカウンターの目的はお互いの事をより深く知り、仲良くなろう、対象は現在の自分達です。お互いの事をより深く知り、仲良くなろうという目的を達成するために、3つのエクササイズを行っていきたいと思います。1つ目のエクササイズ「人間少びすま」を行っていきたいと思います。	対象と目的を明確に伝える。	なし	
2	10:50～ (10分)	人間少びすま	人間少びすまの説明 「指スマは指を使って数を当て合うゲームです。今日は人間少びすまということで、それを立ったり座ったりして行います。言った数が揃った人にはポイントが入り、1番高い人が勝ちです。カウントは各自でお願いします。」 デモンストレーション 4周 実施予定	体を動かすことによって緊張をほぐしていく。	なし	
3	11:00～ (20分)	伝言ゲーム(絵)	伝言ゲーム(絵)の説明 2回 実施予定 1回目　書く時間 40秒 見る時間 15秒 2回目　書く時間 40秒	時間配分に気をつける。	紙 ペン	

図M-１　エンカウンター実施計画シートの一部（その１）



○ 今回の目標（めあて）
参加者にどのような体験を提供したいか、自分たちはどんな体験をしたいか
グループでの積極性は高まっていると思うため 話し合いでの活動を入れて
グループと全体の結束力を高めたい

○ 参加者の現状把握
どんな特徴？ 全体・個人の様子や雰囲気？
自分たちのグループがエンカウンター活動のラストのため 以前までのグループ活動により
グループ自体の結束力は比較的ある（多少難しめのエンカウンターを入れても対応できる）と
考えるため 話し合いでの活動を中心にする

○ 実施に当たって工夫したいところ
話し合いを中心とした活動を入れながら 頭を使った活動や ジェスチャーでの活動を
入れて グループ内での話し合い活動を促進したい。
比較的 手にあかりやすい活動でルールを複雑化しないようにしたい。
多くの活動（3つくらい）を入れることで活動者に飽きがこないようにしたい

○ プログラムの計画

番号	時間	内容（エクササイズ名）	実施方法	留意点	準備するもの	担当者
	10:50～11:40					
1	10:50～（5分）	導入（内容説明）	「今日はエンカウンター活動の最終日のため 話し合い活動を中心としたエンカウンターをしようと思います。楽しいと思います!!」。 目標：グループ単位からクラス単位へと幅を広げることで 仲をさらに深めることができる。			
	10:55～（15分）	チーム分けと 漢字しりとり	チーム分け：5分 漢字しりとり：3分×3回 フィードバック：1分 漢字しりとりの概要 ・黒板を使用 ・グループどの対抗戦 ファシリテーター1名（　）が最初の漢字を指定し グループで漢字オンリーのしりとりをする つながった順位でPT付与			
	11:10～（10分）	ジェスチャーゲーム	チーム：以前と変化なし ジェスチャーゲーム：3分30秒×2回 ジェスチャーゲームの概要			

図M-２　エンカウンター実施計画シートの一部（その２）

用い、まずは実施するエンカウンターの目標、参加者の現状把握、実施にあたっての工夫について整理し、それに沿ってエンカウンターの中身を具体化してもらった。そのシートの実際の記録例が図M-１と図M-２である。今回のエンカウンターは、教師と生徒といったロールプレイ形式にはせず、実際の私たちがどういう体験をしていくとより相互に理解し合える関係になるかという、リアルな設定で行なった。

第10回からは、１グループずつ担当してエンカウンターを実施した。エンカウンターの詳細は以下で説明する。エンカウンターの実施時間は学校の授業の１コマの時間に合わせて50分とした。担当グループ以外の３グループの学生と筆者は参加者となり、担当グループが準備したエクササイズを体験した。50分のエンカウンター終了後は、参加者は参加した感想を担当グループの学生に向けて書き（最後には実際に本人たちに渡す）、担当グループの学生は実施してみての感想を書いて、その後は全員で輪になって15分ほど振り返りを行なった。

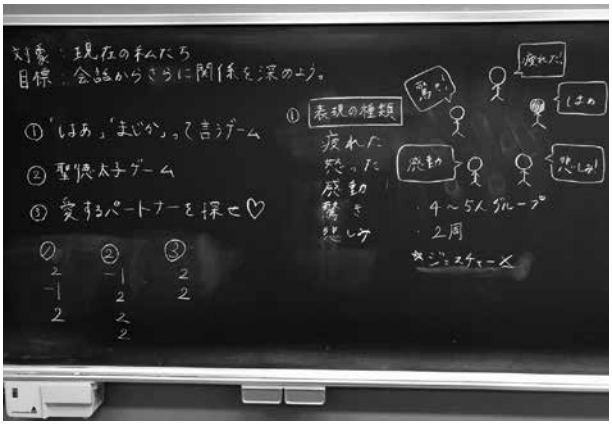
第14回と第15回の２回は、筆者がファシリテーターとなり、輪になっての対話中心のエンカウンターを行い、４年間の大学生活やその中での教職課程での学び、そして卒業後の生活について一人ひとりが語り、聞いている学生はそれに対して感想を伝えながら対話をしていった。この頃には学生同士の信頼関係がかなり作られているので、話す学生も、聞いている学生も、互いに率直に語り合っていた。

（３）エンカウンターを通した模擬授業の実際

４回のエンカウンターの模擬授業を行っていくことで学生同士の関係性は変化していくため、当然ながらそうしたプロセスを考慮に入れながら、コミュニケーション・デザインの観点で計画、実施していくこととなる。

前半はまだ学生同士の交流が不十分で緊張度も高い。そのため、その時期を担当したグループは、ゲーム的な要素の強いエクササイズを取り入れ、緊張を解きながらリラックスして交流できるような工夫が見られた。図M-１にあるように、「人間ゆびすま」や「伝言ゲーム（絵）」を実施するなど、言葉よりも動作を中心とした交流で、緊張していても参加しやすいような工夫を考えていた。その後のグループでは、次第に会話量を増やし、より大

人数での交流を入れていく中で、ワークの手順がわかりやすいように、授業前に早く教室に集まって黒板に具体的な説明を書いておくなど、交流がスムーズにいくための工夫が見られた（図M-３）。一番最後に担当したグループでは、「グループ全体の結束力をより高めたい」という目標を掲げて、参加者全員で交流できるようなワークを計画していた（図M-２）。それまでの３回の実施によって次第に関係を強めていった学生の様子を見ながら、当初の計画を変更したり、実施当日は雪のために開始が10分遅れるなど想定外のこともあったが、臨機応変にファシリテーションを行なって、全員で交流できる場を作っていっていた。



図M-３　エンカウンターを実施した学生の板書例

（４）受講生の感想

毎回の授業の最後に書いてもらった感想から、いくつかを紹介したい。

＜グループ体験実習（第３回～第４回）＞

・今まで話したことのない人とこの１コマでこんなにも話せるようになって、協力して他の班と競ったり一つのことを一緒に考えたりと、エンカウンター・グループの素晴らしさに気づけました。

・新学期のクラス等でグループ活動を取り入れることの大切さ、グループエンカウンターの効果について実感することができた。

・どのワークをとってもみんなで話し合って決めていくところに上手さを感じたし、自然と仲良くなれていく感じは久々に味わいました。

・最初は壁を感じていた人と対話することで、グッと距離感が縮まった。グループワークでは、ペアの人や皆の本来の姿が見えた気がして、最初会った時のイメージと今のイメージが良い方に変わった。

・授業としては３回目で、本格的な活動は２回しか行なっていないのに、これまで受けたどの授業よりもクラスの人との仲が深まっていると感じた。

＜エンカウンターの理論学習（第５回～第７回）＞

・一人ひとりのことを見守り、一人ひとりの良さに気付き、それを生徒に伝えてあげることで、教師と生徒の関係性が深まっていくのだと分かった。

・受験という大きなできごとに対して直接関与するのではなく、きっかけを与えて生徒間で乗り越え合っていく雰囲気を作ることの大切さや、その雰囲気を作れる教師としての資質に感心した。

・コミュニケーション・デザインでは、現状からの理解をしてから工夫できることを考えることで、実践しやすい、しようと思えるだろうから、とても良いものだと思いました。

・このコミュニケーション・デザインから具体的にどんなエクササイズをつくるのか、と考えると少し難しいと思った。

・生徒自身のペースで参加しても良いというところが印象に残った。

・ファシリテーションの視点について、自発性を考え、やらされている感を与えないようにするなど色々な工夫があるのだと知りました。

・今後はグループ活動になっていくので、みんなと仲良くなって最高のものを作り上げたいです。これからが楽しみです。

＜エンカウンターを用いた模擬授業の計画（第８回～第９回）＞

・久しぶりに学習指導案を作成するみたいで楽しかった。

・話し合いの中で、どういう段取りで進めればエンカウンターの内容や目的が伝わりやすいのかを考えること、順番などを特に意識した。

・自分たちがやりたいと思う内容のものを作れば必ず良いエンカウンターができると思うので、楽しんで作っていきたい。

・グループの皆にどのような体験をして欲しいのかを考え、それにあったゲームを考えるのが難しいなと感じました。

・今日はエンカウンターの内容を深めていき、ワクワクするようなエンカウンターができていると思う。内容は前回決まっていたため、より濃い内容を作ったり、細かいところまで決めることができた。

・今日はリハーサルをしてみたけれど、時間配分があまりつかめず、不安が残りました。

・活動内容によって形式を変化させるだけでもねらいを変えることができて、おもしろいと思った。

＜エンカウンターの実施（ファシリテーターとしての体験）＞

・自分がファシリテーターとなって、エンカウンターを客観的に見ることで、エンカウンターの良さ、大切さに改めて気付けました。

・今のクラスのみんながワークに取り組む上で自然に会話が生まれるワークをやりたいなと考えていたので、その点においては上手くできたかなと思います。

・今日は非言語のゲームから言語のゲームを通して、会話からさらに関係を深めるということが目的だった。みんなの協力もあり、とてもいいグループエンカウンターになったと思う。
・グループ３人で協力し合える関係を作り上げることができていたため、共通認識をもって行うことができたと思う。
・意外と準備に手間取った気がしたが、みんながのってくれて積極的にやってくれたので、こちらも臨機応変に対応することができたと思います。

（５）まとめと今後の課題

最初にも述べたように、この授業ではエンカウンターの意義や実施方法について学ぶ上で、受講生が相互に理解や信頼関係を深めていくような実際の生のグループ体験を味わうことを重視している。授業開始時はお互いのことを全く知らない状態からエンカウンターを通して交流が生まれ、皆と一緒にいることの安心感と共に自己表出が増えたり他者への関心が高まるなど、集団全体の変化を直に感じることで、エンカウンターの学びをより充実したものにしていくことが目的である。後半のエンカウンターの計画や実施は、実践的な学習であり、ファシリテーションのトレーニングにもなるのだが、それが形式的なものにとどまらず、このクラスの皆とより関係を作っていきたいという受講生の自発的な思いが重なって、よりリアルな体験学習に繋がっていくのである。

そういう点においては、授業の前半で受講生の自発性や積極性をいかに育んでいくか、そのためのクラスの雰囲気作りをどう進めていくかが非常に重要であり、かつ難しいところである。それを実現していくためには、エンカウンターのエクササイズの難易度を高く設定せず、まずは受講生の皆が楽しく交流できる場を作ることを中心に考えていくことが良いであろう。ゲーム的な要素の高いエクササイズを行う上でも、学生の感想にもあるように、その計画とファシリテーションはとても繊細で奥深いものである。そうした体験をまずはこの授業でして欲しいと考えている。

ただし、このような体験学習が良い形で成立するためには､受講生の毎回の出席が必須である。しかしながら、４年生はこの時期に教育実習が入ったり、就職活動を続けている学生もいて、全員が揃って授業を行うことは困難である。そうした制約がある中でなんとか工夫しながら受講生同士の関係づくりを進め、授業への積極的な参加意識を醸成していくこととなる。

それが上手く展開していった時には、エンカウンターの実施での成功体験はもちろん、その後の授業の、全員での対話中心のエンカウンターにおいて、それぞれが自分にとっての大事なテーマを皆で語り合えるようになっていくのである。今回はこの点の実際の様子を具体的に紹介できていないが、この最後の語り合いの中で、これまで出せなかった一人ひとりの新たな側面が見えてくる。半期の授業の期間にこのような交流ができるようになるまで関係を築くことができたという体験は、その後教師となり、クラス担任としてクラス運営にかかわる際に大きな資源となるだろう。こうした点も、このような授業を行うことの意義の一つであると考える。

○事例Ｎ

（１）2020（令和２）年度の全15回の授業構成

日常的に発生する学級内の問題について取り上げ、それらの解決に資するために指導案を作成し、模擬授業を行うという目的のもと授業を展開した。

具体的な教職実践演習の授業構成は、下記の通りである。

第１回　オリエンテーション：受講生の自己紹介と今後の授業の流れ等の説明。
第２回　教職課程の振り返り：これまで教職課程において学んだことや教育実習経験者は実習を通して学んだことをワークシートの記入や小グループでのシェアリングを通して振り返り、生徒指導や学級経営におけるさらなる課題を挙げる
第３回　テーマの選定：課題を解決するための各自のテーマの選定と実施する活動について、具体的にどのような活動を取り入れていくかを例示、説明しながら検討
第４回　課題の解決策：課題を解決するために取り入れる活動について発表とディスカッション (1)(2)(3)
第５回　課題の解決策：課題を解決するために取り入れる活動について発表とディスカッション (4)(5)(6)
第６回　課題の解決策：課題を解決するために取り入れる活動について発表とディスカッション (7)(8)(9)
第７回　課題の解決策：課題を解決するために取り入れる活動について発表とディスカッション (10)(11)(12)(13)
第８回　模擬授業の実施（30分）と振り返り (1)(2)
第９回　模擬授業の実施（30分）と振り返り (3)(4)
第10回　模擬授業の実施（30分）と振り返り (5)(6)
第11回　模擬授業の実施（30分）と振り返り (7)(8)
第12回　模擬授業の実施（30分）と振り返り (9)(10)
第13回　模擬授業の実施（30分）と振り返り (11)(12)
第14回　模擬授業の実施（30分）と振り返り (13)
第15回　まとめ

受講生は13名であり、商学部、経済学部、スポーツ科学部、人文学部、理学部と所属学部は多岐に渡った。

（２）特色ある取り組み

模擬授業を実施する前に、模擬授業で取り入れたいワークについての発表とディスカッションを導入したことである。学級内の問題について解決するための授業に

ついて、イメージが湧かない学生が多いのではないか、という懸念からまずは課題に基づいたワークを調べ、検討する機会を設けた。それによりその題材で質のよい模擬授業を展開することができるのではないかと考えた。学生のワークを終えた時点での感想を下記に示す。下記の内容からは、実際に模擬授業に向けての学びがあったことが窺えた。

ワークの発表を終えた時点での感想：

・模擬授業の内容を考えるなかで、他の学生さんの発表や発言を聞いて自分の考えていたものが穴だらけであり、狙った学習効果を得るためには作り込みが不十分であるということが理解出来た。これからそれらを改善していくためには、先生や他の学生さんのアドバイスを真摯に受け止め、取り入れる工夫をする必要があると感じた。また、似たような取り組みをしている前例となるような授業を調べ、良い点悪い点を自分で見極め授業の中に組み込んでいきたいと思う。特に適切な授業の導入についてよくわかっていないので研究していきたい。

・様々な課題の中で人それぞれワークのアイデアがしっかり考えられていて、ワークや模擬授業を考える上で役立つと思った。また、ワークを発表し、みんなから指摘やアドバイスを受け、ワークの詰めの甘さを感じ、より良いワークにするためのアイデアをいただき、良い体験ができたと思う。（スポーツ科学部）

・私は、教育実習に行っていた期間のワークを聞くことはできませんでしたが、聞けた分だけの中では、非常に参考になるものばかりでした。特に私が感じたことは、「視点の違い」です。商学部の方や、私と違い中学に教育実習に行かれた方のワークやワークを作るにあたっての体験談などは私が全く考えていないようなものばかりでした。この講義を通して自分の視野をより広げることができると感じています。（人文学部）

この取り組みを踏まえて、模擬授業の実施へと至った。模擬授業においては、30分という短縮された時間の中で、始まりからまとめまでの「流れ」を意識し、どのように導入するかという点も検討して実施された。模擬授業を実施した学生は、ワークに実際に取り組んでもらうことにより、その効果や意義、難しさを体験し、参加した学生は、生徒としての参加者体験が得られた。心理教育や構成的エンカウンターグループなどを授業に取り入れる際には、実施する者の参加者体験も重要である。模擬授業を通して、いくつもの活動の参加者体験を積むことができることは、貴重な経験となったと考える。

図 N-1　模擬授業の様子

（3）上記の内容において特に良かったと感じられたもの

模擬授業は、「時間の使い方」や「自己理解」、「薬物乱用防止」など様々なテーマで実施された。その中で最も印象に残った取り組みは、SNS におけるコミュニケーションについて考える模擬授業である。生徒の身近な SNS について、具体的な例示（図 N-2）を用意して考えさせる内容であった。授業回も終わりに近い時期での模擬授業の実施であったため、これまでの他の学生の模擬授業を受けての工夫等もみられ、しっかりと学んできたことが窺える模擬授業であった。この学生に限らず、模擬授業の参加者を体験して模擬授業に臨んだ学生の多くに、上記に述べたとおり、複数の活動の参加者体験を積んだことによる工夫がみられた。下記の学生の授業に対する感想からも学びが多くあったことが示されている。

授業評価アンケート FURIKA に示された授業への感想：

・専門教科以外の学級活動の模擬授業などはなかなかする機会が少なかったのでとてもいい経験になった。また自分がするとき以外にも周りの人の模擬授業を受けることで考え方や知識、授業展開の仕方など自分にないものを多く感じることができた。

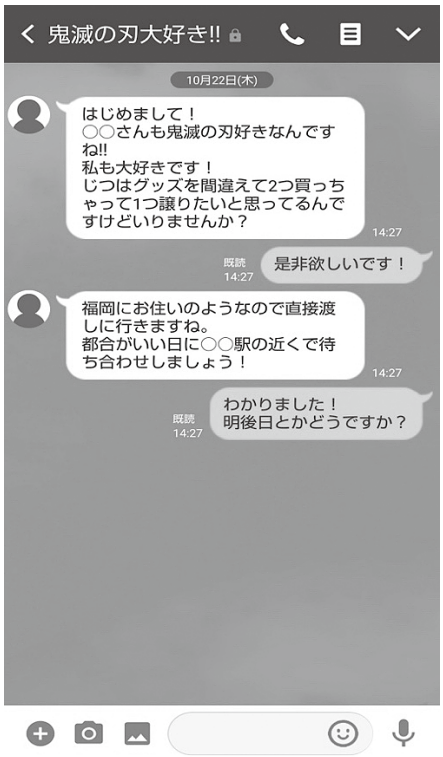


図 N-2　SNS に関するワークの題材

・教員を目指す学生に必要な姿勢や考え方を身につけることができた。他の学生から客観的な意見を貰えたことも自身の成長のためにはとても良い経験となった。新たに見つけた自分の弱点を改善していきたい。
・模擬授業などを通して、自分には思いつかない視点からのアドバイスや、よかった点などを先生や他の学生から教えてもらえて、よかったなと思います。授業を作る上で大事なこと、意識すべきことを学べたと思います。

以上の感想からは、受講する学生の学部が多岐に渡っていたことも学生の幅広い学びにつながったと考えられる。模擬授業を実施するのみではなく、多くのディスカッションを通して幅広い考え方や視点などを学ぶことができたと考える。

（4）教職実践演習の課題

課題として、１クラスの人数が挙げられる。これまで担当したクラスはほとんどが13～15名であった。この人数では、一人一人の発表の時間、模擬授業の時間等全15回の中で配置することに工夫が必要になる。もう少し少人数で実施することができれば、模擬授業の時間を取り、ディスカッションにもゆっくりと時間をかけ、より充実した演習を行うことができると考えられる。

○事例Ｏ（2022年度）

（1）受講生の実態

（1）進路予定
教職４人、教職以外の職５人、大学院進学５人　計14人
（2）教職実践演習への期待（複数回答）
ゲストティーチャー講話９人、仲間づくり７人、教育に関する情報提供５人
模擬授業５人、グループワーク４人、グループディスカッション３人
（3）教職カルテから明らかになった課題（上位３課題）
①学級経営力（学級経営案を作成することができる）
②教育課程の構成に関する基礎理論・知識（教育課程の編成に関する基礎理論・知識を習得している）
③情報機器の活用（情報機器の活用に係る基礎理論・知識を習得している）

（2）報告

教職カルテから明らかになった課題（上位３課題）の②に対しては、カリキュラム・マネジメントに関する講義及び演習を行った。

また、③に対しては、グループでICTの活用方法やメリット・デメリットについて調べさせて、それを基に全体で交流した。

本稿では、①学級経営力（学級経営案を作成することができる）に関する講義・演習の実際について、特色ある取り組み事例として報告することにする。

1）学級経営力に関する取り組み

受講生に学級経営力に関する教職カルテの自己評価について尋ねると、他の項目に比べて個人差が大きいことが分かった。

次に、学級経営について教職課程のどの科目で学んだのかと尋ねると、「よく覚えていない」など、曖昧な答えが返ってきた。

さらに、学級経営案の作成経験について尋ねると、全員が作成したことが無いと答えた。学級経営が、教科指導や生徒指導の基盤になることを考えると、卒業までに、学級経営の意義や学級経営案の目的を理解し、実際に作成する経験をしておくことは、極めて重要なことである。

以下、学級経営力育成に関する取り組み（講義・演習）について述べる。

◇学級経営とは（講義）

年度始めに学級経営案を作成して、計画的・継続的に教育活動を推進していくことが重要であることを伝えたうえで、学級経営目標の例を示しながら、具体的な内容や留意点について講義を行った。

（学級経営目標）
・組織づくり（生徒一人一人がいきいきと活躍できる役割やルールをつくる）
・生徒理解（学校生活を通し，一人一人の思いや願い，特性等を把握する）
・授業づくり（分かる喜びや学ぶ意義を実感させ，主体性や自己有用感を高める）
・集団づくり（生徒相互の関係を築き，豊かな人間関係や支持的風土を形成する）
・環境整備（意図的，計画的な掲示等で，安心，安全な教育環境をつくる）
・その他（保護者対応，学習規律，学び方，学級事務等）

◇学級経営案の作成・交流（講義・演習）
・学級経営案とは（講義）

「学級経営案とは，一年間を通してどのように学級経営を行っていくかを示す計画案です。子どもたちの実態や保護者の願いなどに学級担任としての思い・願いを加えて，よりよい学級づくりへの道筋を示す計画を作成しましょう。」（参考資料：学級経営案の作成と活用～よりよい学級づくりへの道筋～埼玉県教育局東部教育事務所編）

・学級経営案の作成（演習）

作成例を参考にしながら各自で学級経営案を作成し、グループ内で交流する。

（学級経営案様式）

令和　　年度　　第　　学年　　組　　学級経営案

担任氏名	

1　学級の実態

（1）在籍及び家庭数

男	女	計	家庭数

（2）自転車通学者

男	女	計

（3）配慮を必要とする生徒

1	
2	
3	

2　学級経営目標

「　　」

・

・

3　学級経営方針

・

・

4　学級経営努力事項

項　　目	努　　力　　事　　項
学習指導	
生徒指導	
教室の経営	
学級の事務	
家庭との連携	

5　その他

2）本取り組みの成果

受講生の感想及び授業評価「FURIKA」の記述より、以下を抜粋する。

◇受講生の感想（学びの履歴書より）

・学級経営目標には､様々な要素があることが分かった。学級経営をよいものにするためには、生徒一人一人に向き合い、多様な生徒・保護者がいることを念頭に置くことが重要だと分かった。

・学級経営案には、細かな項目があって難しいと感じたが、学級経営の軸がぶれると生徒が困惑するだけでなく、不信感にもつながると思うので、学級の基礎固めという意味でも重要だと分かった。

◇ FURIKA の記述

・毎回の情報提供動画がすごく為になったし、グループワークが多く、嫌でも発言しないといけないという状況のおかげで、人見知りを改善することができたと思うし、自分の意見をしっかり述べることができた。また、学級経営について知ることができた。

（3）教職実践演習の課題

今後の教職実践演習では、以下の点も意識し、実施していく必要があるだろう。

◇「主体的で対話的な深い学び」の実現を目指す演習形態及び方法

・学生一人一人に課題意識を持たせる情報提供や講義内容の工夫

・グループワーク（ディスカッション）による協働的な学びの充実

・ICT の効果的な活用（生成 AI 含む）

◇今日的教育課題に対応できる教育実践力育成を目指す演習内容の工夫

・いじめ、不登校、児童虐待等、生徒指導に関わる課題

・カリキュラム・マネジメント、探究学習等、教育課程に関わる課題

・児童生徒理解、学級経営、保護者・地域連携等に関わる課題

◇教育改革の動向を理解し、主体的に関わっていこうとする態度の育成を目指す演習内容の工夫

・「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について
～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（中央教育審議会答申）

・次期教育振興基本計画について（中央教育審議会答申）

○事例 P

本事例では、2022（令和４）年度に開講された教職実践演習（中・高）における一授業の取り組みについて紹介する。

本授業の目的は、教職課程の学びと教育実習の学びを統合することにより､受講者の教科指導力､生徒指導力、学級経営力を伸展させ､教員としての｢使命感や責任感｣、｢社会性や対人関係能力｣､｢生徒理解や学級経営・授業力｣等の資質を育むことであった。

そのため､講義とロールプレイ､議論の組合せにより、模擬授業の準備と実施、考察を中心とする授業を展開した。具体的な手順としては、受講生には、教職履修カルテの確認、教育実習の振り返り（経験者のみ）、教育実習の課題及び学習指導要領を踏まえた学習指導案の作成と議論、学習指導案に基づく模擬授業、模擬授業に対するフィードバックの確認、まとめのレポートの作成を行わせた。

（1）特色ある取り組みの紹介

本授業の受講生は、14名であった。原則として、教育実習校の担当クラスでの授業を想定しながら、学習指導案（単元、単元目標、指導計画、本時の指導目標、指導上の留意点、教材等）を作成させた。限られた授業回数（全15コマ）のなかで、すべての受講者に担当させるために、１回40分間の模擬授業（短縮授業）を行わせた。担当者以外の受講者には生徒役を演じさせた。また、模擬授業の際には「ビデオ・聴衆フィードバック」を取り入れた（髙妻ら，2016）。すなわち、模擬授業の様子は教室後方から三脚付きビデオカメラ（SONY 製 VLOGCAM ZV-１）にて撮影を行い、撮影動画は YouTube（Google 社のオンライン動画共有サービス）にて受講者のみに公開し、指導教員及び他の受講者からフィードバック（肯定的なコメント）を模擬授業の担当者に与えるようにした（図 P-１参照）。

各担当者の模擬授業の単元及びテーマは、以下の通りであった。

１．高等学校、総合的な学習の時間「SDGs 目標７ エネルギーをみんなに。そしてグリーンに」

２．高等学校、総合的な学習の時間「ディベート」

図 P-１　YouTube で限定公開した模擬授業の様子（撮影動画）

3．中学校、道徳科「社会参画、公共の精神」
4．高等学校、保健体育科「生涯を通じる健康、高齢者のための社会的取り組み」
5．高等学校、保健体育科「生涯を通じる健康、高齢者のための社会的取り組み」
6．高等学校、保健体育科「運動と健康」
7．中学校、総合的な学習の時間「私たちの福岡市を○○な街へ（福岡市の都市計画）」
8．高等学校、総合的な学習の時間「世界を結ぶ交通・通信」
9．高等学校、国語科「能」
10. 高等学校、総合的な学習の時間「障害者の人権」
11. 高等学校、公民科「福祉社会と日本経済の課題」
12. 中学校、総合的な学習の時間「平和ナガサキ」
13. 高等学校、数学科「図形と計量」
14. 高等学校、総合的な学習の時間「経済成長と可能性」

（2）上記の内容において特に良かったと感じられたもの

いずれの受講者も、教育現場での学習指導経験があり、指導教諭からの助言を受けていたものの、自らの指導の様子を客観的に観察したのは今回が初めてであった。以下は、各担当者のまとめのレポートから、「ビデオ・聴衆フィードバック」についての言及を抜粋したものである。

「自分が授業を行なっているところを客観的に見ることは初めてであったため、非常に新鮮であった」
「模擬授業を終え、自分の講義動画を視聴しての評価点は、身近な話題を用いて導入をすることができたという点である。この点は教育実習中の社会の授業をする時にも、特に指導教員の先生から強く言われたことだった」
「自分自身の癖などが授業に表れることで生徒にも何かを感じさせてしまうということに初めて気づくことができました」
「大事なことを生徒に理解させるためには、授業の雰囲気が重要であるため、教員の話し方などで表れる態度は非常に重要なものであると学んだ。生徒は自分の鏡だと思って、授業を作り上げていく必要があると感じた」
「他の人の授業を受けることで生徒側の気持ちも体験でき、真似できること、自分が思いつかなかったことを発見できた」
「板書計画をしっかりと行うことができていたので黒板の使い方は上手にできたと思います」
「私の授業の客観的な課題として、話し方の癖も十分に課題になっていたが、どの部分が大事な部分なのかがわかりにくいという、一本調子で授業を進めてしまっているという課題がある」
「普段の国語科の授業が縦書きということもあってか、横書きの板書に不慣れで、文字が曲がってしまっていたので、もっと板書の練習もする必要があると感じました」

各担当者のレポートには、概して、教育実習の課題の想起と関連付け、撮影動画を通じた客観視による自己の気づき、他者のモデリングを繰り返したことによる自己の気づき、望ましい行動の確認と自己強化等が示されていた。こうした効果は、模擬授業の主観的な想起や一度限りの観察では生じにくいものであり、主に「ビデオ・聴衆フィードバック」による教育成果と考えられた。

（3）教職実践演習の課題

本稿では、教職実践演習（中・高）の一授業における取り組みについて紹介した。「ビデオ・聴衆フィードバック」を伴う模擬授業の評価は良好なものであったが、課題も残された。近年の傾向として、教職課程の履修科目であっても、教職志望の学生が少数派となり、模擬授業以外を欠席する学生が少なからずいたこと。授業期間中に教育実習が重なり、教職希望であっても、やむを得ず授業を複数回欠席する学生がいたこと。動画撮影と撮影動画のアップロードには労力と時間を要したため、授業と授業の合間のホームワーク（動画視聴やフィードバック）に平均４日ほどしか猶予を設けられず、ホームワークの遂行が徹底できなかったこと等である。必ずしも授業自体の工夫によって改善する問題ではないが、課題の一部は、ティーチング・アシスタント（TA）や学習管理システムの積極的な導入によって、改善することができるかもしれない。本事例はあくまで2022（令和４）年度の一例である。教職実践演習の取り組みとしては、今後も PDCA サイクル（Plan-do-check-act cycle）による試行錯誤が求められるだろう。

○事例Ｑ

私は2022（令和４）年度の入職で、教職実践演習の授業の経験は2022（令和４年）度後期の１回しかない。授業内容は以下のとおりである。

（1）教育実践演習の時間に行った取り組み

第１回　スタートアップ授業として概要の説明（オンデマンド）
第２回「アイスブレイクとリフレーミング」
①授業開始にあたり、学生の進路状況を把握するために「教職実践演習進路調査票（令和４年９月現在）」を記入させた。学生が将来教職に就くのか、大学院に進むのか、どこかの学校で教師をするのか、民間企業で働くのか、進路状況を把握して、汎用的な授業を実施したいと考えたからである。
②アイスブレイクとは何か、バースデーチェーンで他己紹介のペアを決め、後期のこの授業の仲間になるための他己紹介を一人二分で行った。他己紹介のルーブリックも提示した。紹介相手を確認し、どん

なことをインタビューするか､項目を考えさせた後、実際のインタビューをし、発表に向けて順番を考えさせてから、発表（他己紹介）に臨んだ。他己紹介の後、リフレーミングとは何かについて考えた。このワークそのものがこの授業のアイスブレイクとなるように考えて授業をデザインした。学生たちは、打ち解け、この後、非常に仲が良い雰囲気ができていった。

第３回「リフレーミングとアクティブラーニングの心構え」

①前回のリフレーミングについて実践した。自分の短所、自信がないことを、ペアの相手に言い換えてもらうというワークをした。

②次に学級担任として調査書所見欄を書いてみるというワークをして、リフレーミングの手法を実際に使ってみた。

③アクティブラーニングについて説明し、シンクペアシェア、バスセッションについて、実際に生徒役になって実践してみた。

④ジグソー法の手法を紹介した。

第４回「思考ツールの活用」

①様々な思考ツールの紹介

②大縄跳びを行うメリットをウエビングマップで考えるというワーク

③ベン図、PMI チャート、座標軸、フィッシュボーン等の思考ツールの使い方、実際の使用例を分担して調べ､発表して共有するというワークを実施した。PMI チャートは第11回の以降の模擬授業においての相互評価に活用することとなった。

第５回「合意形成のロールプレイング」

①授業をアクティブラーニング化するコツ「インテイクスイッチ」について説明

②フォロワーシップの大切さについて

③脚本型ロールプレイング「学級旗を作ろう」のワークをして、それぞれの立場の気持ちを経験した。

第６回「傾聴と即興型ロールプレイング」

①支持的風土について

②「傾聴」の演習　相槌、頷き、姿勢、体の向き、豊かな表情の必要性について体験した。

③即興型ロールプレイング「消しゴム投げ」

④即興型ロールプレイング「授業中、他の授業の宿題をする生徒」

③、④については様々な背景を抱えた生徒の存在について気づきを得た。

第７回「貧困　人権　男女共同参画」

①家庭の SES について

②不利な環境を克服するために学校ができることについて協議

③即興型ロールプレイング「応募前職場見学」

④即興型ロールプレイング「家事の手伝い」

第８回「アサーション」

①即興型ロールプレイング「研修会に参加できない女性学年主任」

②即興型ロールプレイング「相手を傷つけない断り方」

③即興型ロールプレイング「貸したもの返して」

第９回「授業構想メモ」

①次回からの模擬授業のための指導案作成、そのための授業構想メモの活用

第10回から第14回「模擬授業」

模擬授業は各自の進路に合わせて、教科の授業をする者、道徳や学級活動、ホームルームの時間をする者、企業の新人研修会の講師をする者等、バラエティに富む内容であった。以下に代表的なものを挙げる。

また、すべての模擬授業の回において、思考スキルの時間に紹介した「PMI チャート」を使って、相互評価をした。

①高校１年生、ホームルーム「ジョハリの窓」を使って自己理解を深める

②中学３年生、道徳の時間「決まりを守ることの大切さ」教材は「二通の手紙」

③中学２年生、学級活動「自分の気持ちをコントロールする」

④中学３年生、学級活動「進路選択の気球」

⑤中学２年生、学級活動「地域貢献」

⑥社員研修「話し方講座」

⑦中学３年生社会、「開発と保全のバランス」

⑧企業新人研修「電話の取り方、クレームの対応」

⑨中学１年生､学級活動「交通事故にあわないために」

⑩高校３年生、ホームルーム「進路について」

⑪高校３年生、ホームルーム「統一応募用紙」

⑫高校３年生、ホームルーム「公正な採用選考」

⑬高校２年生、ホームルーム「SNS と人権侵害」

⑭社員研修「報連相の大切さ」

⑮高校１年生、ホームルーム「悩みの相談」

⑯中学３年生、ホームルーム「食事から命について考える」

⑰中学２年生、理科「光合成」

⑱高校１年生、ホームルーム「幸せについて」

第15回「教師に最も必要なこと、学び続けることの大切さ」の講義

（２）上記内容について特によかった（学びの振り返りを促せた、教職への意識付けを高められた）と感じられたもの

１）対面の授業開始にあたり、学生の進路状況を把握するために「教職実践演習進路調査票（令和４年９月現在)」を記入させたことは､授業設計に有効であった。

学生が将来教職に就くのか、大学院に進むのか、どこかの学校で教師をするのか、民間企業で働くのか、進路状況を把握できて、それぞれの職場で役立つ汎用的な授業が実施できた。

2）第15回を除き、すべての授業をアクティブラーニングの体験の場としたことは、受講生に大きな意味があった。アクティブラーニングを聞いたことはあっても実際にどうやるのかわからないという学生が体得できて有効であった。また、ずっと学生主体であったので、授業は教えてもらうものではなく、自分たちで学ぶものだという意識付けができた。

3）非常に仲の良い、まさに支持的風土のクラスになったことは、学生が授業に取り組む上でも非常に良かった。少人数の演習クラスで徹底的にアクティブラーニングを実施したためか、学生同士がよく知り合い、仲間として協力する雰囲気ができた。

（3）教職実践演習の課題

いろいろな演習から学生は様々に学んでいくことを改めて認識した。様々な機会を設定することが重要である。以下は学生のリフレクションペーパーからの抜粋である。

1）今回の授業を通して、改めて心理的安全性の重要性や、リーダーシップについて考え直すきっかけを得ることができた。また、常に学び続けることの重要性について、自分事として意識することの大切さを痛感した。

2）ICT の探究について学んだ。行動力や信頼されたことに対する動きなど学べる部分が多かった。何事も学べるときに学んでおくと予測困難な未来でも柔軟に対応していけると感じた。半年の間で学ぶことが多かった。自己成長につながった。

3）合意形成には一人一人の存在が欠かせず、決して否定しないことが重要だと思った。また、担任はすぐにかかわるのではなく、生徒自身で解決させることの重要性を学んだ。

4）先生自身が楽しく授業を行うことはすごく大切だと思いました。生徒側も楽しく授業を受けて生徒の記憶に残る授業を私も行いたいです。

5）授業をやっていく中で、講義する側が用意したものだけでなく、生徒の反応や学びによって完成していくものだと改めて感じました。

6）模擬授業は他の人が学んできたことを吸収できる最高のチャンス。めちゃくちゃ勉強になったし、楽しかった。

7）今日の授業で話す人でクラスの雰囲気が大いに変わると感じました。授業テーマや授業資料スライドを工夫するのはもちろん、それよりも話し方や表情でクラスの雰囲気を作ることを先にしなければいけないと感じました。まずは明るく、人が聞きやすいトーンで話すことを心がけたいです。

8）傾聴のロールプレイングを通じて苦戦したのは、「どうすれば背景にたどり着けるか」でしたが、今思えば、だからこそうまくいかなかったのかと思っています。もっとシンプルに生徒のことを知りたい、という視点から「最近は〇〇で忙しいの？」と投げかけることからはじめればいいとわかった。

〇事例 R

（1）授業の構成および内容

本授業では、グループワークで教職での学びの振り返りを行った後、ロールプレイと模擬授業を通して教育実践についての省察と課題の発見を行った。授業の締めくくりとして、教職において求められる伝統文化を含む文化的体験活動を行った。

2022（令和４）年度における授業の具体的内容は表 R-1 の通りである。

どのような内容であったか、具体的に説明する。

1）グループワークによる振り返り

授業の序盤において、グループワークによる振り返りを実施した。第２回授業では、これまでの教職課程での学びを「履修カルテ」をもとに振り返った。第３回授業では、教育実習の振り返りを実施した。

実施方法は以下の通りである。まず、受講者を 2－3 グループに分け、代表者を決定した。グループ内で、全員が意見を出し合い、考えをまとめる。最後に、グループの代表者がグループ・ディスカッションの内容を発表した。

2）ロールプレイ

続いて、教育実習での経験を生かし、具体的な教育場面を設定したロールプレイを実施した。第４回授業における「朝の会の講話」と、第７回授業における「生徒指導場面における指導」である。

それぞれの具体的手順および内容については、後述する。

3）模擬授業

授業の後半は、主に模擬授業に充てられた。この期間において、受講者は各自、教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間の１コマ分の授業案を作成し、25分間の模擬授業を行った。なお、一部受講者は小学校教員志望であったが、当科目が「教職実践演習（中・高）」であることから、全員に中学校または高等学校の模擬授業を課した。

１回の授業で２名が模擬授業を行った。２名の模擬授業が終了した後、全員で各授業についての反省会を行った。反省会では、まず授業者が自らの授業について振り返り、他の受講者がコメントを述べ、最後に授業担当者が講評を述べた。

表R-1　2022（令和４）年度における授業の具体的内容

回	内容	事前準備	課題提出（Moodle）
1	オリエンテーション（スタートアップ授業）	―	―
2	教職課程の学修の振り返り ・自らの学びを振り返る ・質疑応答および意見交換	履修カルテを参照（印刷もしくは画面表示）	オンラインテキスト
3	教育実習の振り返り ・振り返り ・質疑応答および意見交換	教育実習に関する資料類の整理および手元で参照	オンラインテキスト
4	ロールプレイ①：朝の会の講話（第１回） ・講話 ・反省会	３分間の講話を準備する（実際の教育実習での実践でも可）	評価シート（授業後提出）
5	模擬授業に関する説明 ・ガイダンス ・担当日の決定	模擬授業の教科を考えておく	（提出なし）
6	模擬授業の準備 ・模擬授業構想の発表（３分程度） ・意見交換	模擬授業の学習指導案を準備 ・電子ファイルで準備 ・未完成でも可	（提出なし）
7	ロールプレイ② ・ロールプレイ ・反省会	課題は当日に提示するので、その場で考え、ロールプレイを行うこと	評価シート（ファイル）
８～13	模擬授業 ・50分間授業の学習指導案のうち、導入と主要部分のみ25分間の授業	授業担当者は、前日17時までに学習指導案および教材等をMoodleにファイル提出	授業担当者（授業前日17時提出）①模擬授業指導案 ②教材の写し
14	１）期末レポート（提出締切１月16日）に関するガイダンス ２）総括・反省 ・教職課程全体を振り返って ・今後に向けて	これまでの学習物（オンライン・紙媒体）を持参	（提出なし）
15	ワークショップ	１）茶道文化体験 ・茶道についてのガイダンス ・作法（礼など） ・「盆略点前」の体験 ２）博物館見学（別日） ※受講者の都合が合わず中止	期末レポート （１月16日締切）

４）ワークショップ（茶道文化体験）

授業の最終盤に、ワークショップを実施した。2018年度および2019年度に、茶道文化の一部を体験するために「点茶体験」を実施した。2020年度・2021年度はコロナ禍のために実施できなかったものの、2022年度は新型コロナウイルス感染症対策が緩和されたことを受けて、３年振りに茶道文化体験を再開した。

今回の茶道文化体験では、「盆略点前」という基本的な茶道の正しい点前を部分的ではあるが体験してもらうよう計画し、最低限の道具を準備した。受講者には、抹茶碗（もしくはカフェオレボウルなど同等の大きさの容器）と菓子（まんじゅうなど）を準備してもらった。新型コロナウイルス感染防止のため、体調不良の者は事前に申告して欠席するよう指示した。その結果、残念ながら数名は欠席となった。

授業では、まず、出席者を２人一組として、向かい合って着席してもらった。それぞれの組において、ひとりが亭主役となり相手のために茶を点てて供し、客は茶が点てられる間に自分で準備した菓子をいただき、点てられた茶を喫した。

なお、当日欠席者への補習を兼ねて、一定人数以上の参加を条件に博物館見学も計画していたのだが、受講者の都合が合わず最少催行人数に満たなかったため中止とした。

５）成績評価

本授業の成績評価は、①期末レポート（１月16日締切）、②模擬授業（提出された学習指導案含む）、③ロールプ

レイおよびグループワークの成果および振り返り（ワークシートおよびMoodleへのオンラインテキスト入力）を材料として、総合的に実施した。

（2）特筆すべき取り組み

本授業における特筆すべき取り組みとして、ロールプレイについて詳述する。

1）概要

本授業では近年、2回のロールプレイを導入している。本年度は、「朝の会の講話」（第4回）と「生徒指導場面での指導」（第7回）を実施した。

実施の流れは次の通りである。①スタートアップ授業動画で授業計画を説明する際、ロールプレイについても説明を行った。②実施回の前の授業時に、実施するロールプレイの内容を説明し、受講者に必要な準備をしてもらった。③授業当日は受講者が単独で教師役を務め、他の受講者は生徒役もしくは観客として参観した。④全員がロールプレイを終了した後、反省会を実施した。⑤授業終了後、ロールプレイについてのワークシートを提出してもらった（第4回授業では紙媒体で、第7回授業では電子ファイルで提出）。

以下、それぞれのロールプレイについて内容および受講者の反応を紹介する。

2）朝の会の講話（第4回授業）　※9名出席

受講者は、朝の会（ホームルーム）の場面での、生徒に対する講話を行った。当日の指示は次の通りである。

【場面設定】朝のHR（朝の会）で3分間の講話を行う
【条件＞評価基準】
①単なる連絡事項の伝達ではなく、時事ニュースなどを題材に取り入れている
②先生として生徒に伝えたいことを、生徒の学年や実態に応じて的確にわかりやすく伝える
③姿勢・発声などにおいて、生徒に向き合っていることを意識する
（1）説明
（2）内容を考える（5分）
（3）3分間講話
ワークシートの1．に自分も含む全員の講話について記録・評価する
ひとりの発表終了後に、評価シートに記入する時間を1分設ける
（4）反省会（15-20分）
1）下記の順に行う
①自分の講話についての振り返り・反省／印象に残った講話（1分程度）
②意見交換
③授業担当者の講評
（5）ワークシート提出（授業終了後）

講話者は、3分間の講話を行った。他の受講者は、配付されたワークシートにそれぞれの講話内容についてメモをとり、①題材の選択、②先生としてどうか、③姿勢・発声の三つの項目についてよかったかどうかの五段階評定を行った。なお、講話者自身も自分の評価を行うよう求められた。

反省会では、全員より活発な意見が出された。まず自分自身の講話については、「時事（ニュース）を話したいことに繋げるのが難しかった／苦しかった」という意見や、「話の内容が暗くなってしまったこと」や「強引な展開になってしまった」といった反省がみられた。印象に残った講話を挙げてもらったところ、「同じトピックでも展開が異なっていた」講話、「自分の経験」について語る講話、「今起きていることを自分の生活に繋げることができる」講話、「SNSへの注意喚起」に関する講話が印象に残ったとのことであった。また、「対話的な話し方」「暗い話よりは明るい話の方がよい」というように、ことばの使い方、語り方、話題選択についての意見が出された。

授業後に提出されたワークシートの振り返りでは、下記の意見が出された。以下、一部を紹介する。

・生徒の姿を頭に入れながら、日々の生活の中で、ニュースなどを見て、ヒントや情報をつかむことを心がけるようにしたい。
・他の人の話し方や話題を聞いてとても勉強になった。
・同じ題材でも遣う（ママ）言葉や間の取り方に個性があったので、とても勉強になった。
・自分の過去の体験を入れるとより具体的になることが分かった。知識を増やさないと、と思った。
・話す内容にばかり気を取られていたが声のトーンやテンポも聞かせる中で大切だと気づいた。
・自分のもつ生徒の事態（ママ）ではなく、中学3年生みんなに言えるような抽象的な話し方であったり、視点で話してしまったため、もっと生徒の生活や将来に近づくように少し具体的な話し方にすればよかったと思った。
・他の人の講話を聞いて、実際に起こっている問題を学生（ママ）にありがちな現状をうまく絡めてあって、現実味があり分かりやすかった。･･･
・朝の会は、学校に来てすぐに始まるから、生徒たちはあまり元気がないと思います。だから、朝から暗い話をするよりは、明るい興味が少しでも湧く話をした方が良さそうだと思いました。声の大きさや目線を変えるだけでも話を聞こうという気持ちが全然変わってくるだろうと思いました。話し方をほめてくれる人がいて嬉しかった。
・朝の会から暗い話をしてしまった。もっと明るい話を。
・（今回は準備していたので3分話せたが、実際には）週（に）何度か言わないといけないので準備する時間はないと思います。何も見なくてもスラスラと話せるようになりたいです。

3）場面指導（第７回授業）※８名出席

「生徒指導」場面設定で、三つの場面から選択してもらい、授業担当者が生徒役、受講者が教師役としてロールプレイを行った。三つの場面および教示は下記の通りである。出席者（８名）の選択結果は、生活指導０名、部活動５名、学習活動３名であった。

なお、部活動の指導場面について、生徒が所属している部の設定は、すべて異なるものであった（ソフトテニス部、ソフトボール部、剣道部、吹奏楽部、美術部）。どの部に属しているかについては授業担当者がランダムにその場で提示した。

場面：個人面接（職員室以外で行う）　生徒役：担当教員
【生活指導】高校１年生２学期：夏休み明けから、制服の着崩しが目立つようになった
【部活動】高校１年生２学期：「部活動をやめたい」と考えるようになった（生徒の希望による面談）
【学習活動】高校３年生１学期：模擬試験の結果、志望大学の判定がよくなかった
※上記３つの問題から自由に選択すること
※ひとりあたりの時間は４分間

部活動にかかる指導場面においては、複数の者が、生徒が部活動をやめたい理由は人間関係にあるのではないか、と確認しようとした。別の受講者は、生徒を励まそうと自分の考えを伝えようとしていた。一方で、生徒の話に耳を傾けようとする受講者もいた。

学習活動にかかる指導場面においては、勉強の仕方、時間の使い方、得意教科を生かした上で他教科の底上げを行うこと、への助言がみられた。

以上のように､ある程度制約があったにもかかわらず、教師役の受講者による生徒（役）への働きかけ方は多様であったといえる。

反省会では、指導の意図と反省点が述べられた。生徒がもっと話しやすい雰囲気作りが必要であった、自分自身が経験した部活動と異なっていたためうまく切り返し（応答）ができなかった、といった意見が出された。

他の人の良い点への言及もみられた。たとえば、ある学生の働きかけが良かった､生徒への共感を示していた、新しい選択肢を示していた、生徒の近況を聞いてアイスブレイクのような導入をしていた､などである｡同じテーマで話しても着眼点が異なっており、どの言葉が生徒に刺さる（ママ）かは個人差がある、という気づきを述べる者もいた。

以下に、授業後に提出されたワークシートより、振り返りの部分を抜粋する（下線は筆者による）。

・生徒が何について悩み相談しているのか。その原因は何なのか理解するためにも質問することは大事だと思います。しかし、質問をしすぎて生徒にプレッシャーを与えないよう生徒の言葉を優先し、話したいことを最後まで話させるといった配慮が大事だと思いました。
・同じ面談内容でも人によって異なり、個性が出る事について理解する事が出来た。／他の先生にも相談をするように促す事も必要なのではないかと思った。／生徒が先生は見てくれているとわかるような言葉を掛ける事でより生徒が相談し易い雰囲気作りに繋がる事を学んだ。
・（講評で「生徒のプライドの尊重」に言及）確かに私も高校生の頃は先生に自身のプライドから本当に悩んでいることは打ち明けられなかった。生徒には生徒の考えやプライドがあり、それは何よりも尊重すべきであることに改めて気づいた。しかし、相談しやすい、話しやすい先生であることによって少しでも話してみようと生徒に思ってもらうこともまた重要であると考えるため、生徒指導以外の場面でも、生徒の意見を否定せず、一度受け止める姿勢を意識することが大切だと思った。
・今回のロールプレイで実践的な場面指導を経験したことで、さまざまな場面を想定した指導について勉強していかなければならないと感じた。生徒の状況は一人一人違い、その指導の場面も変わってくる中で、いかに生徒の声を聞き、現状からの解決策を提案し導けるか、それは私自身の言葉だったり、振る舞いにかかってくると思うので、今日出た反省点を活かし力を身につけていきたい。
・生徒指導は様々なケースがあり、臨機応変に対応していくためにも、様々なケースについて調べ、自分だったらどのように対応するかを考えておくべきだと感じました。
・今回の授業で行ったロールプレイは、あくまで“ロールプレイ”であって､ある程度の場面が定められていた。しかし、教師という職に就いた場合、生徒から相談を受けてその場で初めて聞かされるものが大半であると思う。そこで、わずかながらでも、将来に備えて、また１人でも多くの生徒の悩みを解消できるように、対応の仕方を学んでいければと思う。

（3）意義

本授業は、文系・理系の双方を含む多様な学部の学生が受講していた。したがって取得予定免許の教科も多様である。このことは、受講者にとって有意義であったと思われる。たとえば、受講者の最終レポートにおいて、模擬授業で他の教科の授業を見ることができてよかった、他の教科の学生からのコメントがこれまでとは異なる視点で新鮮だった、といったことが述べられていた。

授業の序盤での振り返りを通して教職課程や教育実習で得られた課題に気づき、ロールプレイや模擬授業で課題に取り組むことで、受講者たちは新たなる課題に気づき、教職に向けての心構えを確かなものにしたように思われる。それは､授業アンケート FURIKA における､「教員になるために必要な課題を知ることができた」「自身

の教員に向けての課題について理解し、改善するために何が必要なのかを考えることができた。」といった自由記述回答からもうかがえる。

教職課程の総決算としての教職実践において、多様な学生がひとつのクラスに集い、互いに学び合うことの意義は大きいものと考えられる。また、振り返り、ロールプレイ、模擬授業（、ワークショップ）といった多様な活動は、学生の複合的・重層的な学びに寄与しうるものであると、本授業を通して気づいた次第である。

○事例Ｓ：自己肯定感をテーマとしたディスカッション

（１）テーマについて

若者の自己肯定感の低さが、社会的な問題として認識されてきている。たとえば、内閣府が実施した「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」（2018年度）によれば、「自分自身に満足している」という項目に対して肯定的に答えた割合は、45.1％にとどまり、諸外国の若者と比べたとき、著しく低い数字となっている（下図S-1参照）。実際、大学において学生と接するなかでも、学生たちの自己肯定感の低さを痛感する場面は少なくない。

こうした背景のもと、「生徒の自己肯定感の低さに対して、教員としてどう向き合えばいいのか」というテーマは、教職実践演習で設定するテーマとして実践的な意義を有すると考えられる。

（２）事前指示について

以下の形で全員・担当者（２名）に事前指示を行い、それぞれの事前準備のもと、当日の発表・報告になった。なお、関連資料についても、配布している（今回は省略）。

○今日の目的

生徒の自己肯定感の低さについての考え方を整理し、そのうえで対応の仕方などについて交流する。方法はディスカッションをメインとする。

○事前準備について（全員）

下の２つのケースについて、Forms に意見を記してください。意見は、①そもそも生徒に対してどのような方針で臨むのか、②問題は何か、③その他注意すべきことは何か、などを考えて記入ください。

○事前準備について（担当者）

以下の準備を進めてください。

① それぞれのケースについて、２人で意見の交流をして（メールなどで OK）、他の受講生よりも意見を深めておいてください。２人の意見をまとめて（議論の過程、結論など）、文書にしておいてください。

② Forms で集めた意見を、２人で目を通しておいて、当日の議論の組み立て方を考えておいてください。

③ 役割分担についてそれぞれのケースの司会進行をする人を決めておいてください。

○ケース検討の仕方

ケースごと

① ケースの確認

② ケースについての意見の紹介（他の受講生の意見を分類して紹介してください）

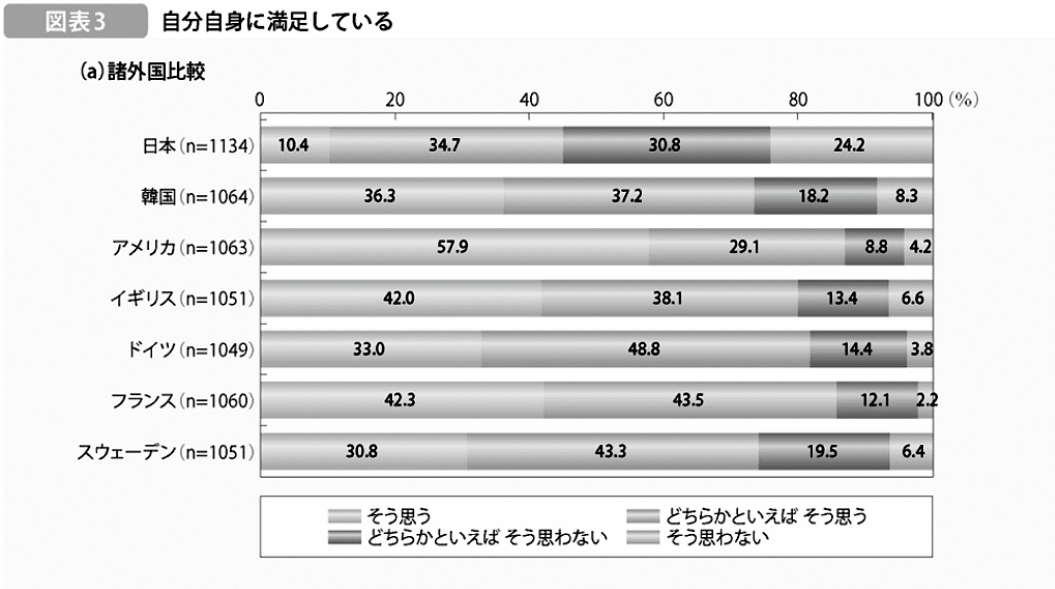
③ ケースについての担当者側の意見の紹介

④ 全員討論

●ケース１

＜設定＞

進路多様校に通う高校女子１年生（A さん）。校内での成績は平均。学校にも馴染んでいるが、積極的なわけ

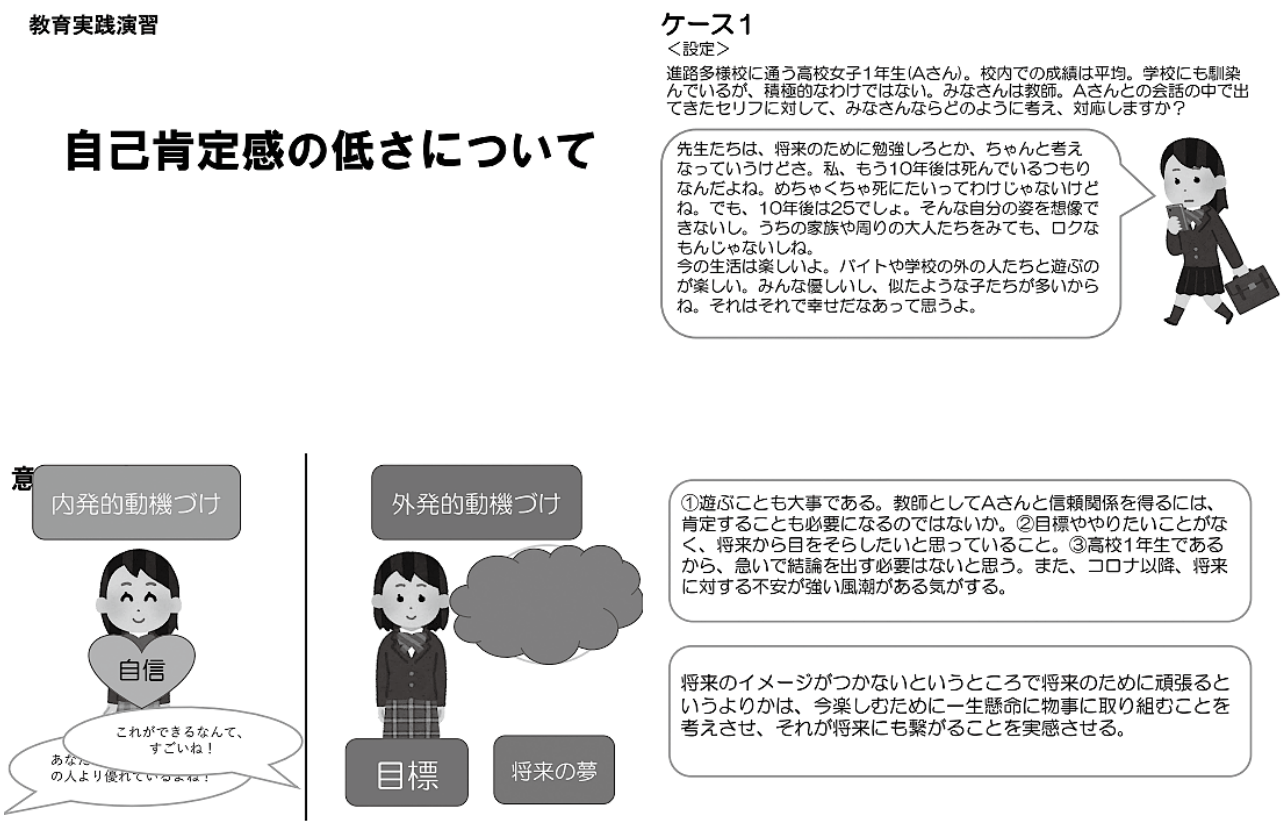


図Ｓ-１　自分自身に満足している
（「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」（2018年度））

ではない。みなさんは教師。Ａさんとの会話の中で出てきたセリフに対して、皆さんならどのように考え、対応しますか？
＜Ａさん＞
　先生たちは、将来のために勉強しろとか、ちゃんと考えなって言うけどさ。私、もう10年後は死んでいるつもりなんだよね。めちゃくちゃ死にたいってわけじゃないけどね。でも、10年後は25でしょ。そんな自分の姿を想像できないし。うちの家族や周りの大人たちをみても、ロクなもんじゃないしね。
今の生活は楽しいよ。バイトや学校の外の人たちと遊ぶのが楽しい。みんな優しいし、似たような子たちが多いからね。それはそれで幸せだなあって思うよ。
●ケース２
＜設定＞
　新しく３年生の担任になったあなたは、公立中学３年生のＢさん（女子）に出会います。あなたから見て、特段、問題がないように見えていたＢさんでしたが、彼女は、あなたに対して、「部活のみんなが自分の悪口を言っている」、「兄より勉強できないから親に失望されている」と話し、「その原因は自分は出来が悪いから。だから、死にたいときがある」と話します。
　そうした彼女に対して、あなたは、どのような方針で、何を問題として対峙しますか。

（３）授業においての学生の発表事例

　授業においては、担当者がパワーポイントで、ケース１・２についての全員の意見をまとめながら、それぞれの応用事例を自分たちで作成し、全員討論へと移った。ケース１・２の検討をふまえての、応用事例の検討であったため、討論では論点も絞られ活発な議論が展開された。以下、ケース１・２に関する当日の議論の内容である。



生徒が将来について明るく考えることができていないことが問題だと思います。今関わっている人とは楽しいと言っているので、これから出会う人たちともいい関係が築けるはずだと思うので、もっと明るく考えるように接していくと思います。

様々な進路があることを提示しながらAさんの意思や内心に思っていることを引き出すような話し方をする方針。②社会的な知識や経験というものが浅いことが問題。③個人的な意見としては本人が気付くまで、教員は手助けをしないというスタンスじゃないと本人の自己肯定感は高まらないと思う。

先生もAさんみたいに高校生の時は将来の自分の姿を想像できなかったよ。もちろん、世界にはいろんな考えを持つ人が沢山いるからロクな大人じゃないって思うかもしれないね。だけど、大人になるにつれて色々と考え方が変わるし、大人になっても今のようにしく幸せだと感じるにはやっぱり勉強が大事だと思うよ。このように、将来に対する不安を除きながら勉強の大切さを伝える。

大学より先の自分の進路について明確なイメージが持てていないことや、何か悩みがあり自暴自棄気味になっていることが考えられるため、その子の得意なことを確認したり、長所を伝えてあげたり、自己理解を深めてあげるのが良いと思う。

①自分を見つめる場や機会を作り、Aさんが将来したいこと、なりたい職業などを見いださせる。②Aさんが未来の自分の姿を想像できてないこと。③無理やり進路を決めさせて、勉強させないこと。

内閣府の調査によると、年齢が上がっていくにつれて将来への明るい未来を見出せなくなっている傾向にある。これは、年齢と共に理解できることが増えていき、現実を見る機会が増えるからだと思う。この生徒に関しては、周りの人間や大人の悪い面を見て将来への希望を失いかけているため、社会は悪いことばかりではないことを話す。また、この生徒自身は現状には満足している傾向にあるため、生徒自身が周りに流されることなく、自分を持って成長していけば人生楽しく過ごしていけると伝える。

①将来のことは誰にもわからない。もしかしたら生きているかもしれないし、亡くなっているかもしれない。大切な人ができて生きたいと思うことがあるかもしれない。その大切なことのために勉強は必要だ。といった感じで、一期一会などについて述べて想像できない未来について話す。②将来の夢や望みがない。かといって外の世界の人と遊ぶのは楽しい。 ③絶対論を述べて強要はしないこと。

ケース１の応用事例～みなさん考えてみてください！

＜設定＞

公立の中学校に通う中学3年生のCくん(男子)は、校内での成績は平均以下、不真面目で提出物の期限を守らず、内容もいい加減である。サッカークラブに所属しており、活動的で友人も多い。公立高校の受験を希望している。

得意科目である歴史に対しては興味関心があり、学習意欲も高いが、それ以外の、特に苦手科目に対しては全く真面目に取り組まない。口癖は「無理、できない」、「俺は頭が悪いからこんなのできるわけない」。褒めても「偶然だ」と前向きに受け取らない。

あなたは教師。Cくんに、苦手科目に対しても真面目で意欲的に取り組んでほしいと思っている。Cくんとの会話に出てきたセリフに対して、皆さんならどのように考え、指導しますか？

その際、自分の担当教科の場合に置き換えて考えてください。

俺はバカだし、地理が苦手だから、やってもわからないからやりたくない。歴史は得意だから、歴史なら勉強する。
そもそも地理を勉強する意味ってある？将来に必要ないでしょ。

ケース２

＜設定＞

新しく3年生の担任になったあなたは、公立中学3年生のBさん(女子)に出会います。

あなたから見て、特段、問題がないように見えていたBさんでしたが、彼女はあなたに対して、「部活のみんなが自分の悪口を言っている」、「兄より勉強できないから親に失望されている」と話し、「その原因は、自分は出来が悪いから。だから死にたい時がある」と話します。

　そうした彼女に対して、あなたは、どのような方針で、何を問題として、対峙しますか。

①生徒の自尊感情を育てる。②家庭でも学校でも自分を他者と比較して捉えているところ。他者に承認されていない。③しっかりと長所を把握すること。

自分を全てマイナスに考えていることが問題だと思います。確かに成績だけを見れば、兄より劣ってるかもしれませんが、自分にしかできないことが必ずあると思います。なので、自分の良さを引き出して生活したらもっと楽しくなるというように接していきたいです。

周りからの評価全てが自分の価値だと思っているため、自分ができることや、少しでもの成長を実感できるように教員側で褒めることやBさんができるようになったことや成長できた思えることをノートなどに書かせて自己肯定感を上げる。

Bさんの普段の行動から「Bさんはクラスで一番掃除に取り掛かるのが早くて、何事にも一生懸命頑張っていて」など、些細なことでいいので褒める。それに加えて、なんでも完璧に出来る人はいないよ。お兄ちゃんより勉強ができないと思うなら何か一つでもお兄ちゃんより出来ることを探そうよ！ということで、普段から見られていると言う安心感と、他者に勝るものを探すこれからの希望を感じさせられると思う。

①自分にしか持つことのできていない「個性」というものに気づかせるようにアプローチをかけていくことが大事。②「失望されている」や「悪口を言われている」などネガティブな捉え方をしてしまうこと。③自分がこのケースを対応するなら例え話などを用いながら話を進めていくと思います。

私はその子の得意なこと、お兄さんとの違うその子の個性を伸ばす方針で行きたいと思います。また、部活動に関しては事実確認をした上でいじめの疑いがあるかどうかを確認して状況によっては顧問の先生などと連携して対応に当たりたいです。

Bさんの長所、努力していることを伝えて、自分の良さに気づかせる。 ② 自分が周りの人よりも劣っていると感じていること。

①人それぞれであり、BさんにもBさんなりの良いところを見つける。悪口は羨ましいだけかもしれない、親もギャフンと言わせようと提案する。 ②実際に周りや家族に肯定感を否定されている ③言葉の使い方でBさん自身に対して、マイナスなイメージを持たせないようにする。

日本社会は周りと違うことを悪とする風習がある。これがBさんの悩みにつながっていると思う。このため、勉強できること、部活でうまくできないことは悪いことではないことを伝えていく。人にはそれぞれ得意、不得意があるため、今はBさんの得意な分野で頑張って、自信をもつことができてきたら、不得意を克服していくように促す。

ケース２の応用事例～みなさん考えてみてください！

＜設定＞

入学して1ヶ月。高校女子1年生Dさんは、授業が始まると腹痛を訴えて保健室に行き授業にはほとんど参加しない。友人はいるけど親しい間柄ではない。部活ではサッカーをしており、活動的ではあるが、自己中心的で気が強い性格である。

授業以外の時間に話を聞いて欲しいと職員室に頻繁に訪ねてきては、時間が許す限り話し続ける。皆さんは英語教師です。

そうした彼女に対して、あなたは、どのように対応しますか？

すぐにペアを組ませようとしてくるから、先生の授業には出たくない。授業出て欲しいならペアワークはしないで。授業にもうついていけないから嫌。クラスメイトが自分の悪口を言ってる。死にたい。

（4）考察

「生徒の自己肯定感の低さに対して、教員としてどう向き合えばいいのか」というテーマで行った授業は、学生たちはとても意欲的に取り組み、議論も活発に行うことができた。テーマが現代的であり、自分達にとっても身近であったことが、関連していると思われる。また、事例分析を中心とした授業の進め方も適していたと考えられる。

〇事例Ｔ：学生の振り返りを通してこれからのキャリアを考える教職実践演習

教職実践演習は、４年間の教職課程の学びの集大成の科目として位置づけられている。そのため、授業ではこれまでの教職課程において何を学んできたのか、何を身に付けてきたのかを振り返り、その意味を考えることが求められる。それは、教師として求められる資質能力に照らし合わせて自分を振り返ることはもちろん、学生自身の卒業後のキャリアに合わせて自分を振り返ることにつながる。現実的に、本学を含め、開放制の原則に基づいて設置されている教職課程を有する大学・学部の多くは、教員免許を取得したとしても、全員が教壇に立つわけではない。そうであるならば、教職実践演習において確認すべきことは、教師としてどの程度の力が身に付いたかだけではなく、自分の進むキャリアに向けて何が身に付いたかにあると考える。

以上を踏まえ、本教職実践演習では、必ずしも教師になるとは限らない学生がいることを念頭に、教職課程での学びを振り返り、自身のキャリアを考える内容を計画した。具体的には、教育実習の振り返りや模擬授業の共有に加え、以下に続く３つの活動を行った。

①自らの教育観を振り返るワーク

本学の教職課程は、１年次からスタートするゆえに、学生たちは４年間をかけて「教育」について学びを深めてきたことになる。それは、４年間をかけて、自身の教育に対する見方、すなわち「教育観」を身につけてきたことを意味する。そこで、自身が有している教育観は、どのようなものであるのかを認識するワークを行った。

まず､「教師は、〇〇〇べきだ」という文章について、学生個人で「〇〇〇」に該当する言葉を考えさせた。その後、各学生が考えた文章をすべてホワイトボードに書き出し、共通している内容として、以下の５つの文章を取り上げた、

・教師は、生徒をよく見るべき
・教師は、生徒に寄り添うべき
・教師は、元気で健康であるべき
・教師は、学び続けるべき
・教師は、模範であるべき

その後､グループになって､この５つの文章に関して、

最も重要な順に並び変える作業を行った。ある種の順位付けをするということは、教育的価値をめぐって、お互いの意見をぶつかり合わせることになる。それは、自分が何を最も大事にしているのか、ということを自身が認識する機会となる。グループでの議論の結果、「生徒をよく見るべき」という文章を１位にしているグループもあれば、4位に取り上げているグループも存在していた。そこで、なぜ差があるのかを全体で議論することで、自分たちが何を重視しているのか、ということが明確になってくるわけである。

この「教育観」を振り返るワークは、自分が暗黙の中で有しているものを明確にする作業である。教職課程を通じて構築された「教育観」は、教師にならない場合でも、例えば民間企業において新入社員に対して教育する場合や、自身が親となったときに子どもを教育する場合等、学校教育に限らない「教育観」を構築する上でも、大きな影響を及ぼすものとなる。そうした自身の中で構築されている教育観を振り返る場としても、教職実践演習の果たす意味があると考えられる。

②多様な教育の姿を検討するワーク

近年、学校における子どもの多様化の進展を背景に、従来の学校教育からの転換を目指す学校づくりの実践が進められている。こうした実践は、日本の学校教育が有する「標準化された側面（例えば校則や、学級の閉鎖性）」の問題点をあぶりだす。現状の学校教育を批判的かつ相対化して捉える作業は、いわゆる「批判的思考力」を養う上でも重要であると考える。

本教職実践演習では、二つの学校づくりの実践の動画を視聴し、その後グループディスカッションを行った。動画は、世田谷区桜丘中学校元校長の西郷孝彦さんの実践（「校長は反逆児」NHK、2020年５月11日放送）と、大阪市立大空小学校元校長の木村泰子さんの実践（「みんなの学校」関西テレビ放送、2013年５月５日放送）である。前者は校則をすべて撤廃し、生徒の自主性を最大限に尊重する学校づくりの実践として、後者は「すべての子どもの学習権を保障すること」を理念に置いたインクルーシブ教育の実践として、多くの注目を集めたものである。

グループワークでは、それぞれの実践の特徴と疑問点を出し合った。例えば大空小学校の実践に関しては、校長のリーダーシップの重要性、多様なスタッフとの連携、保護者との関係づくり、学級を超えた学校全体での児童への関わりといった点が特徴として挙げられた。他方で、「本当にすべての児童が納得して学んでいるのか」、「中学校との接続はうまくいくのか」、「異動してきた教員は大変ではないか」といった疑問点が出された。こうした疑問点は、これらの実践がこれまでの学校の姿を変えるものであるという認識がある中で、それを絶対的に正しいものとするのではなく、さらに実践上での課題を探った中で浮かび上がったものであり、その意味において学校のあり方を深く検討した成果だと考えられる。

③教職課程での学びと今後のキャリアを結び付ける活動

本教職実践演習では、15回目の「まとめ」の授業の際に、学生一人ひとりに発表する時間を確保している。具体的には、卒業後の進路を紹介するとともに、教職課程で学んだこと、そしてそれが自分の進路とどのように結びつくかという点について、資料を用意して、プレゼンさせる活動である。

冒頭で示したように、本学の場合、教員免許を取得するものの、民間企業等の別の進路を選択する学生も少なくない。その場合でも、教職課程での学びを振り返ることで、自分のこれからのキャリアにどのようにその学びの成果を生かすことができるかを振り返ることは、単なる免許取得にとどまらない教職課程での学びの意味を検討することにつながる。例えば、民間企業への就職が決まっている学生は、「授業の雰囲気づくりの方法を活かして、顧客との関係性を構築する」や「生徒の立場で授業を構想することは、相手の立場に立って考えることにつながる」といった意見が出された。教職課程での学びを自らのキャリアにひきつけて振り返り、その意味付けを行うことで、教員にならない場合でも、教職課程での学びをより積極的に意義付けることができていると考える。

図 T-1　プレゼンの様子

3．考察

本稿では、福岡大学における教職実践演習の事例を提示してきた。これらの事例を踏まえ、「新たな教師の学びの姿」や省察に関わるものとして以下の３点を挙げておきたい。

第一に、受講生の多様な構成である。教職実践演習を履修する受講生の専門はさまざまである。これはどのクラスについても当てはまることではあるが、特に、事例C、事例E、事例F、事例I、事例N、事例O、事例T

で顕著なように、複数の学部や多様な進路に進む学生が受講している。受講生が多様な構成になることで、自分の専門とする教科以外の受講生からのフィードバックを受けることやディスカッションを行うことが可能になる。学生自身の専門教科以外からの視点でフィードバックを受けることにより、他の専門教科との違いが明確になると同時に、自分の専門性を改めて捉え直すことに繋がり、「新たな領域の専門性を身につけるなどの強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した『個別最適な学び』」が可能となる。多様な専門性や価値観を持つ受講生同士が関わることで、チーム学校に求められる協働・連携の基盤が形成される。

第二に、各教員の専門性を活かした演習である。教職実践演習は、受講生が多様なだけでなく、教員も多様な専門性を持っている。事例Ｄ、事例Ｍ、事例Ｐ、事例Ｒのように各教員の専門性や強みを取り入れた演習が展開されている。受講生は、教えられる側でありながら、教育実習や模擬授業では教える側も経験する渦中にある。この両面を経験している際に、各教員の専門性の発揮はロールモデルの一つになり、自身の教師としての専門性を発揮する具体的方法を学ぶことが可能となる。

第三に､リフレクションを重視した演習の構成である。事例Ａ、事例Ｇ、事例Ｈ、事例Ｊ、事例Ｋ、事例Ｌ、事例Ｑ等の事例において、振り返りやディスカッションが多く取り入れられている。これにより「変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという『主体的な姿勢』」、「他者との対話や振り返りの機会を確保した『協働的な学び』」が促進され、各自が経験した教育実習や模擬授業をより立体的・重層的に振り返ることができる。事例Ｓのように、若者の自己肯定感をテーマとしたディスカッションでは、当事者でもありながら教える立場にたって考える機会が設けてあることで、自己理解に繋がる。事例Ｂで示されるように、上手くいかなかった経験から自信をなくした学生も、再査定を経験し、学生相互でフィードバックし合うことにより、自信を取り戻すという経験をしている。養成課程においては、上手くいった経験も重要である一方、上手くいかなかった体験から新たな学びを得る経験をすることも重要である。単に主観的に上手くいった・上手くいかなかったではなく､同じ立場である受講生同士の対話を通して、より客観的な省察の機会になり、その素地の形成に繋がる。

以上３点の考察と高妻ら（2016）で示された福岡大学における教職実践演習の特色と課題の関係性についても述べておきたい。「多様な学生、多様な教員、多様な教職実践演習」という特色は、上記の第一と第二の点からも分かるように、福岡大学における教職実践演習の良さとして維持されていると言えるだろう。とりわけ、事例Ｃ、事例Ｅ、事例Ｆ、事例Ｇ、事例Ｍ、事例Ｎなどで取り上げられているテーマは、2022年答申で示された子どもの多様化やSociety 5.0、多様な専門性を有する教師の養成にも関係するものである。たとえば、多様な専門性という点では、答申では「強みや専門性」に、「データ活用、STEAM教育、障害児発達支援、日本語指導、心理、福祉、社会教育、語学力やグローバル感覚なども含まれる」（33頁）とされている。当然のことながら、これら強みや専門性は教職実践演習で養えるものではない。しかしながら、こうした点から自らの学びを振り返り、教育現場の課題を捉え議論するといったことにつながっている事例も見られる。これは、授業担当者である教員の専門性の多様さが活かされていると言うこともできるだろう。

続いて、2016年段階で福岡大学における教職実践演習及び教職課程の課題として挙げられた点についても見ておきたい。

まず、実践的学びの機会の設定と教職課程全体における位置づけについては、依然として課題であると言えるだろう。今回の事例のなかでも、他学部・他学科の履修者とディスカッションすることの有用性が受講生から語られていることが示される。では、こうした機会をいかに設定しうるのか。開放性の原則の下、認可を受け、教職課程コアカリキュラムに沿い授業を提供している大学の場合、他学部・他学科の受講生で構成する低年次教職ゼミを開こうにも、大規模大学であるが故に時間割の設定や担当者の問題など、クリアすべき点が多い。であるならば、「教育の基礎的理解に関する科目等」「大学が独自に設定する科目」において、授業内でディスカッションを採り入れるという工夫が現実的である。しかしながら、そうした工夫が受講生に歓迎されるかは受講年次やクラス規模、クラスの雰囲気に拠るところが大きい。

実践的学びと合わせて考えておくべきことは、リフレクションであろう。事例Ｌのなかで、教職課程では「何かを習得しなければならない機会のほうが多く、振り返る機会がほとんどなかった」という受講生の声があげられていた。こうした声もしっかりと受け止める必要があるだろう。座学での知識の習得であれ、実践の経験的な学びであれ、リフレクションがなければそれは次の学びや実践につながらない。履修カルテはリフレクションの一つのツールではあるが、それが教職実践演習を受講する４年次まで学生自身によってリフレクションとして活用されていない。学びを落とし込んでいき、さらに深く学び続けられるように、リフレクションの仕掛けをどのように設定するのか、という点も今後検討が必要であろう。

次に、教職に就かない学生も履修するなかでの学生指導についての共通理解である。事例Ｋ、事例Ｑ、事例Ｔは、教職を履修しながらも卒業後すぐには教職に就かない受講生を意識した取り組みがなされている。教職実践

演習は教職課程の集大成として位置づけられていることから､教職を目指す学生として受講生を扱いがちである。しかしながら、上記の３つの事例は、教職課程での学びが教師になる者だけに活かされる学びではなく、広く一般化して自身のキャリアにも結びつけられる学びであることを受講生に意識させている。こうした授業運営はややもすると教職実践演習の趣旨に反すると捉えられるかもしれない。とはいえ、開放性の原則の下で教職課程を設置している大学で学ぶ学生の現実を鑑みるならば、こうした工夫は、一般就職の学生を排することなく、学びの場でかれらのキャリア展望が尊重されたと学生に感じさせることにもつながる。教職に就かなくとも、教育になんらかの関心を持った学生たちであるため、こうした工夫はかれらが今後のキャリアのなかで教育というフィールドに参入する可能性を残すように思われる。それは、教員集団の多様性に資する人材としての可能性を残すことにもつながるだろう。

多様な学生が在籍する総合大学の教職課程であるからこそ、2022年答申で示されたような「新たな教師の学びの姿」の素地づくりが可能となるのではないだろうか。卒業後すぐに教師になる学生、他職種を経験して教師になる学生、多様な専門性を有する者として教育に関わる学生等に、「新たな教師の学びの姿」を意識した教職実践演習を提供することの意義は大きい。そのことを授業担当者は政策動向や社会動向を踏まえながら常に意識する必要があるだろう。

参考文献

有田佳代子・志賀玲子・渋谷実希編著、荒井久容・新城直樹・山本冴里著（2018）．多文化社会で多様性を考えるワークブック．研究社.

サラ・バーンズ、クリス・バルマン編（2005）．看護における反省的実践 - 専門的プラクティショナーの成長．ゆみる出版.

中央教育審議会（2012）「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf（最終アクセス2023年８月29日）.

中央教育審議会（2022）「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）」https://www.mext.go.jp/content/20221219-mxt_kyoikujinzai01-1412985_00004-1.pdf（最終アクセス2023年８月29日）.

髙妻紳二郎・伊藤亜希子・植上一希・大久保正廣・勝山吉章・菊池裕次・小柳康子・佐藤仁・皿田洋子・篠崎省三・添田祥史・田村隆一・徳永豊・長江信和・野口徹・林幹男・松永邦裕・本山智敬・吉岡久美子（2016）．養成段階における教員の資質・能力向上に関わる実践的取組事例分析－福岡大学の「教職実践演習」における取組のリフレクションを通して－．福岡大学研究部論集Ｂ：社会科学編 vol. 8 , 1 -34.

文部科学省ホームページ「教職実践演習（仮称）について」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337016.html（最終アクセス2023年８月29日）.

本山智敬（2014）．コミュニケーション・デザインの視点からみたファシリテーションの検討－高校生対象の構成的グループ・エンカウンターの事例をもとに－．福岡大学研究部論集Ｂ：社会科学編，vol. 7 , 15-20.

野間川内一樹・中山紘之・山崎和哉（2022）．マンダラチャートを活用した『目標達成ゼミ』の実践報告．岡山理科大学教育実践研究，第６号，99-108.

浦佑大・高井秀明・平山浩輔・髙橋流星（2020）．マンダラチャートの分析方法および活用方法に関する検討．日本体育大学紀要，第49号，3013-3020.

渡辺大輔（2019）．マンガ ワークシートで学ぶ 多様な性と生 ジェンダー・LGBTQ・家族・自分について考える．子どもの未来社.